小宮水心著



美文的書翰文辭林

文友堂發兌

自叙

書翰文の用は、意を達するに在りて辭を修むるにあらざれども、辭を修むるに非ざれば、終に其意を達する能はざるなり。此書收むる所、年立つ朝の慶賀をはじめ、竹外一枝に天下の春を知りそむる江南の梅だより、彌生の櫻は言はずもがな。夏は松風涼しき山邊や瀧の下、藻の花薫ずる磯曲や沙清き濱、或は炎塵漲る城中より、互に自慢の筆。秋は月に紅葉に、野路に鳴く蟲の聲、草の葉末におき添ふ露の玉、さては涼しく搖ぐ書燈の影、冬ならば、小猿にも簑ほしげなる時雨、更けては霰も雪と變り、二の字踏み出す朝の景色一として感情の種子ならぬはなく、是等を妙じく應用し得べくは、如何に筆の花の香の深かるべくや其雜に至りては、細大漏しもやらず、其情と其景との語を提供しおけ

り。若し夫れ、旅行に資する爲には、山の姿、水の影、城市の繁華なる、社寺殿宇の莊嚴なる、園池亭榭の風雅なる、懷古幾多の感慨、天涯旅舍の情緒に至るまで筆の限りを盡したり。凡そ辭を修むるの法は、猶兵を用ゐるが如く然り、同一の文字にして、其文に優劣の差あるは唯、之を使ふの術に巧拙の別あるが爲めのみ。作文に志すの士は一卷の語句を胸中に貯へおき、其意に應じて之を廣く活用せざるべからず、一題目の下に當座の語を檢出するが如きは抑も末なり、余が選せる幾多の語、自ら金玉とは言はざるも、其應用の靈妙なるに至らば敢て金玉の文と化せざるに非ざるなり。

水心しるす

凡例

一 此書の主眼とする所は、最も人の感興を惹く美文書翰の入門にと編し、春夏秋冬雜の五部門の外、更に叙景叙情の資料としては山水、城市、驛路、社寺、羇旅其他幾多の項目を設け、最後には文話を附錄したり。

二 春夏秋冬雜の五部門には、有りと有らゆる題目を掲げ、趣味津々の語のみを選び置きたれば、後段なる叙景叙情資料と相待ちて其言はんと欲する所、其述べんと欲する所、作者の筆に應じて最も靈妙なる活用に資すべし

三 凡そ辭典と名の付くもの、萬事を辨ずべくして然も辨ぜざるが通弊なれども、此書は其弊なからん事を期し、右より左より縱より横より、豫め題を設けて其情と其景とを叙し、初學者は固より、美的趣味の書翰に指染めん人のため、毫も遺憾なく其奥堂に上らしめん事に勉めたり

四　付するに辭典の名を以てし、其用を待つに嚢中の物を探るより容易ならしめたれど、要するに書翰文の解剖書たるを忘れず、常に繙讀手を釋たぬこそ望まし。

五　文話は、最も新らしき方面に筆つけ、起句は如何に挨拶は如何に、また結末の語は如何にと、春夏秋冬に亘りて數多の語を選び本欄と相映帶し、其應用の實を擧げん事に注意を拂ひ置きたり

明治四十四年五月　　著者識

美文的 書翰文辭林

目次

春之巻

○目次

夏之卷

○目次

秋之卷

冬之卷

雜之卷

○目次

叙景叙情資料

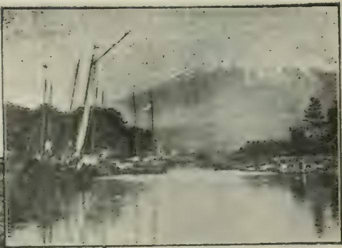
書翰文話

目次（終）

◎梅一輪、一輪づゝの暖かさ、とは實に昨今の時候の事に候べし（三九頁ノ内）

◎日南の椽に雀の聲など聞へ候につけ月ケ瀬あたりの梅、早次の日曜を待たれぬまでになり候事と察せられ候（三八頁ノ内）

◎四方の春景色全く整ひ長閑なる日和と相成申候（三一頁ノ内）





◎櫻花昨今咲きものこらず、散りも初めぬ好さ見頃に有之候（三一頁ノ内）

◎花に憧れてには非ず候も久しき間の御疎遠に御全快との郵箋に接し一同喜び申して候（三〇六頁……）

◎花咲く春には、故郷も夢に入り易く、雨降る秋の夜は、しみ〲悲しき事も胸に迫候はんも、こな忍ぶも勉強の一つにて候ぞ（三〇六頁……）

美文的
書翰文辭林

水心生著

春之卷

○元日……總語

○勇ましき初鷄に去年送らせ候へば、此世は早くも新天地に入り、一點の舊塵を留めず、希望多き曙の雲は東の空に湧くにて候。

○一年三百六十餘日を送るてふ除夜百八の鐘聲、餘韻いまだ消えやらず候て。金鷄三唱して世は淸新の域に入り申し候。

○老いも若きも日出度今日を祝はぬものも御

○春之卷

座なく、分けて新領土の朝鮮には嬉しく初日拜む民多かるべく候。

◎津々浦々に至るまで平和の風吹きわたる今日、先づ壽酒を家翁に獻めたるにて候ぞ。

◎明けゆく空の初鷄うれしげに鳴き過ぐる下には、木の香薫ずる新らしき桶に、若水汲む賤女もあるべしと存ぜられ申し候。

◎實に千里同風四海みな春、都門を距る三百里の此方にも、屠蘇に醉ふ僕あるにて候。

◎豐榮のぼる朝彥子の影うらゝかに軒の雀の囀きも、今日ばかりは聖代を讃ずる歌よと聞かれ申し候。

◎賤が軒端の梅にも初東風わたり奇しき香を窓越に送る嬉しさ。

◎年たちかへる今日と申す今日はいと目出度候。

◎遠近の友より寄せ來る賀詞の、目出度や太平を謳ふ詩歌の筆にはふも床しく候。

○胸に湧く新春の血潮、五彩の箋に灑いで友に寄するの詩となる殊に愉快にて候。

○乙女子等は春衣を試み互に、華麗を誇りがほに、正月は百年の後までも嬉しきものよとの風情、リボンの影に宿るも憐れに候。

○何事も今日よりぞ新たに、月日と學の進みを爭はん哉、と早梅の香流るゝ窓に墨磨り、日記の第一頁に記したるにて候。

▲ 都會より故郷の友へ

○畏くも紫雲棚引く千代田城の邊、朝日まばゆき書齋に筆執り先以て祝福の詞を呈し候。

○屠蘇の機嫌に勢よく筆使ひ、都の春聞え上ぐべく候。

○常には喧しき蹄輪の響き、今日は面白く聞かれ候も、心からとは申せ、我が　大君の御恩に外ならずと嬉しく存じ候。

○紫雲九重の空に棚引きて朝日うらゝかに上り、八百八町の家々の棟には、うね〱と甍の波光りて目ばゆく候。

○遥かに屠蘇の杯を擧げ、相變らずにとの一語を呈し候。

○九陌に行交ふ車馬の響き、今朝は何となく床しく、窓推せば劍光帽影ひきもきらず候。こは申す迄もなく、文武百官の紫宸に朝するそれにて候が、十年の後には僕も必ず個中の一人に加はるべく、今より打ち待たれ候ぞや。

○御溝の楊柳は未だ絲を掛け候はねど、上林の梅花は既に雪を試むにて候。

○千門萬戶にひらめく日の丸の旗に宿る御代の春、祝さでやは。

○今朝こそはと待ち構へし雜煮餅數はゝ問ひ給はゞ年より五つ上を平げ、下宿の家婢驚かし候が、迎へしは十九の春にござ候。

○御地の春は如何、小富士の初日出今も昔に變るまじく存じ候も、君が妙じき御筆待ちかね候。

○都より夢馳するは御島の春にて介殼白う光る屋根に、日章旗の赤う映ずる日に見るやうにて候。

○僕が手紙を待たずして、君は夙に御得意の筆揮ひ給ひ驛使に付せられたるべく、此書とゆき違ふは近くて靜岡、遠くとも名古屋より西にては候まじ。

▲同　返辭　山村より

○都の春を帶び來し一封の御書、只今机上に落ち申して候。

○新春の華札、今日と云ふ七日に着、後れたればとて山村なれば不足申すまじく、早かればとて彼の約束郵便にては嬉しからず候。

○屠蘇加減の御筆縱横自在、讀みても讀みても讀みあかず、千百回も繰返し申して候ぞ。

○春之卷

○山村の新春如何にと問ひ給ふか筆不調法を辭せんも許し給ふまじく候へば、聊か有りし事共を記し御返辭に代へ申すべく候。

○夢に入り易きは都の春にて候が精しき御書にて、少しは心を慰め申し候よ。

○君、都の繁華を誇り給はゞ、僕は亦、溪村の靜けきを自慢に筆呼び心のたけを言はせ申すべく候。

○山高く聳えて初日遲く候へども水は清く流れて元日の門に、太古の樂を奏づるにて候。

○朝夕に見馴れし小富士の姿、年立つ元日には詩趣溢れ、例によりて朝日は其右の肩より上り、新らしき希望の世、しかも江戸の我村を照したるにて候ぞ。

○文武百官の凜々しき姿は見えず候も、眞岡木綿の紋附羽織着し一人二人・山村に異彩を放ち此上なき素樸の風類はれ申し候。

○雪深ければとて春は流石に春、梅も咲き鶯も鳴き、一家異なく新年を迎へ申し候。

○人間の行樂は實に是よりにて、花に鳥に都御自慢のかず〳〵相待たれ候へば、君よ君、必ず筆惜みなし給ひそ。

▲同返辭　海村より

○雪より白き砂濱に杖立て、日毎に初便まちし甲斐あり、今朝の郵便船は君が御書を乘せ來り候。

○東海道五十三驛の春經し朶雲更に一片の小船よりせられ、今朝孤島なる吾手に落ち申し候。

○紫電輝く水晶燈の下に、細々と認め給ひし元旦早々の貴札、腥き漁燈かきたて、五日の夜に卷きつ舒べつ、細讀數回に及び候。

○此處なる春は、例によりて例の如く、新潮紫紺薰ずる岩頭に身を致し候て、偉大なる朝日の光りを

○春之卷

浴び、聖壽萬歲を三呼し、次に君が前途を祝したるにて候。

○南うけの海村なれば、春信殊に早く、稻荷社の朱の鳥居に、白う映ずるは野梅のそれにて、五歲の昔、君と僕との二人に詩歌賦したるものに候。

○長汀曲浦、松原つづきの一漁村何れの軒にも旭旗の影あがり太平の氣象あふれ居るにて候。

○都の車馬は左往右往、大路に塵を颺ぐる由に候へども、此處は極閑靜にこれ有り、舟といふ舟は皆砂濱に引き上げられ、注連飾りの初東風に搖ぐ殊に目出度候。

○雜煮の御自慢により御達者の程承知、今より百日餘の後、墨田の花の頃とも相成らば、詩を釣るとて不覺にも、酒に足取られ給ふまじく候。呵々(御一笑の儀)

○吾里にも桃咲かば詩思湧かん、文に詩に御通信怠るまじく候。餘

は其節にと、草々。

○情思は短筆の盡す所にあらず候へば、清き波の音や青き山の影、共に昔のまゝに候ゆゑ、夜每の枕に上し故鄕を偲び給へや、さらば都の君よ。

▲山村より都會の友へ

○去年の星影戴きて鎭守社へ初詣で終り、君に寄する筆試み候こは初日影さす窓の下にて候ぞ。

○八重山中より例により、賀詞を驛使に托し申して候。

○住めば都とい諺に漏れず、一家擧りて目出度も春を迎へ、和氣洋々と草堂に溢れ申し候。

○世を照すに私なしとかや。壽杯獻酬する間に偉なる初日は瞳々と障子に影映したるにて候。

○氏神の初參詣には他に先越され候へども、龍門瀑に若水汲みしは僕が第一番にて候ひき。

○門に到るの賀客、陸續として絕えぬは御地の事、吾家には鶯さへまだ音づれず候。

○北海の隅より臺灣のはて、さては西なる新領土の朝鮮より、暫し預る遼東の雪の村まで、如何に初日の輝くべきか、いとも目出度は元旦の今日にて候。

○綺羅に身飾る都少女の羽根の音は聞くに由なく候も、一山越えて村校へゆく子等は、節面白く君が代の一曲を唱歌し、溪の小路の殘雪を踏み分くるにて候ぞ。

○吾村にては御承知の如く、雪は珍らしく候はねど、元旦の空に鹽を散せしは今年がはじめにて、俗に所謂豐作の瑞だと、家父は常になく、屠蘇十餘杯を酌まれ候。

○一杯の屠蘇に二十の春を迎へたるにて候が、母は額の皺を喜びに伸ばし、村長の清子樣は如何にとの相談、慈愛は此儀にも溢れ候

へども、夫れよりも兵役が男兒の急務に候はんとて、漸くきり拔けたる次第にござ候。

○御書は疾く、汽車に運ばれ居る事と推し候へども、新年の御慶めでたく申し納め候、との儀式文句にては承知なりがたく、繪を見る樣なる詩的の御返書賜はるべく候

○是よりは追々に好時節に近づき候畑うち飽きし折は鍬の柄に頬杖つき、例の駄句得ば郵箋ハガキを飛ばし申すべく、君も亦上野や隅田の春を報じ給へや。

▲同　返　辭

○墨のにほひ床しき御書、取る手も遲しと封おし披きて拜見、初便待しは獨り君のみに候はざりしよ紙に穴あく迄繰返したるにて候。

○御意の如く、御慶、吉辰などは常套の文字、そが省かれての貴書面白く拜見しぬ。

○山の正月に背くこと五歳、忘れやらぬは瀑の音と氏神の朱の鳥居の影とにて候。

○相變らず都の正月は賑やかに候ひしかど、塵深き處の書齋に舊夢繰返し候へば、山里の靜けき春坐ろ戀しう相成り申し候。

○御地の元日には雪降りしとや、絶景想ひやられ候、此方は紅塵萬丈雪を千金と見ば紅塵は鐚一文に値り申さず候。

○御母上樣の御相談恩愛餘りあり君の御答へ亦宜しく候も、批判は當分御預け願はしく候。

○只今より、咲かぬ花の消息を辭するに非ず候へども、詩歌は此方より、神聖なる田園生活の君に願ふ所に候ぞや。

○精一杯の筆は元日に試み、疾く差上げおき候へば、更に繰返し申さず、如何に讀み給ひしかと承りたきは此方よりこそ。

▲海村より都會の友へ

○此所十戸に足らぬ海村にも初日うらゝかに輝き、數ならぬ吾家にまで大君の御惠み及び申し候。

○莊嚴なる海の初日出、今年は君在さねば獨り拜したるにて候。

○陸を北へ距る十里の小島、淋しとて爭でか御代の春に漏るべき。

◎今日は海穩かに新潮の氣薫じ鷗も眠り破らず候。

○沖にゆき交ふ眞帆片帆、去年の殘夢を載せて何れにか向ふ、それと目には見えず候も、今日ばかりは板一枚に命預けしを打ち忘れ、朝日の下に酒酌み交し、海上に春を迎へ居るべく候。

○初日を受けし白帆は金色に映え八重の海路には紫紺の潮湧く。

○常には怒濤あれ吼ゆる北海の此所、治まるみ代のためしには千里熨したるが如くに候。

○春之卷

○昨日までは海を家とせし漁夫等今朝は草屋の中に一家團欒、村酒ながらも獻しつ獻されつ、み代の春を壽ぐにて候。

○分けて磯山の中腹なる君が御宅には、旭旗高く初東風に影ひるがへり候て、瑞雲棚引くさま繪よりも美しく候。

○新らしき年迎へ候ては、神心共に淸く、新たなる世に生れ出でし心地致され候。

○磯邊に打ち寄する波さら／＼と讃美の歌と聞かるるにて候。

○虛子氏の句を其儘に、酒もすき餅もすきなり今日の春、都は如何承りたく候。

○學校よりの歸りにや唱歌の聲、元日の松原に高う聞え候て、一入の風情を覺え申し候。

○一休が洒落し、門松を冥途の旅の一里塚とすれば、今朝は十八里を無事に辿れるにて候。

○梅も咲き鶯も初聲もらし候が、君に贈りたけれど其は叶はず、自慢の一つに書き添へし迄にござ候

○今し初船試み村へ渡らんとする小島の眞晝、先は筆とめ申し候。

△同　返辭

○沖の小島よりの御便、海山越えて只今着、先づ目に入りしは十八里無事にて、新らしき世界に着き給ひし一事にござ候よ。

○太古のまゝなる磯村の春、詞の花咲く君が才筆に描き出され、何れも面白く讀まれ申し候。

○濤聲鷗語今日はしかぐなりしと、妙じき筆に上し給はざりしは、僕に思はせぶりの故意にもや弘法も筆の誤りと言ひぬけ給ふとも、そは決して許さじ、ゆるさじ。

○柳の渡にて、さらばと袂分ちしは既に一と昔、僕は十回目の春

を都に迎へて元氣よく候。
○松原の唱歌、今宵の夢路に聞くべく、都大路に塵あぐる車馬のひびき厭はしく候ぞや。
○今も尚忘れ難きは水や空、空や水なる八重の汐路の底より、悠々と差上る朝日の影にて候。
○御地の靜けに似ず、都は年々騷々しき春のみにて、人をして俗ならしめ候へども、無事に卒業せば櫻の頃には歸鄉の吾身、是ばかりは嬉しく候。
○吾が假住の家は最も高處を占め詩筆に形容を借らば、富士を背に致し朝日拜まるる處に候。
○例の癖として又も筆に上し候へども、今年こそは必前に倍して勵み申すべく、そは語學と云はず詩文と云はず、御通信する事にも怠り申すまじく候。
○帝都の春の賑ひと僕が感想とは添へおける日記抄にて知り給ふべ

く、餘は永陽を期し候、頓首。

▲試筆に添へて

◎元日は夢のやうに暮れゆき、別紙は二日の朝の書きぞめ、出來の是非は暫く措き、趣向は聊か凝せる心得にござ候。

◎例により試筆御覽に入れ申し候へば、御批評下され度候。

◎吉書とは名のみ、其實屠蘇に元氣つけての戯書、固より詩も書も見るに足らず、御笑資に供したるに過ぎず、萬一にも御評を得ば此上なき研究の料にござ候。

◎寶船の畫は次郎樣に呈したるにて候が、初東風孕む帆は學びの港へ向ふにて、積載せるは圖に示すが如く、文學、法律、算術、商業等と申す十幾個の寶の俵、御好みのを擇び給へとの寓意にござ候

◎別に添へしは、明けて三歳の妹が書き初め致せるもの、いの字のピンとはねし處を賞め呉れ給へや

無邪氣の點も其處にほの見え申すべく候。

○文學を擇び給はゞ志操を高尙に法律ならば條理を第一に、算術ならば應用の先に、商業ならば信用を守れがし、と近所の老人が申されし儘、說明の不足なるに代へ申して候、此に添ふるは如何はしく候へども、自ら忘れぬ爲にと思へば斯く。

○御返辭には必らず〳〵、御得意のもの願はしく、畫と云はず詩歌と云はず、み興湧くまゝに揮ひ給ひしもの然るべく候。

▲同返辭

○御惠投の御試筆風韻淸高、斯樣なる出來ならばとは失禮の申し分に候へど、屠蘇に元氣を假る亦惡しからずと存じ候。

○見れば見る程、御胸中の風月いよよ慕はしさに堪へず候。

◎批評試みよとの御意なれども猫に小判の喩、斯道に無經驗なれば盲評をも得せず、披く儘美感に打たれ候ひしは、御筆すでに蘊奥を極めし爲に候はん。

◎御妹君のみ手に成りしいの字、確かにピンと應へ申し候、御返辭に代へては、弟をして書かしめたる、ろの字御覽に入れ候が、是は又グンニヤリと圓く、田舍娘の下品なる束髮に似通ひ居り候。

◎深遠なる御寓意の寶船の畫、十分に敬意を拂うて拜見、弟は文學俵を分ち賜はれとの返答、十年の後には君必ず寶船の主となり、美事に學海を横斷し、文學の港に安着させ吳れ給へと、今より希望する所に御座候。

◎僕に試筆をと望み給ふか、詩趣は解しながらも畫下手、歌下手、書も亦下手、高意に背く樣なれど今年は御預け願ひ上げ候。

〇春之卷

◎固より御返辭に値する作に之れ無く候へど、新詩題をものにしたるが取柄にて、二十八字左に、

別墅借樓接酒家
當年靜境日繁華
喫驚隱々輕雷起
一綫春風紫電車

申す迄もなく、天王寺附近の實況を賦したる積りに候へども、電車の事よく聞え申すべき乎、呉々も靜境の俗化嘆かはしく候ぞ。

〇歌留多會の檄

◎待ちに待ちし詩歌留多會はいよ〳〵明日午前十時より相開き申すべく、合戰の席は僕が立てこもる梁山泊にて候。

◎明日午後早々、雲山寺の書院にて、小倉會の歌留多合戰開きたく候間、腕によりかけ御出陣下さるべく花形の君來ずば戰場春めき申さず、必ず〳〵陣頭に立ち給へ。

◎百人一首は陳腐なりとて、去年結びし漢詩歌留多會、完全に戰鬪準備終へ候へば、來る五日早朝を期し、銀水樓にて敵味方會合の筈、君は固より吾軍の驍將、早々の御出陣、今より促しおき候

◎去年は敗績致し候へども、勝負は固より時の運、同士申し合はせ今年も亦拙宅にて開戰の筈、豎子何くに居るぞと例によりての大喝一聲、單騎と一軍を提げてことを論せず、ひし〳〵と御攻め寄せ然るべく、霸を爭ふの戰場には少々狹く候へども、二十餘人を容るゝには餘りあり候、日は來ん七日、時刻は午後六時、固より徹夜の覺悟にて、篝火に代ふるには竹よりも太き蠟燭焚き申すべく候

◎風流子主催の下に例の會、明五日に開く由、力味返りて通知致し來り候、更把玉鞭雲外指、斷腸春色在江南。然り、敵は

○春之卷

江南に在るに非ず、川向の銀水樓に陣布けるにて候ぞ。

◎御鍛錬その極に達し候はん、强敵を見て退くは戰士の耻づるところ敢て明日の御出馬申し入れ候。

◎夫婿をして封侯を覓めしめしを悔ゆとの一句之れ有り候も、そは支那の昔の小婦の嘆、今は自ら陣頭に立ち見はれ、チャンピオンの地位望む女將軍も御座候間、必ず御會戰待ち入り候。

◎餅、蜜柑、元氣を呼び起す爲には正宗の瓶詰なきにも非ず兵糧御携帶に及び申さず、但し、繃帶は御勝手に任せ申すべく候ぞ。

◎呉々も敵に後を見せ給ふ勿れ、萬一にも稽古積まずと逃げ給はゞ末代迄の耻辱と申すもの、一朝緩急あらば、君は矛執りて起ち給はざるか、如何に〳〵。

◎敵は破竹の勢にて攻め寄せ、永久築城の吾壘危し、烏合の兵は望

まず、君一騎は萬人に當り申すべく、片時を後らし給はゞ會稽の恥を重ね申すべく、防戰なしつゝ飛檄此の如くに御座候。

○同返辭

○風流極まる漢詩歌留多會の檄待ちし事とて嬉しく拜見、雜兵も物によりては戰場の賑ひに相成るべく、御指圖の時刻に先だち必ず軍門に馳せ參ずる心得に候

○花形とは少々恐れ入り候へども小倉會に一命を捧ぐるに吝ならず最期の花咲かす覺悟にて、午後早々吾家を辭し申すべく候。

○遠慮は物と時にこそよれ、父子兄弟にまれ、敵と呼び敵と呼ばるゝは、義を重んずる我國古來のならひに候へば、先登は誰にも讓り申すまじく、紅白何れの軍に屬するかは抑も未定の問題に候へども君には背かず出陣致すべく候。

○春之卷

◎一夜仕込の腕には候へども、命に任せて馬躍らせ、當の敵に度り合ひ申すべく候。

◎犇々と攻め寄せよとは、君なればこそ、三軍率ゐるは易き事に候も、斯くするは吾が名折れ士氣昂れる君が軍を蔑するに非ず候へども、久々の腕だめし單騎驅りて一汗かきたく候。

◎古來征戰幾人カ回ルとの句の如くに沙場に骨を曝すは覺悟の前、先づ夜光の杯に葡萄の美酒を盛り、悲歌一曲を吟じ、君が軍に從ひ申すべく候、そこで、醉テ臥ス沙場ニ君莫レ笑にて候。

◎兵糧御用意との事に候も、萬一不足にもならば御同樣、眞の戰爭は出來間敷、大英雄氣取り共通の意志にて、此品差し上げおき候、餘は砲烟彈雨のそれにも比すべき白き手、黑き手、織り成す風流の戰場に讓り申すべく候。

○生が豫想よりは敵強く、流石の堅城も危しとの事に胸躍らせ候へども、此方には不意討ち酒敵を控へ、最も苦戰最中、彼れ降るか吾れ降るか、今の處にては勝敗決せず、倒れぬ中に媾和成らば共に急に赴くべく、斯界に今正成と名賣りし君、暫し御支へ願はし。

○急報拜見、直に馳せ參ずべく候へども、死すればとて其場所さへ得ば御名譽にて候ぞ、拜復。

○春寒見舞

◎春とは名のみにて、處々の高山には殘雪消えやらず候て、折々は霰さへ降る此頃。

○梅咲き初むればとて、野鶯はまだ聲冴へず、殘寒料峭として凌ぎがたく候ところ、

○天地春尙淺く、殊の外なる寒氣如何にして此頃を過し居給ぞや、御樣子承り度候。

○世は春ながら餘寒未だ退かず候處、御起居如何伺ひ上げ候。

○江南の御地は梅日和打ち續き候事とは推しながら、此處北海の寒さに引き比べての老婆心、一書奉呈致し候。

○竹外一枝に春を認めながら天又寒う、東風料峭々として微雪を送る昨日今日、名にしおふ寒國の御住居、御老人樣はじめ御一統樣には御健勝にか。

○紅紫とり〳〵、花の世と變りゆくは此處四十餘日の後に候べけれど、凌ぎがたきは此頃の餘寒。

○此上ながら時下御保養專一、梅の盛りにも相成らば近郊に御伴願ひ上ぐべく候。

○此品、灘の詩友より贈り越せる一瓶、封きり給はゞ春日忽ち御顏に上り申すべく候。

○同返辭

◎貴諭の如く殘寒嚴しく、立ろに百杯を傾け候ても凌がたく候

◎此處江南の地も尙寒く、未だ梅を傳ふるの驛使まゐり申さず御推量は少々的を外れたるにて候

◎何れも御無事とや、此上もなき御仕合はせ、先賀し奉り候。

◎御地と此處と、其寒氣の深淺は測り難く候へども、四方の山々は尙白妙の雪を戴き居り、軒端の梅には東風吹き渡らず候。

◎老ひし身は殊の外に寒さを感じ候て、炬燵を友に句案ずるが日毎の閑課、年は取度も無く候

◎子等は尙、手の甲を赤うして雪達磨しつらふる此頃、春寒の說明も無用に候はん。

◎昨今の殘寒、村酒の價をして高からしめ候へども、一家擧りて健全なるが嬉しく候。

◎自愛は御互に怠るまじく、待たるゝは梅日和にて候ぞや。

○御恵贈の一瓶、優に貯ふ不老の春、即座に封解けば芳冽の氣紛として忽ち鼻を撲ち候。

○御恵みの美釀、殘寒を劈く名劍とも申すべく、正宗とは善くも銘せるもの哉、にて候。

◎花期　問合 報知

▲梅花

○山秀で水清き仙郷の梅は昨今如何今年は是非〳〵、畫中の人となり度候へば、消息伺ひ上げ候。

○打ち續く梅日和、御地に夢馳すること急なり、開いて八分に至らば御報煩したく候。

○今年は更に舊夢を溪上の小亭に繰返し度ぞんじ候。

○御地の梅花に背くや久し、見頃にも成らば一遊致し、花間の月影蹈みたく候。

○心ゆくまで月下に徘徊し、俗腸を洗はばやと存じ候。

◎横斜疎影、浮動暗香先づ心に描かれ候。

◎僕は花の多少を論ぜず、君が草庵を月に叩くを喜ぶものに候へば梅見頃なり、との五字必ず恵み給はるべし。

＊　＊　＊　＊

◎君が清夢を勞せし梅花、昨今見頃に相成り、殊に月夜に候へば必ず詩筆を載せ給へや。

◎拙堂翁のために名をあげし此處月瀨今し五六分の花に候。

◎岡本は往々俗と嘲る人あれども碧波に臨みて眺望よろしく分けて御希望の地、今し花は淡紅の唇を綻ばすにて候。

◎花下の榻に月迎へ、一夜を詩談に明すも妙に候はん、そは君と僕とにあらずば不可必ず來ませや、うす寒き東風に袂ひるがへして

◎筆硯御健勝にか、豫て御待ちかねの梅、漸く竹外一枝に春信

○春之巻

を漏し候、早々の御出遊をと。

◎雪かと見紛ふ盛りは、幾日かの後に候はんも、名たる勝地の事とて、其頃には俗人雑沓致すべく御清遊には昨今が第一。

◎一村皆花に埋もれんとする處、早々に駕を命じ給へ、例の橋の袂まで御馴染の鶯姫出迎はせ申すべく候。

◎風香ばしく月も亦白く、花又花の十五ヶ村、君は固より佳人に意あるの士、一日たりとも等閑に付し給ひそ。

◎花の頃にも成らば、必ず報知せよとの御一言、若し背き給ふことも有らば、承知なるまじく候。

◎必ず詩瓢肩にせん、花咲かば一片の郵箋飛せよ、との御意なりし儘、驛使に托して斯く。

◎櫻に比しては、花期稍長く候へども、善は急げよとの下世話、殊に八分の花、興は十分に候ぞや

▲櫻花

○横笛の清韻に落梅を弔ひしは昨日の夢、世は花のうはさとりどりに候が、御地なる芳野の花信は如何、今年こそ霞の奥のおくまで迷ひ入りたく候。

◎四方の春景色全く整ひ、長閑なる日和と相成申候。

◎櫻花昨今咲きものこらず散りも初めぬ好き見頃に有之候。

○千萬本の櫻に、限りなき懷古の涙を灑ぎたく候。

○四時の勝に富める嵐山、花は雲を尾上に棚引かし初め候か。

◎十年振に嵐山の花訪ひたく、昨今の春色如何、僕は必ずしも滿開を待たず、半開のものに淸賞を買はんと致すにて候。

○去年の御約束は雨に流れ候へども、今年こそは雨降ればとて流し申す間敷、見頃の御報願ひ上げ候君よ、幸に便してよ。

○春之卷

＊　＊　＊　＊

◎碧梅すでに謝して、東山の櫻は雨を經て紅粧を試み候ひしが祇園夜櫻の盛にて候。

◎鐵道の廣告は、幾分か騒しげの色氣あるにも致せ、吾地の芳野は花咲きそめ申し候。

◎花のトンネルを現ずる迄には尚餘日候はんかなれど、早ければとて花神も拒絶は致すまじく候

◎吾家に詩嚢を預け、滿開の日を待ち給へ、微雨來らば一夜にして香雪山に溢れ申すべく候。

◎今し嵐峽は、御望み通りの花信に候、明日にても汽車の客となり給へ、電車にても亦悪しかる間敷沿道の春を錦嚢に盛り給ふには後者最も宜しかるべく候。

◎洛中洛外、到る處みな花ならぬはなく、青きは加茂と桂の流れのみ、嵐山は言はずもがな。

◎又しても雨の樣に候へども、此

日曜を逸し給はゞ一年の春は水泡に歸すべく、僕は君が土人形たるを笑ふべく候、例の君ゆゑ、然り張子なり、と語を代へ逃げ給ふべけれど、雨降ればとて流し申す間敷との、一語を如何にすべき。

◎花は花として、兎も角御一遊まち上げ候、瓢のみにての櫻狩御意に召さぬとならば、千鳥ケ淵に妙妓載せたる舟泛べ候て、水晶簾を漏れ來る花片を、美事御手の酒杯に灑がせ御輿添へ申すべく候

▲桃花

◎梅には梅、櫻には櫻、桃には桃の趣の存するにて、生は一日を武陵仙源の人となりて暮したく候、御園のは咲き出で候ひしか、伺ひ上げ候。

◎桃の花は貧家よし、草舍よし、溪犬の聲に亦宜し、御地より一山越えての桃林は如何、一日御先導煩したく候。

○春之卷

◎花氣蒸して一天の絳霞を成すは程あるまじく〳〵と斯く。

◎細流ちよろ〳〵と柴門を繞りて流れ、幾樹ともなき碧桃に圍まれし御閑居訪ひ度。

◎御返辭願ふは少々念の入すぎし事に候も、若し御不在の門叩かば此上なき不本意なればにて候。

◎島の桃は分けて興あらん、花期十分とならば小舟におぼえの棹執り申すべく候。

＊　＊　＊　＊

◎昨今、桃花のみに候はず、菜花は黄金を地に布きつめ、春は碧浪を岸に打ち寄せ、一村は畫中に入り候、桃花のみの御掛合、流石は都そだちの君に候かな。

◎絳霰に包まれし一村、鷄犬の聲幽かに漏れ、げに人間の外にて候何日にても御案内辭せまじ。

◎草舍御氣に入りての御出遊にか生は常に在宅に候へば、御閑暇の

節に麥浪おしわけ、細流に沿うて訪ひ給へ、詩履にて千年の庭の苔破り給ふとも不足申すまじ。

◎御存じの桃、今年は最も花宜しく、御知らせするに後れしを謝し申し候、今宵にても月に棹さして黄金の波砕き給はれ、錦繿は直に花に繋がれ申すべく候。

○梅花……總語

◎梅花は格高く韻勝り居り候へば、横斜疎影と老枝怪奇なるが最も賞するに宜しくして且つ貴く候。

◎春のあとは先づ日向の一枝に見え初めたるにて候。

◎梅一輪、一輪づゝの暖かさとは實に昨今の時候の事に候べし。

◎梅花春に魁して漸く皓き齒を啓けば、鶯も谷の戸を出で、村への旅行試みんとする此頃。

◎東風に綻びそめし一二輪、いと

○春之卷

憐れに眺めらるゝにて候。

○さながら春星（ウメノミタテ）の三點五點小川の岸に輝くかとも怪しまれ候。

○苔清く沙明かなる邊に到れば風韻尤も高く、斜に月を掛け候ひては、晝も亦及ばず候。

○月の黄昏（ヒノクレ）に宜しく、雪の清曉に宜しく、水邊の竹に宜しく、到る處宜しからざるは無く候。

○清き流れに、春の影鮮やかに搠べば搖ぎ、風情限りなく候。

○庭の梅朝毎に花の數増し、はては千萬點と數知らず、月上れば丸窓に横斜（ヨコヤナヽメ）の影を映すにて候。

▲梅花を贈る

○例により一枝持たせ上げ候、御名吟釣らんためにて候。

○今朝疾く起き出で候て、殘月に和して折りたるが是れ、手かけぬ前は枝振よしと思ひしも、小首傾けて眺め候へば、普通の梅、只花の大輪なるを賞し給へや。

◎只の一枝に候へども、今朝までは殘月を掛け居りしものぞと、御推量願はしく候。

◎室咲かせに、御目は疾くに肥え給はんも、吾が荒れし庭に凛々しう咲ける野梅と思さば、格別の詩趣湧き申すべく候。

◎花は小なるにもせよ、苦寒を經て春を成せるか愛づべき點、幸に御嘉納を得ば、榮譽は啻に僕のみに止まらず候ぞ。

◎千枝萬枝折り盡くせばとて、吾家の春に損益これなく候も、ならば駕を枉げ給へ、詩談に一夜を更し申さん。

◎書けばとて、吾が心の十が一を盡しがたく候へば、何事も此花に問ひ給へと、筆とめ申し候。

▲同返辭

◎御心に掛けさせられての一枝、見るからに詩思頓に動き、俗腸

を忘れ申して候。

◎早速に瓶に挿し候に、異香萬斛にて候、書齋は春色に滿たされたる其の内一絕にても得ば、御厚意と花神とに酬い申すべく候。

◎唐花に目肥えたらんとは全くの御謙辭と申すもの、御推察に違はず、清香と共に詩情は確かに潮の如くに湧きたち申し候。

◎來よとの御書なくとも、御禮かたゞ不日に參上、心ゆくまで清香に醉はん考にて候。

◎こは隣僧より今朝惠まれし水仙梅とは緣深ければ二本三本御分配致し候、然ればとて、御返禮と申す譯にもあらず候。

▲探梅誘引

◎日南の椽に雀の聲など聞へ候につけ、月ヶ瀨あたりの梅、早次の日曜を待たれぬまでになり候事と察せられ候。

◎野寺に茶を乞ひ村店に酒酤むは此頃に限り候、只今より探梅如何方向は南より北より、只足に任せ申す考にござ候。

○梅信は未だ新聞にも上らず候へども、其處が所謂探梅、巾角をうす寒き風に吹かせながら處定めず、逍遙せば、思はぬ拾ひ物せぬにも限らず候。

○若し夫れ、獨木橋の一字形に横ふ邊に、細流清く水晶を碎き、仰ぐ竹外に一枝を認めば、興は喩ふるに物なかるべく候。

◎萬一、梅に逢はずとも一二首の詩歌は拾ひ得べく、半日を郊外に暮すも亦、損ならざるべく候。

○探梅とは名のみと、非難の口叩く俗人も之れ有り候はんが、そは固より取るに足らず、五合入の詩瓢を横に倒せば此上なき滿足。

◎百花の時節は俗士に讓り只僅かに數點の梅を得ば可、御出遊

促し申し候。

○俗に乖くは詩人の眞面目、探梅は固より吾々の得意に候はん。

△同　返事

○御出遊の御趣旨よく分り申し候とも角御伴仕るべく、路順なれば僕が柴門ほと〳〵と叩き給へ。

○今朝、花屋の話には、處々に梅開き居る由、一たび郊外に身を致さば、初鶯に案内乞ふも亦風流にて候はん。

○瓢を横にするは誰しも目的の一然ればとて、梅にも遇ひ度候。

○梅の有無を論ずるは無用の次第霰降らば降れ、雪とならばなれ、まづ以て野風に履迎へさすが宜しかるべく候。

○醉はば吟じ、醒めなば酌み、野寺となく村店となく、遍く經めぐり度と存じ候。

○餘の儀ならば知らぬ事、斯樣な御誘引に、誰か頭を横に掉る

べきか。

▲觀梅に請ず

◎吾家の梅か、梅によりての吾家かと先年御評下され候ひし古木、千萬點の星かと疑はるゝばかりに滿開致し候。

◎常には淋しき城南の吾が假住居今年も亦梅咲き賑やかに相成り申し候、分けて花は、細かに水精の玉を綴れるにて候。

◎年毎に靜境を荒すなどゝ嘲りながら、往來には至極便利の電車有るにて候。

◎折から月夜に候へば、深更にまで觴詠するも興あるべく、御相手には、例の詩僧招き置き候。

◎筆に任せて御來駕促せばとて山海の珍味を供するには非ず、晝は野鶯の歌と夜は山月の影、風に送らるゝ清香は固よりの添物、成らば御土產に差上げ度程にて候

○春之卷

◎御承知の盆梅二三十種、春に後れずして滿開致しその白きは雪を醸し、その紅なるは珊瑚を綴りたるにて、掌大の庭園香世界と變じ申し候。

◎佳賓としては君の外たゞ一痕の月を黄昏に迎ふるに過ぎず候

◎久しく詩筆擲ち居りし生、梅の咲きしをしほに雅筵催したく、御來臨を得ば草堂の光榮これに過ぎずと御案內致し候。

◎明日は疾くに門うち淨め、御車の塵颺るを足企てゝ待ち居り候。

▲同 返 事

◎名木の梅咲きしとての御招き有りがたく、萬事さしおき淸香溢るゝ御門叩き申すべく候。

◎龍鱗をたゝみし古梅、枝といふ枝、美事に玉を綴れる由。

◎御指定の時刻に後れず參上、飽

くまで清き香に醉ひ、胸中十斛の塵雪ぎ申すべく候。

〇此頃俗累多く、詩書は塵を埋もれ候へども、御園に養はし佳人には、必ず背き申すまじく候。

〇月上るまでは御邪魔恐れ入り候も、餘人に後れず參上仕るべく候幾重にもとり〲の御準備は御無用に候ぞ。

〇明日は御末席を汚し、香世界の一人と相成るべく候。

〇御淸集に陪したきは千萬の心に候へども僕近來塵事多くて其意を得ず、其內參上致し候て御厚意謝し申さん。

〇雅兄には、再び詩筆執り給ふとや、此一事以て吾軍の詩氣を皷舞するに足る、萬歲〲明日は是非參上、例により首捻り枯腸探り申すべく候。

〇今宵の夢は何處と問ひ給ふべか

らず、雪は色を含み、風は香を引くの御園に落つるにて候。

○餘儀なき事之れ有り、御定刻に間に合ひかね候も、黄昏の月には後れず、花前に韻を捻るの人と相成るべく候。

▲同禮狀

○果せる哉、梅より外にとり〴〵の御準備、謝するに辭なく候。

○昨日は名流に陪するを得、淸興尚忘れがたく候。

○主客何れも風流の御延に侍し候て。神骨ともに淸らかに月夜の幽景なほ眼前を去らず候。

○歸後に衣を振へば花片の一つ二つ、袂より零れ申候。

○寢後も尚、枕上に横斜の影を描き候て、夢は終宵御園の花下に逍遙ふたるにて候。

○酒にて詩釣らんとて却て逆に酒に釣られて賦成らざりしに、今

朝程やッと一首を得、御禮のしるしにと御覽に供し候、末筆ながら鶯姫にも月姫にも宜しく。

△觀梅誘引

○御同樣に待ち焦れし月瀨の梅は八分の花信にて、南岸北岸みな香雪に埋められ、碧なるは一帶の五月川のみに候由。

○君若し眞の詩人ならば必ず來よと月瀨山人よりの招き。

○未だ其境に臨みし事なけれども十五の村落ゆけども行けども花の盡くる所を知らずとか。

○舟を溪流に放ち候はんか、南岸白糢糊、微風の吹き渡り候はんか暗香馥郁、夜景殊に宜しき由。

○行手は香雪に鎖され候て、路も無きかと疑はるゝに、野橋斜に架りて客を迎ふるも一興。

○醉はゞ清流に口すすがん、醒めなば溪亭に酒酌まん。

○何れ一夜を花下の宿に語り明す筈にて、歸路には笠置に南朝の遺跡探らん心得。

○岡本の梅は淡紅にして俗とは申せ、小丘により大阪灣に臨める點亦他に異なる風景に御座候。

○某地の梅花は盛りの由、日曜の一日を、苔青く沙白き邊に花見て暮したく存じ候。

○竹疎らに花密に、細流小琴の音をなして路幾曲、此界隈にて名ある勝地に候へば。

○花は語らずとも文藻を養ふには餘師とすべく、况して好音を送る黄鳥もござ候はん。

○梅のみか水清く山秀で、此世ながらの仙境にて候ぞ。

○歸るさに迂回せば某温泉も之れ有り、かた〴〵一遊するの價値は十分にて候へば。

○君には固より一も二もなく頭を竪に振り給ふべけれど。

◎同遊せんとは日頃よりの御約束共に月に歩して梅影を蹈み、仙人めきし遊び實現致したく候。

◎水に臨むの一枝、斜に月懸くる景色想ひ出でゝは遊意やみがたく御誘ひ致し候。

◎此の行に君もいませば、酒に詩に寂寞を感じ申すべく候へば、御左祖あれかしと一統希望いたし候。

◎勢揃へば城外なる梅寺の門前にすべく、偶然の事に候へども、梅とは極めて緣起よく候はずや。日は幾日、時刻は午前何時にて候ぞ。

◎假初にも、一夜を餘所に送る次第、御兩親へも御相談の上、否の御返書待ち入り候。

▲同　返辭

◎風流なる御誘引、爭でか辭せられ申すべき、即座に御同意を表

○春之巻

し候、何かは一應拜芝にてと。

○月瀬の梅に憧れしは茲に幾年ぞ衣を天狗岩の絶巓に振うて一長嘯白雲を躡まざるべからず候

○眞の詩人ならずとも、一度は遊びて損にはならぬ梅花第一の月瀬一風變りたる山人に花持たせて然るべく候。

○古來、名勝は其實に乏しく候て月瀬も或は其類かと存じ候へども流暢なる美的の御書に接しては御同意せざるを得ず候。

○君漏さばとは、御念の入りたる御一語に候へども、例のまけ嫌の氣性、御希望とならば酒も詩も御相手仕るべく候。

○花下に宿るも宜からん、笠置に迂回するも宜からん、唐、天竺迄も御伴願はん。

○某地は少し道程遠く候へども。草鞋に足喰はれて跛引き月を、肩に懸けて歸るも亦、黄金にて買ひ

難き興に候はん。

◎然り、梅寺とは善き縁起、一句なかるべからず候。

◎君が御越しならばヽ兩親よりの許可を得候ゆゑ、御連中へも然るべく御傳聲願はしく候。

◎何爲ぞ花神と縁甚だうすき去年は金熊寺の梅にそむき、今またヽ近き岡本の梅に遇ふを得ず候。月下の仙姫、僕が詩に拙なるを忌むにや、御歸後の淸談に遺憾晴し申すべく候。

▲觀梅歸後友に

◎觀梅して只今歸宅、呉々も一行に君もらせる悔み、鶯聞くにつけ酒酌むにつけ、御噂やむ時なかりしにて候。

◎月瀨の梅は流石に多く、形容するの辭を知らず候へども、見樣によりては、欲深き俗人に滿足與へ間敷と存じ候。

○春之巻

◎委細は紀行にて御承知願ふべけれど、此一枝こそ仙郷の片影、詩思を逞うし給はゞ、千溪萬谷、忽ち枕上に現ずべく候。

◎月瀬の梅は禁ありて折るを許さず候も、君が爲に風流の盜となりし僕、枝の小さきを咎め給ふべからず、着ける長き苔は千古の雲の影凝り春毎の香露のそれに育ちしものに御座候ぞ。

◎只今岡本より歸宅、御無念晴しの料にと、一枝奉呈致し候、呵々

▲同　返辭

◎御清遊を終へ御歸家とや、定めて水邊に竹外に將月に、佳興盡きやらざりし御事と艷羨に堪へず候。

◎御恵みの一枝有りがたく。試みに默想すれば、仙境の風光眼前に浮ひ出で、花は香を放ち月は明かに、溪の流れにも聲あるが如く

此身忽ち羽化の仙かと疑はれ申し候、何かの御禮は參上にてと。

◎十五村の春、御惠贈の一枝に宿り、風香月白の勝、先づ心に描かれ候、禁犯せしとは、風流ながら鶯より外に洩れまじき事に候。

○櫻花……總語

◎一年の清賞たる梅花は漸く老いて節は櫻花に入り候。

◎梅散りて櫻花咲き世は艶なる眺めと相成り申し候。

◎遠く望めば霞の如く、近く見れば雪に異ならず候。

◎七重八重種々に咲けるが中にも松の木間に一簇白き、山櫻の單なる殊に賞づべく候。

◎雪か、雪にあらず候、雲か、雲にあらず候、香風水を渡りて來り其花なるを知らるるにて候。

◎春風一たび櫻花に入れば、都下

百萬の士女、みな之が爲に狂するにて、陸に水に一年の繁華を鬪はすにて候。

◎櫻は我邦の花王、國色と誇る牡丹は遂に後塵を拜するに過ぎず、分きて武神の權化、武士道の精華と尙ばるゝ花に御座候。

◎朝日に匂ふは格別の事に候へど夕日の長江に舟流し、斜に見やるは又なき風情に候はん。

◎其散るに際しては、面を撲つも寒からざる雪にて候、衣を掠めては輕く香あるにて候。

◎開いては一簇の雲を漲らし、散りては萬片の雪を飛ばしむる憐れさ、畫にも書きがたく候ぞよ。

◎月になりゆく櫻が岡、疎鐘の聲搖げば風なきに散りて斜に流るゝ餘情限りなく候。

◎風に狂うては渦卷く花の波、其處に野僧の立つとせば、風流譬ふるにものなく候。

◎花期の長からざる實に千古の遺憾に候へども、櫻の櫻たる所以は畢竟此處に存せずんばあらず候。◎雲とも雪とも見し尾上の花、散りては跡なき春の夢にすぎず候。

▲櫻狩に誘ふ

◎歌書よりも軍書に悲しき吉野山の櫻、一雨を經て雪漲らし候由。◎歷史に名を揚げしが芳野に候はゞ、浮名を桂川に流せるは嵐山に候はん、要するに、名勝としての甲乙は勿論なかるべく候。◎向島の花は俗とは申せ、俗をして詩化せしむるは詩人の本色、一遊せばやと存じ候。◎陸にて俗人の跡追ふもよく、水に風流の舟浮けても宜しく候。◎東西の花、淸く流るゝ澱江を挾み遊を船に擇み候はんか、櫻祠と造幣局との春色を、三間に足らぬ水棹に賞し得べく候。

○春之巻

◎芳野や遠しとならば、程近き嵐山にして苦しからず、旁御返書まち入り候。

◎春の一日を嵐山に吟じ暮らし候て、夜に入らば電車の客となり、宇治方面の景色をば、硝子窓越しに眺めてはと存じ候。

◎一夜の春を加茂川添の旗亭に明し候て、翌日には東山の花探りさぐりて清水にとゞめを刺し、緩く々歸りても宜しく候。

◎何れ覺悟の花の旅、詮じつむれば命の洗濯、二日が四日にならうとも厭ふべきかは。

◎飛脚の様にしての花見の旅ならば、閑暇に苦しみ給ふ若御隠居の君を、何しに御誘引致すべき。

◎花と申せば芳野か嵐山、遠くは隅田の春に候へども、如何に交通開けたればとて、千里隔てし此處よりは問題にならず候へば、一川渡りて天神森に參りたく候。

◎名のみ優しき櫻の宮、花も極めて少なく候へども、造幣局のは稍觀るべし、御國土産に御一遊如何何時にても御伴致すべく候。

◎急に思ひたちし櫻狩、酒肴は疾くに準備ずみに候まゝ、御出掛け待ち上げ候。

◎袂聯ねて花の霞に迷ひたく、若し香に醉はゞ醒すに苔の淸水あるに候はずや、是非に吉野行御伴致したく候。

◎御返書後れもせば、花は野路の塵とや化せん。御猶豫は罪淺からずと、書き加へ置き候。

▲同返辭

◎古跡としての吉野、名勝としての吉野、詩と涙とを骨子に、誰しも第一番に櫻狩試みたく候。

◎若し御伴する事にも相成らば、お里が名殘の鮓屋にも立ち寄りて見たしと存じ居り候。

○春之卷

◎多武峰も櫻に宮のある由、此處にも御案内願はれまじく〳〵や

◎人生の行樂は三春に如かずと双手を擧げて大贊成、太郎も次郎も御邪魔する筈にござ候

◎何れ雜踏は逃れぬ花の向島、詩人ぶらずに俗氣取りたく候

◎花見は扁舟を傚うて妓を載せて遠く眺むるが第一かと存じ候

◎御誘引の櫻の宮の花見、御伴願ふべく〳〵、歸るさには舟して造幣局の櫻をば、夕日に照らさせて眺めたく〳〵、此儀御承引あらせらるゝか如何に

◎遠く〳〵ても近くても、一日の暮れ易きは花見にて候へば、月漏る櫻が下に夜あかすも苦しからず、何處までも御伴せん覺悟に御座候

◎一日ならば花に多忙を預け候はんも、翌日にかけてならば都合宜しからず、此儀ばかりは白髮頭を横に掉り申すにて候

○飛脚の一語、先づ吾が意を獲たり果してその御都合ならば、二日は愚か、奈良より和歌山にかけての旅にても、後へは退かず、此動議如何や、折返し承り度候。

○何かは後刻參上、精しく御打合はせ致すべく假御返辭のみ。

○不風流なる事ながら花に命を延すを得ず、事故は是だと申さぬ處に亦、花も實もあるべき乎。

▲觀櫻に招く

○花は吾家のもの、例の櫻は眞盛りにて、蝶の羽風にも零れんばかりの風情に候はゞ。

○今は貧しき歌人の花に候へども憐れ某長者が名殘の名木、漸く雫を濺らしその申し候へばこ。

○連日の微雨に促されて一時に綻ひ、家隱るゝまでに滿開致し候。

○花の十分を待たば或は風雨の妬

む事あるべく、八分に滿足して小集催したく候。

◎例年日本一よと御賞美の大木の櫻、又しても春を誇りがに咲きみだれ申し候に付、

◎吾家のものに之れ無く候へども眺むるには誰も苦情なき土堤の櫻花、雲か雪かの春色、み寺の塔も半ば隱れて見ゆ。

◎明午後より誕生祝をかねて小宴催したく候まゝ、御賁臨下され度

◎午後早々雅宴相開き、久々にて分韻試みたく今宵も月に候へば一刻千金の景色を御覽に入れ申すべく候。

◎雨には雨、晴には晴、それ相應の詩興はあり旁御越し待ち上げ居るにて候。

◎花より團子とやらの諺も之れ有り候へば、粉も小豆も砂糖も吟味致し、山程仕入れおき候、酒は無論開筵せる唯一の目的物にて候。

◎御歸路は舟して送らせ申すべく十里の長堤の花打ち眺め、分韻と飲み直しとは亦妙に候はん。

◎一昨年の如く事に托して御不參にも成らば、櫛の歯をひく樣に急使さし立て申すべく、酒と團子は御自由に任せ候はんも、一句だけは花に賜るべく、こは前以て願ひ上げ置くにて候。

◎雪降る景色御希望にも候はゞ、金剛力出して大木搖り動かし、或は急に或は緩に、庭一面を白砂に變じさするは君が手の中にある事に候へども、御越しの上ならでは應ずまじく候ぞ。

◎何卒御來駕下されたく、赤心こめて待つは僕のみに候はず、幾年も御馴染重ねし、八重と申す花あるを忘れ給ふべからず。

▲同返辭

◎此方より花の消息伺はんと存せ

○春之巻

しに、心通じてか只今の御書。
○名高き櫻さき亂れ候ひし由にて例によりての御吟莚開かんとの御せ、風流の道に候へば必ず參上、花に月の影おとすまで酌み且つ賦し御滿足させ申すべく候。
○名木一たび歌人の君を得、其名更に高く、地下の長者は如何に喜ぶべき乎、殊に年々開き給ふ御歌莚、此上なき功德、小生此頃風雅の道に遠ざかり居り候へども、御手傳ひ旁御席汚し申すべく候。
○晴雨を論せずとは殊に興あり、生は火が降り候とて、御寵招に背くまじく候。
○御書中に、團子や酒の字多く見え候は、僕をば釣り出さん御趣向にや、御饗應とならば二つながら辭し申すまじく候。
○君は、曾て日本一と賞めしを質として取り給ひしか、然程に遠回しの御筆なくとも、煙霞疾を成せ

るの僕、事を左右に托して不參などとは其は御人違ひ、參上の席にて句も酒もやり申すべく候。

◎小舟は吾が手のものに候へば、花の香流るゝ川に棹執り、直に御門前に繋ぎ申さん。君も、水煙深き處に吟聲起らば、僕が來しぞと推し、先づ酒煖め給へ。

○花見の席より

◎未だ御歸宅に非るか、生等は花下に陣取り、將に樽に開かんとする所にござ候。

◎春酒かをる花見の席より一筆申し上げ候。

◎蝴蝶姫に桃の渡わたらせ此書を差し上け候。

◎花は七八分と思ひきや、今し十分に咲きそろひ、微風ゆるがば雪降らさん風情に候。

◎今し酒三巡、詩興わくまゝに君なきを淋しく感じ、重ねて使者さ

し立て申し候。

◎殊更に船を浪花橋畔に繋ぎ、御歸家まだしかと伺ひ上げ候。

◎君なくば一座榮えずと衆議一決御用有りとは昨日の御返辭に知れながらも、御都合伺ひ上げ候。

◎ふと此處に立ち寄り花見の小宴開き居り候、つれは例の秋堂君と滑稽學士にて、噂は遂に君に及び此書を試み御來駕を促せる次第に御座候。

◎風吹かば吹け、雨降らば降れよと月の櫻に上るまで、尚も酒陣を張り居り申すにて候が、御出馬如何にと斯く。

○同返辭

◎花の陣屋よりの御書たしかに拜見、漸く只今歸宅につき、すぐ膝栗毛に一鞭あて申すべく候。

◎蝶々の御使者よりは一歩後れ候とも、直に駈けつけ申すべく、團

予は御注文もれしかと推量、どッさり仕入れて持參の筈。

◎御心合の同士と御一酌の由、參るも惡しからず候も、御歸途御立寄り願はしく、酒肴は早用意ずみに御座候。

◎主人儀は歸家いまだしにて候。御手紙の趣は推量するに難からず候も、確かに御預り致し候。

○郊遊に誘ふ

◎梅見の酒なほ醒めやらぬに、世はいよ〳〵百花の春、紅紫とり〴〵の色に飾られ申し候。

◎天には雲雀の歌面白く、地には蝶の舞やさしく、花に憧るゝの人は野に山に杖曳くブアツ此頃。

◎山と云ふ山みな打ち霞み、み寺の塔も僅かに其尖を花上にあらはすのみに御座候。

◎花は紅に柳は綠、山べ川べ畫よりも美しき春景色を、爭で見ぬふ

〇春之卷

りして過され申すべき。

〇緋桃の花と黄なる菜花とに、一年の春色を飾られたる村又村の此頃、詩嚢に入れたしとの郊遊し

〇一日を遊歩に暮し、山に飽かば水に舟浮けても宜しく、水に飽かば山に霞わけても宜しく、何れにせよ愉快にやりたく候、

〇此頃の景色は天の與ふる吾等の世界、そは花といはず鳥といはず眺め次第に候はずや。

〇み寺は花に隱れ、木魚の聲のみ幽かに漏れ來るさまなど思ひ出でられ、急に催せる山行。

〇實に、人生の行樂は此彌生の空なれや、一日を野邊に送ればとて強ち、不勉强のそしりも招く間敷御出遊促し申し候。

〇終日そよ吹く風に袂ひるがへし牧童の吹く麥笛の音清き土堤に、蝶を友として土筆摘むも興なき事にあらず、柳の陰に釣りして

太公望氣取るも亦自由に候ぞ。
◎花の命は七日の上に出で候はねば、尙しも盛りを見逃しがたくて此書を裁したるにて候。
◎勉强は勉强、遊步は遊步、判然區畫を立て候はゞ、春の二日三日を花に費したりとて、誰れ咎むる人もあらぬかと存じ候。
◎御同遊するを得ば、美文に新體詩に、草を席にして筆陣張りたく春遊の目的全く此處に在るにて候

◎殆ど軒を列べし君と吾れ、殊更に筆執り御誘引の書作るなど、今の世に迂濶千萬なる事の樣に候へども、其處が文の稽古に候よ。

○同返辭

◎御書の如く、常には汚れし人の世花紅柳綠のとり／＼に織り成され錦繡天地と變じ候。
◎春色よりも筆致艶なる御手札有り難く拜見致し候。

○春之卷

◎げにも御書にある如く、世は華やかなる舞臺と相成り候て、滿城の士女は山に野に、綺羅の香り〻鞭絲の影を繋さぬはなく候

◎自然の景色を詩料に、錦囊肥さんとは君ならでは實現し能はぬ事にて、御趣向だけは御同意申し上げ、午後より御陪遊願ふべく候。

◎固より出遊する上は、野べ山べ到る處に春を賞し、疲れもせば綠深き小草の上に身を橫たへ、詩うち誦して興行り、雲雀の聲の麥生に落つる日暮までも欲な事には晝中の人となりたく候。

◎暫し浮世の人とならんと、此方より、文して御誘引せばやと存じたるにて、同じ思ひは野べ遊び、尻に帆掛けて、御供せん哉。

◎同じく花に目を喜ばすなら、君が御誘ひに應じ度候も、明日は母の伴して西京へ參る都合、遺憾な

るは詩件に漏るゝ一事に候。

◎書餘は何れ明日。野風に屐迎はせながら、語り申さん。

◎明日は千里のはてまで雲なき天氣なれど、月朧なる空幾度か打ち眺め、御誘引承知の旨認め終りたるにて候、草々。

○舟遊を催す

◎花に名を得し墨田十里の堤、咲きに咲き、雲か雪かと見まがふ彌生の櫻、吾有とせばやと存じ、

◎霞と棚引き雪と亂るゝ花は、清く流るゝ長江の波に影ひたし候て棹さしもうせは春色ゆらぐべく。

◎春江水暖かに之れ有り、白鷗の夢靜かに、四圍の青山は優しき姿を鏡中に寫すかと疑はるゝ景色。

◎南岸に垂枝るゝ柳の絲おしわけ舟漕ぎたく候。

◎花見は舟に如かず、綺羅の塵

なきのみならず候。

◎柳の岸に舟を艤し、花の汀に漕ぎゆき、暖かき春の波を弄はやとての此企てに候。

◎わざと花を離れて舟泛べ、雪か雪に非ず、雲か雲に非ず、夕日に映えては明かに、暮れては模糊として白き景色を領したく候。

◎水に波たゝず、花に風おこらず只晝中に浮ぶ思ひを質に致し度。

◎一葦の水隔てし島に舟寄せ、桃林の底に半日を語り、暫しなりとも浮世を忘れ候はん。

◎沖の小島巡り相試み、櫓を操る腕疲れ候はゞ、緩く流るゝ潮に船預け、釣するも亦妙なるべき乎。

◎舟なればとて氣遣ひ給ふべからず、花曇の空に風おこらず、海ははてなき青疊に異ならず候ぞ。

◎文に拙なく詩にも疎けれど、腕は櫓とるに冴えたる僕、一天俄かにかき曇り、眼前に波の山峙つと

も、美事に乘り越し御覽に入れ申すべく、況して油流したらん如き春の海、梶さへとらば舟は自然に流れ申さん。

◎花岡君等は、陸の春に醉はんとの事に候も、僕等は鷗と共に眠らんとするにて候。

◎水陸何れにせよ、其歡を同じくして其方法を異にするもの、君は吾黨の人と存じ、遊ばん事のかずかず春の日永に任せて筆執り、斯く御遊意を動かさんとするに候

○同　返辭

◎柳の烟はれ初むる朝より、花の霞む夕ぐれまで、思ふ存分に舟遊せんとや。

◎御意の通り、花は水を隔てゝ遠く望むぞ、宜しく陸にして頭に戴くと、其景色の幽する、固より同日の論にあらず候。

◎碧の海に舟すべらすと、塵深き

○春之卷

路に自轉車驅ると、其輿の差實に雲泥とも申すべく、沖の小島巡り御同船願ふ所にござ候。

○人の山築かぬ柳の岸には船寄せて酒酌み、裙履の塵張る花の堤は故意と遠ざかりて眺めたきは誰しも同じ思ひに候。

○花こそ少なけれ、一道の水流れて小舟を容るゝに難からず、明日は東都隅田の舟遊に擬せんとや。

○小さき腕の船頭に、命預けんは聊か不安心に候へども、盥の大さの吾が入江、水飲み干しても魚腹に葬らるゝは免れ申すべく。

○御得意の横笛一枝、必ず忘れ給ふべからず、千尺高き絶壁の下なる辨天淵に船臨ませ、例の秘曲を奏し給はゞ、龍女も來り舞うて興を添ふべくと存じ候。

○御同乘願ふべく、舟浮べぬ只今より、心に描かれ候よ、波と上下する鷗のさまを。

○人數五七人の上にも出ば、必ず二艘の舟にし給ふべし、合うては酒酌み、離れては競漕せん。

○御返辭の要は、諸の一字に過ぎず候も、君筆舞はさば吾亦、瘦腕揮うて一舞はし試み申し候。

○今宵の夢に申すまでもなく、水烟深き處に落つるにて候。

○桃咲く村より一筆

○吾里人の生命とも申すべき桃、今し花盛りにて絳霞棚引き、一夜に武陵の春を現出したるにて候。

○山沿のは溪流に影ひたし、田圃のは麥浪に花洗はれ、格別の眺めに候ぞや。

○麥浪の綠に映じ、菜花の黄に交り開くさま、畫も亦及ばず、是れ田舍ならばこそ。

◎花の繁き處は村の茅舍を隱し。その疎なる處には柴門半ば見ゆ

るなど、坐ら名勝を知れると言ひなす詩人の君も、到底想像し得給ふまじくと存じ候。

◎近き櫻を横に見てすぎ、遥々村の春訪ひ來る市人無きにあらねど元是れ半詩人に候へば、決して花を汚し申さず候。

◎小川にも假橋架り、昨今の茶店殊に忙しく、何時も茶碗は不足がちの賑ひ、四斗樽も薦のまゝ景氣添へ居るにて候。

◎詩の杖曳き給ひても僅かに二三時間を要すべく、電車中の人となり給はゞ、敷島一本が灰になる程の時間にて、仙源中の身となられ申すべく候。

◎桃は俗と罵らるればとて、仙境と稱へられし例は、遠き支那の秦時代にあるに候はずや。

◎昔、乳房探り給ひし乳母も相逢ふ毎に、君が御噂を繰返し逢て嬉しさの餘り、年波疊み　額の皺を

伸すにて候、君がみ姿の橋に見はるゝを待つは、不風流なる僕のみに候はざるぞや。

○來給ふべしとの日は、何時とは強ひず。讀書に倦み給ひし日より紅塵に飽き給ひし日より、只花の老いぬうちにこそ。

○村の鷄午を歌はん前に、下男して手料理させ、田舍の味ウンと御試し願ふべく候。

○菜花を左右にせる川には、寸餘の若鮎も上り初め候へば、手から捕りて御膳に上すべく、兎も角市の御住居を出でさせ給へ。

○同返辭

○桃種ゑて衣食豐けき御村の春今し花盛りに相成り候ひし由。

○絳霞蒸す武陵の春は、夜每の夢に入り易き折柄、わざとの御書とや。細かに拜見致して候。

○花に賑ふ村また村、市人は總出

○春之卷

の有樣に候ゆゑ、此頃の城中は却て靜かに、訪ふ人も稀に候。

◎山水に憧るゝ書生は、誰も机上に旅するが常に候へども、世に百聞一見に如かずの一語あるを如何にすべき。

◎近き御地の春尋ねぬのも愚の極み、乳母にも背き難く、御厚意には猶更の事、石臼より重き尻、奮發して上げ申さん。

◎豫ての御書に、吾家は一本松の石地藏に尋ねよとの御指圖、物言ふか、物言はぬか、歩して其處に到りしとき、試めし見候はん。

◎知らぬ路とは申せ、吾を導くには、幽かに霞もれて聞ゆる鷄犬の聲あるべしと存じ候。

◎桃咲く窓に緋の襷、機織る村の娘に問はゝ、君が幽栖ゆびさし呉れ申すべく候。

◎君、既に來よとの日を命じ給はず、吾亦訪はんの日を告げざるべ

く、朝か晝か晩か、その三つ何れかに御門叩き驚かさん筈。

○磯村より一筆

◎御住居なる町の此頃は如何に、吾が磯村は春色繪よりも美しく、桃花と垂柳とに綵られ候。

◎烟るは柳のそれよ、霞むは花のそれよ、日々事なくして眠り催すは、海村の春日和にて候。

◎桃の垣根に網結く漁翁の衝へ烟管するがあれば、草紙干す窓の内には、機織る筬の音高く聞え候が機の主は誰なるべき乎。

◎漁莊蟹舍〻〻點々として畫に入れば、沖の島々は烟波の間に眠るに似たるなど、君に見せばやの詩景にござ候。

◎此方の岸は柳に日暮れ候ひても彼方なる小島の花は夕陽に照されて明かに、一江の春色二樣の景色を描き出す、いと面白く候

◎淋しき磯曲に候へども、花に憧れ月に逍遥ひ、太平の春に醉ふ吾々もござ候。

◎斯かる浮世の外なる吾里へ、一日來て詩拾ひ給はゞ、波の音や島の影、さては淸き沙の小粒に至るまで、爭うて錦囊に上るは疑ひなし、と太皷岩より太き印押し保證仕るべく候。

◎海の底まで春風暖う吹くと見え白き砂濱へ打ち寄せられしは優しき櫻貝、是亦御詩料の一つ。

◎沖ゆく眞帆片帆の妙は、吾里少し北に離れ候ひし、毘沙門堂前の人となり、松原越しに眺むる、言ひがたき景色に候へども、君が才筆借らば活き申さん。

◎一々記さば限りなきこと、餘は暫く御預け願ひ、御越し有り其節に御案内致す筈に候。

◎餘り精しう記しもせば、文にて見物すみしゝ逃げ給ふべければと

殊更に略し申したるにて候。
◎畫に勝りし景色の外、溌溂くたる鮮魚もあれば、村酒ながら酔ふに不足はせさせ間敷候。

○同 返辭

◎龍宮の邊なる磯村よりの御書、何事かと仔細に拜誦仕り候。
◎少々羨ませがらせの御筆、憎しと思ひながらも、朝夕の景色のかずく、夢引きやすく候ぞよ。

◎御書の眞意は、俗塵しげき地に頭埋むる僕をして、半時なりとも自然の詩境に逍遥へとの事に候はんも、一分の餘暇もなき身には、却て罪となれるぞ恨めしく候。
◎善くも暢びたりな御筆、到れり盡くせり御地の春景色、御通信細かに拜見ずみに付、實地に臨みしも同然、參るまじき乎、參りて景の眞僞を詮議し、一議論試み申さん乎、確たる御返辭は、此兩三日

考へ見申すべく候。

◎詩の巧拙は、景の如何は第二に位し、其人の才華の深淺によりはせざる乎、僕は固より下手、然るを尙、太鼓岩を根ごかにして保證の印に代へ給ふにや、如何に。

◎山の村よりも野の友よりも、花や月に事寄せての招き、何れも憎からぬ事に候へども、中取つて御地に遊ぶべく候。

◎紅柳紅花、何れも詩骨を

健に致すべく、此五日には必ず塵の巷を後に、桃の花咲く御門ほと〳〵と水鷄ならぬ吾れし、月に叩き申すべく、鮮魚俎の上に躍らせ刀執りて待ち給へ、酒は持參の筈。

○汐干狩に誘ふ

◎明日は妹共より貰ひ節句に候へども、汐干狩に一日を短う暮したく磯行おもひたち申し候。

◎舊式とて弊なき事柄は今に廢

たらず、雛祭は明日、その供物として磯漁り催したく候。

◎試みに想ひ給へ、潮落ちて十里の干潟となると、白き手足の子等が赤き裳からげて小股に走り、前日に埋めおける蛤を、眞しやかに拾は都會にて行ふとか

◎春の波さら〳〵と貝殻寄する優しさも、眼にあり〳〵浮ぶにて候行かばや汐干狩に。

◎沖ゆく白帆は無くてはならぬ景物には候へども、島に隱れて又見はるるなど、町の書齋に籠り居ては、どうして〳〵、思ひも寄らざる長閑けき眺めに候はん。

◎明日の磯行、妹共の監督に候へども、籠重からずば內裡雛へ申譯なし、是非とも磊々として岩の重なり合ふ處を漁り拳骨より大なる榮螺探らばやとの決心。

◎汐干狩とは固より名のみ、素足を寄する波に甜めさせ、海わたる

春風に顏洗はするに過ぎず候。

◎獲物の多少を爭ふは興なしとせざれど、是等は妹等に讓り、白砂に大の字試み、得意の相撲取るも活潑なる遊戲に候はん。

○同返辭

◎遊ぶ事多きにこまり果てたる九十の春、探梅にはじまり、桃の節句に漕ぎつけし事、御書により不圖心づき申し候。

◎汐干狩に伴せずやとの御すゝめ日記書く事さへ怠りがちに候へ共御意はよし、下地は何とか申す諺正に御受け致し候。

◎妹等は貝殼光る砂濱に遊ばせおき、足は蠣に喰ひこませながら、榮螺捕り最も妙と存じ候。

◎御邪魔は申すまでも無く候へど時と場合には又なき御連にもなるべしと、請ふが儘に弟や妹も連れ申すべく候。

◎相撲取る事も宜しく候へど、六尺の褌は必ず御忘れなき樣にと御注意促しおき候。

◎場所は何れ、例年の磯に候はん、汐時は午後かと存じ候へども早朝より御伴仕るべく候。

○筍を贈る

◎例により自慢の竹の子、而も孟宗の太きもの、二三本御覽に入れ候僕が手ら掘りしと書かば、又格別な味に候べし。

◎幸便に托して呈せる此孟宗、中程に疵あるは鍬の手先狂うて傷めしにて、善意に解し給はゞ、誠意の籠もる點にて候ぞ。

◎美味に飽かせ給ふ御膳には、固より自慢の甲斐ある間敷も、後の藪に生えしものとは、一筆書かざるを得ず候。

◎今にも試み給はんとなら、掘りて間もなき物故、ゆがき給はずと

も、えぐき事は之れ無く候、明日にもなると手數掛り申すべく候。

○初鮎を贈る

◎葉櫻の小暗く茂れる中ゆく川、初鮎跳り學校の餘暇、竿携ふる人と相成り申し候。

◎菜花ちりて黄金流るゝ村の小川寸ばかりの鮎、ぼつ〳〵僕等にして忙しからしむる時候となり候。

◎今、幸便にて進せる鮎は吾が竿

に上れるもの、一つ燒き二つ燒き漸く十串に及び候ひしなり。

◎此一ヶ月餘も經ば、三四寸のもの鉤り、竿の腰より以上弦月形に撓み申すべきも、今頃のは鮎と名のつくに過ぎず候。

◎花に背き給ひし君、一度歩を枉給はゞ、鮎鉤の御傳授申上ぐべく趣味多きものに御座候。

○春の旅路　總語

◎宿り急がぬ春の旅に候へば、梅咲く村に詩拾ひ、酒旗颺る野店には腰すゆるにて候。

◎桃咲く磯の梶枕夢に入り易きは故郷の春にて候。

◎花に月に身をやつす十年の旅、酒を嵐山に買ひし事も候ひき、涙を吉野に灑ぎし事も候ひき。

◎五十三驛の春の風、半は富士の雪に見送られたるにて候。

◎花は道に臨み、竹は籬に映ずるなど、行先毎に眺め新らしく、故郷の事ども暫し忘られて候。

◎吾や濟勝の具に富まざれど、煙霞疾に成して醫し難く五歳の春を旅から旅に暮したるにて候

◎楊柳の渡に船を呼び落花の驛に馬を駐る風流さ是も旅なればこそ

◎忘れ難きは故里の花月に候へども、旅の春は情味殊に深きを覺え申し候

〇春之卷

▲東京より

◎隅田川は花の下なる茶屋にて澁茶すすりながら、走り書きして景色寫し申し候。

◎花見客のしげきを避け、立ちながら一筆試み申したるにて候。

◎上野は花の眞盛り、花見る人よりも花に見らるゝ人が多く候。

◎朝より電車にて駈けまはる、市中の春を探りつくしたるにて候。

◎梅には足おくれ、藤には早く候へども、龜戸天神春靜かに、反橋の眺めも宜しく候。

◎花によく眺望にもよきは飛鳥山西に芙蓉の殘雪を仰ぎ候て、東には筑波の紫翠を望み、近日になき愉快を覺え申し候。

◎花の多きを論せば矢張墨堤にて水に陸に繁華なものにて、繪にも詩にも口にも、其模樣をのべ難く候へば、此寫眞にてと。

◎長命寺の言問團子にも腹脹らし業平朝臣の歌の名殘の都鳥をも心靜かに見、一日を面白く暮し候。

◎夕立てや田をみめぐりの神ならば、との其角が句碑建てる三圍神社にも詣で、北なる牛の御前にも廻り路いたし候。

◎書かば、卷紙の二十本位は費すに不足はなきも、筆よりも目先づ疲れはて、花の都の電燈は明るきも、書き收めて夢辿るべく候。

▲西京より

◎東京旅の別隊よりは、目新らしき通信日毎に參り候はんも、吾は桓武帝の舊都に、ちび筆に名勝巡りのとび〳〵御通信申し上げ候

◎一度は花、一度は酒、見ると酌むとの暇に思ひ出すまゝ、嵐山より郵箋試み申したるにて候。

◎晴は二日、雨一日、春の三日を西京の人となり、思ふまゝに花探

○春之卷

りたり、旅衣汗しとゞにして。

◎雨なればとて、誘はれしまゝ加茂川の旗亭に酌み、東山に鐘流るゝまで春に酔ひしにて候。

◎花の夢驚く毎に雨かと聞き誤りしは、枕に響く加茂の水聲にて、東山は霞の圃團着て寝る優しき姿頃は半夜なるに、細う流るゝ絲の音の候ひき。

◎旅衣濡せしは嵐山の花の露、祇園の有情的のそれには非ざりき。

◎嵐山の繁華賑はしく見候へども月になりゆく日暮は、萬人去り盡くし、吾物顔に眺め申して候。

◎急がぬ花の旅とはいへ、然まで長くはと盡せぬ興を夕日に預けて歩を返し申し候。

◎樹古く花多きは御室の櫻、嵐山の歸るさ歩を枉げ申し候。

◎西京の花は、多くは僧の所有に歸し居り、寺あれば必ず花、花ある所は必ず寺有るにて候。

◎御所の春はよし、ただ聖駕一たび東し、淋きのみが遺憾に之有り、草長じて尚餘恩の露を宿し宮鶯日ねもす鳴くのみに候。

◎草鞋幾足かはき破り、名たる勝地は略探り盡くし候まゝ、今宵は殊更に伏見に出で、舟傭うて夢を浪華津へ流す筈にござ候。

▲大阪より

◎水の都の大阪、夏の納涼こそよろしけれ、春は如何にと存じ候へ共尋いでに立ち寄りし迄にござ候

◎櫻の宮の花は盛り過ぎ、花よりも青葉繁き、望みは却て凊くて眼を洗ひ申し候。

◎造幣局には、昨日に縱覽期限滿ち、巡航船の窓越しに眺め候。

◎夜櫻は新町と申す花街、古より名高く、黄金の草鞋穿かずば面白からずとの事に候へども、今は葉となり居る由聞き、眞の花をば見

るを得ざりき。

◎名のみ殘れる桃山、只埋れぬは仁德帝の御遺跡にて候。

◎高津の宮にも上り候、高臺の欄干によりて見渡せば、浪華全市は春霞に包まれ、西部の一半は海の如くに際涯なく、入船千艘出船千艘は、胸中に往來するのみに候。

◎前年の旅行と今年の異なる處は北區の火事跡の建築と、電車の開通とに候が、四ッ橋の觀もなくなり、夕陽丘も女學校などに俗化せられ詩人は泣くにて候。

◎水も花も柳も料理屋も之れ有り都合よきは中の島の公園にて候。

▲奈良より

◎青丹よし奈良の都の八重櫻、今年の春を師範校の門前に尋ね申し候、そぼ降る雨を犯して。

◎市中にしての名區は山手を占め花に隱見する寺樓、聲音のも

れ來るは筆に上す事もならず候。

◎一碧鏡を磨するは猿澤池、厭世宮女采女が名殘の衣掛柳は、なよ〳〵と行人を送りつ迎へつ、憐れに眺められ申し候。

◎國道よりも廣き春日神社の賽路樹木人の頭を壓する中に、山櫻の白う咲ける、殊に面白く候に鹿の配合は、必ずしも紅葉に限らずと思はれて候。

◎竹外醉史も合に冥目すべし黑風白雨の荒涼たる景色なく、十二の帝陵春深く、聖代の恩波に浴して咲く花に護られ居り候。

◎古帝都の春、小包に托し難く候へども、鹿角細工と古梅園の墨とは今日差し立ておき候、霰酒の瓶は忘れずに持ち歸り申すべく候。

▲和歌浦より

◎肌身はなさぬ旅硯、片男浪の旗亭にて筆染め申し候。

○久しく山に親しめる身の、忽ち烟波縹渺の景に接し思はず執る筆手より落せるにて候。

○白砂青松、長汀曲浦濤は耳を淸め、松風亦心を洗ふの地に候。

○文學に因緣深きも此處にて候ぞ宗敎に緣故多きも此處にて候ぞ。

○至尊駐輦の遺跡、一にも二にも稱美して禁ずる能はざる亦此處にて候ぞよ。

○海山の景色を一眸にし得べきは望海樓の遺址に之れ有り、其昔、聖武、稱德二帝が行幸の名殘、僅かに一片の碑に偲ばれ候。

○支那西湖の六橋の小なるものは三斷橋にて、不老橋と相對し、面白く見られ申し候。

○妹背山を一周し、下り松、觀海閣多寶塔、鶴駕飛降碑をも見、三斷橋を再びし、見返りがちに今、名高き蕉翁が行春の句碑の前に夕日を背にして立つにて候。

◎玉津島神社は之を朧山の麓に拜し候が、和歌三神の一たる衣通姫は、此社の祭神にてましますにて吾等は敬すべき神樣にござ候。

◎汗流して數百段の石級拾ひ、今し石欄に身を投げかけ、遙けき海より吹上ぐる風に蘇生したる心地處は申す迄もなく、西國二番の札所、紀三井寺にて候よ。

◎途中にて、名草山の白雲と見しは全く櫻花にて、今は其みだれ咲く下に香を拈り、觀音を拜禮する人と相成れるにて候。

◎和歌浦への入口にては根上松を見、紀三井寺を最後とするにて候が、細かく名所勝跡を算すれば五十の上に出で申すべく候。

◎規模小に候へども、眺望は餘りあり、朝嵐夕暉、波光鷗語、さすがに名勝の地たるを失はず候

◎芭蕉翁は、行春に追ひつきしと歌ひしも、僕は故鄕の春暮はしく

○春之巻

殘花に遲れまじくと心急き、筆さへとび〱に認め申し候。

○晩春……總語

◎初東風に野梅蕾をふくらし尚、殘雪に封ぜらるゝよと御通信せしは九十日の前、今は三春に殿する牡丹も老いんとするにて候。

◎春風若麥を吹いて、農事御多忙なるべく、との御書戴ける時節は既に夢を消えはて申し候。

◎老い易きは春よ、花も鳥も跡形なき夢に異ならず候。

◎花の影、鳥の聲、今は何くに尋ね申すべき、其跡を留むべく苦吟せる詩歌も遂に成らずして、春は空しく人を老いしめ申し候、嗚呼。

◎南郊に梅探りしも既に夢、北里に櫻狩せるも亦夢に歸し候。

◎幽窓に雨細うして花飛び草長し蝶の羽がひ重たく、鶯の聲もしめりがちに聞かるゝにて候。

◎絹絲よりも細き雨は、白く灑いで亂れず候も、人を思ふの愁ひを千々に織成す恨めしく候。

◎春雨五色、よく花を染め成し候ひしも、今は無情にも花を洗ひ去るにて候。

◎落花を催す夜半の雨、燈光影暗うして枕冷かに候。

◎風なきも力つき、ほろ〳〵と苔に灑ぐ花、憐れと見るまに地には時ない雪積り申し候。

◎東都の春、今は問はん由もなく、曾て賜りし御文繰返し、淋しき書齋に君偲ぶにて候。

◎花には來年これ有るに候へども今年の花を舊枝に上すべくもあらず、人の年も亦返し難く候。

◎衣上に消やらぬ花見の酒痕、人懐ふ涙灑ぎては猶更、美しき三春を描き易きよ夢に。

◎故郷の此頃を如何にと問ひ給ふか、花落ち鳥老ひ、君と別れし入

○春之卷

江の柳のみ茂り申し候。

◎鎮守社の朱の鳥居は青葉に隠れ昨夜は初杜鵑の一聲、雲を劈き北に消え申し候。

◎實に三春は夢なりけり、花よ蝶よと逍遥ひし昨日の野べ、草長して碧の海を現じ候。

◎雨降る日は殊に長く覚え、歌に倦みて窓推せば、庭の牡丹ほろりと一片こぼれて候。

◎千紅萬紫すでに野末の塵となり人招きし酒旗も夕日に低れて影颺らず候。

◎人を樂しませし花のかず／＼、雨に洗はれ風に散り、此世も淋しく相成り申し候。

◎年々に人の老いを催し春の去る何ぞ一に早きやと嘆ぜられ候。

◎小さき蝶、花を筏にして細流下るは、春の行方を追はんためにか最も多情に眺められ候。

◎花は八重一重さま／＼に咲き出

で候ひしかど、今年の春の眺めも九十日にて終り申し候。

◎柳垂るゝ岸のもとには水肥え候て、劍とも見ゆるは蘆の芽のそれにて、折々香魚跳るを聞き候。

◎老いんとする海棠の雨中に啼粧別愁を餘す、深閨の少婦が風情憐れに候ぞや

◎花は千古の歴史を秘めて地に跡したるに候が、蓋世の英雄も絶世の美人も、何れ免れがたきは白骨かと歎ぜられ候。

◎朝より春雨しと〳〵と降り暮らし候、散らさるゝ花は恨なれど若草緑いよ〳〵增りしは心嬉しく存候。

◎げにや花は七日の命、蝶よ花よと浮かれ出で、面白う暮し候春も夢のごと、早暮れんとするにて候

◎軒より落つる點滴の音聞きつゝ眠る春宵の夢心地は一しほに候。

◎結び難き夢の around、落花の村に逍

○春之卷

遥ふも風流に候へども、やがて醒むれば悲しき一曲の歌となり、自ら春傷む事に候べし

◎逝け春、無限の感慨をもらして來れよ春、又も無限の觀樂を懷にして、今日、汝を送る、來年また汝を南郊に迎ふべきぞ。

▲故山よりの消息

◎細雨の窓に、春傷む重たき筆執り無限の愁を寄せんとするにて候

君よ、都の春は老いずとするも等閑に讀み給ふなよ。

◎春逝く落花の里より、遠き都の君へ一書まゐらせ候。

◎小暗き燈火の下に指ゆれば、吾もまた二十の春を過したるにて候

◎暮るゝに遲かりし櫻ヶ岡、花は一夜に飛び散りて青葉茂く、杜鵑の宿と相成り申し候。

◎鳥が鳴く花の都と謳はれし御地も、はや春の影なかるべく、御近

狀承りたく候。

◎憐れなる花の末路を文にする、君をして泣かせんとには非ず、吾が思ひを寄せしに過ぎず候。

◎闇にも白かりし櫻は春漸く老い絲のやうなる細雨の音もなう降る夕べ、最も君を懷ふ切なるにて候

◎山里の奥より流れ來にけん、桃花一片ゆらくと、逝く春の恨みを載せて、これ吾里の此頃の景色にござ候。

○春之卷

◎惜めばとて、一年の春は返りもやらず候、逝く水と共に老いはて候、嗚呼、吾春も返らぬ事を思へば、悲しき事のみ多く候。

◎竹院晝靜けく、池に跳る鯉一入勇ましく候て、ほろく降りそゝぐ花は雪よりも繁く候。

◎池の面に點じて消えやらぬ落花の雪、春の恨みは細波に鎖まれ申し候、雨いとゞ細うして。

◎君は何くと首回せば、傷春の恨

○春之卷

みは絲よりも亂れ、門前の垂柳に繰返されて候。

○故郷の春は老いたるにて候、君は今尚、都の花に醉ひ給ふには非るか、久しく絕えし御消息、吾家音づるゝは初聲もらす杜鵑、いと憐れに聞かれ申し候。

○葉は愁眉に似て、更に解けぬ思ひの柳絲に勝るが御座候。

○曾て君と別れし後の柳、船掩ふまでに伸び茂り、波搖りて影轉清く相成り申し候。

○三春を詩なく歌なく且つ醉はず只君を思ひ續けて暮したるにて候

○愁に和して心頭に灑ぐ軒の點滴聞きつゝ斯くは書き綴り申し候。

○封じこめしは牡丹の一片、これ逝く春の名殘、しかも君が生れ給ひし村のものにて候。

○繰返し／＼書きは書きしものゝ思ひは仲々盡きやらず、何精しうは此花片に問ひ給へ、と誠心こめ

て封じおき候。

◎よし一行の文にせよ、相逢ふよりは情深く感ぜらるゝもの、此頃の御様子御漏し下されたく候。

▲旅中よりの消息

◎浪花津に咲くや此花の旅衣、まだ脱ぎやらず天涯に、初杜宇聞く身の吾にて御座候。

◎芳野の花に懐古の涙そゝぎしも早かへらぬ夢と相成り申し候。

◎東山も霞も衣ぬぎ捨て、花稀に緑茂らんとする此頃。

◎終日そよ〳〵と加茂の清流に臨み、微風に櫛り雨に沐する柳の絲美人の樓を藏すまでに茂り候。

◎銀燭を綺寮に燒き、春を樂しむの貴公子あれど、青葉隱れに花傷む、杜鵑の血に啼くを憐む人は稀にて候よ。

◎花に別るゝ猶人に別るゝの思ひ旅の空にては況してものこと。

◎花に憧れしも夢なりき、蝶に伴ひしも夢なりき、身は尙千里の客に之れ有り、心馳するは重山複水遠く隔つる故鄕の空にて候

◎南船北馬の夢の跡、詩なければ其を留むるに由もなく空しく老いし十年の旅にて候。

◎山の春、水の春、旅から旅のさまよひに、醉ふこと稀に暮し候。

◎故鄕の青山待つべきも、旅路の花は私なくして老い果て申し候。

◎移れば變る人心、老いし花弔ふとはせで、隅田の別莊に杜鵑聞き浮世を忘るゝ人さへ御座候。

◎風土を記しては敎化を助け、花月を吟じては唱歌に入る、とは眞の遊覽に候べけれど、吾に生花の筆なきを悔申すにて候

◎旅に馴れては容易に上る故鄕の夢、何事もよく見られ申し候。

◎身跡は浮草に似て、東西南北宿り定まらず、今し東都の片隅に心

淋しく此書を認め申し候。

◎故郷の夢醒め候へば、窓外には落花の紅雨細うして、枕邊の疎燈に影淡く、意中の人を殘すにて候。

◎踏み出せし故里の春、一歩は一歩より君と隔たり、今は四百里外の都の客舍に、春を傷むの遊子と相成り居るにて候。

◎故里の君は何處ぞ、青山萬里、夢も亦迷ひ易く候。

◎久しく絶えし御書、初時鳥の聲と共に机上に落ちたるにて、いとゞ嬉しく讀まれ候。

◎情緒もて織りなされし、綾錦にもまさる御文、涙にむせびつゝ拜見、取敢ず御返事に代へ、思ひの限りを書き綴り候。

◎御書得て嬉し涙に筆ぬらし、由なき事まで書き加へ、御返事申し上げ候、落花の窓にて。

夏之巻

〇初夏友に寄す

◎新緑に埋めらるゝ書斎に筆執り吾里の此頃の景色聞え上ぐべく候

◎とり〴〵の花咲いては散り、咲いては散りて、今は木々の梢の若葉のみどり淸しう相成り候。

◎行春の名殘とも見し藤の花、美しき夕の雨に散り失せて、鶯の聲は青葉かげに隱れ候。

◎初夏の田舎ほど心地よきは御座なく、滴るばかりの緑淸らかに之れ有り、若葉青葉の夏の香を吐く殊に露を帯びて日を浴びて。

◎曾ては花に埋もりし吾が書斎、春を洗ふ雨毎に芭蕉葉伸び、白の帳も緑に染めなされて候。

◎雨降りし青葉の里は、鐘の遠音に靜かに暮れゆくにて候。

◎初夏の御たより、青葉みづゞしきよりも流暢に、流石は君よと感服致し候（四三九頁ノ内）

◎朝夕は分けて涼しく、晝とても清風竹渡りて來れば、思はず知らず、手に取り居る團扇すべらし落す事も少なからず候（一六〇頁ノ内）



◎海村の夏羨ましく、此方は朝夕共に一點の微涼動かず流石は利慾の熱高き都と其渦中を脱し得ぬが悔申すにて候（四四八頁ノ内）

◎木立に鳴く蟬は稍暑く聞へ候へども、獨り居る日は面白く、思ふよりも涼しく候（一六三頁ノ内）

◎細う流るゝ小川に黄金の色を映せし、八重山吹の姿、今は尋ぬるに由もなく候。

◎青葉の烟る堤に野茨の花、星のごとく開きて香を爭ひ、鮮かなる青草に映らふさま、春また活くるかと疑はしめ申し候。

◎先づ君に聞え上げたきは、首夏の夕映あざやかに映る里川のほとり、まだ聲なれぬ蛙鳴きそめ、何處にか杜鵑の聲も聞ゆる、幽景の事にて候。

◎何處よりか細やかに、麥笛の音は聞ゆれども牛追ふ童は見えず、世は吾のみを暮れ殘して、黄昏れ初めし青野原の景色にて候。

◎青葉をすべる夕月の影にも、さら〳〵と音のするにて候。

◎花の衣ぬぎすてし樹々の綠、海よりも深う相成り申し候。

◎春悼みし恨みも、徐に吹き渡る薫風に洗はれたるにて候。

〇夏之卷

◎堀の水に少さき蓮の葉の浮ぶ頃と相成、新樹のみどり愈深く、吹く風匂やかに心地よく候。

◎海青く島緑に、沖行く白帆の影は最も鮮かに見らるゝにて候。

◎欸乃一聲山水綠なりとは、實に江村のこの頃の景に候。

◎渡守の小屋も柳に隱れ、船は僅かに舳を見はし居るにて候。

◎氣早き都の人は、見晴しよき漁舍の一室を借らんとて、音づるゝものも之れ有り候。

◎一點二點の殘花なきに非ず候へども、世は早くも夏の領にて候。

◎春暮れし此頃の都は、庭の樹々も綠肥え、靜けき事に候はん。

◎日を桐陰に避け、涼を江上に迎ふるは、間もなき事と存じ候。

◎將に秋を分たんとするの候に及び、また當に繭煮るの時にも近づき申し候。

◎櫻の實も漸う紫に熟し、吹く風

も肌觸りよく覺えられ申し候。

◎初單衣の氣心地よく、月と共に宿りを出で、繁り合ふ夏草の露ふみ分けて逍遙ふは、都にて買ひ難き詩趣に候はん。

◎青鷺の羽ばたき靜かに、朝月淡き若葦のほとり、小蝦はねて波輪を作るなど、とり〴〵に心ゆく眺めに御座候。

◎綠陰に竹榻を移して臥し、薰風迎へながら詩集繙くも、風流のすさびに候ぞ。

◎野べ海べの初夏の景色聞かんとなら、まだ〳〵澤山あるにて候。

◎麥の五六寸なるに初夏の風吹けば、青葉もれ來る殘花色褪せて流鶯の一聲、夕日を送り申し候。

◎汀の草を飛び出でゝ、螢ふたつ三つ、又なき幽景にござ候。

◎月に叩く水鷄の聲、軒に巢くふ燕の囁き、新茶摘む乙女の唄など田舍は格別なる此頃。

◎吾に心慰めさせんとなら、とり〴〵の御筆賜りたく候。

〇同返辭

◎とり〴〵の御文、面白く拜見、先づ描かれしよ御里の初夏を。

◎御たより淸しう讀まれし、塵に汚れし眼を洗ひ申し候、

◎御自慢のかず〳〵、無理もなき事よと打ち讀まれ申し候。

◎花に狂ひし幾萬の都人、此頃は

正氣にかへりたるにて候、吾も其一人なるべしと御邪推あらんも、辨解は致すまじく候。

◎箱よりも狭き庭に立てる桐の花ほろ〳〵と落ち、軒の葱も靑う萌え出で申し候。

◎輕寒輕暖、人に宜しき四月の天氣、殊に心神すこやかに候。

◎花の夢、春の酒、まだ醒めやらず候へども、爭はれぬ夏げしきにて、鉢栽の柘榴花綻ばし申し候。

◎上野も矢張夏げしき、處々に建てられし誰彼の銅像、淸しき綠樹の露に濡るゝにて候。

◎龜井戸の藤も咲きそろひ、長き房は人の頭を拂ふをかしさ、池には鯉も跳るにて候。

◎墨隄は花老いて愈靜かに、杜鵑聞くには至極よき風流の時候と相成り申し候。

◎靑葉のみどり天を成し、東寺のみ塔も常よりは低う見ゆるにて候

◎見渡す限りの新綠、一しほ詩眼を淸うする東山の景色に候へども祇園には春なほ老いやらず候。

◎時鳥よろこぶ俳人は多きも、故鄕の夢驚かすは僕一人に候はん。

◎水の都と呼ばるゝ大阪は、これよりにて、納涼のさまなど追々に御通信いたす可く候。

◎蛙の歌ふは坐ら聞かれず候も一籠の螢は夜市に買ひ得て、暗夜の軒に光りを放ち居り候。

〇夏之卷

◎門にすぐる金魚賣の聲、是も亦夏のしるしにて、物の一月も經たば暑苦しく聞かれ候はん。

◎故郷なる江村の景色、みづ〳〵しき御筆の跡により、油繪よりも美しく見申し候。

◎青海原に浮ぶ夏の小島みどりに白帆一しほ鮮かに見ゆるなどとは實に無聲の詩と申すべく候。

◎夏に際して花咲く意なきに非ず春を避けて眞に情あるの盆栽の柘榴、此上なき書齋の友にて候。

◎花の香にしみし旅衣、清水湧く野茶屋の藤棚の下にて、今朝ぬぎすて申し候。

◎旅行には最も宜しき此頃、何も花には限らず候。

◎水に臨む家に宿りては、柳かすむる螢火を眺め、山を負ふ木賃宿にては、唔ぬふ杜鵑を聞き、詩筆手にする事も少なからず候。

◎喘ぎ〳〵峠越し、麓の清水に蘇

生するは、尙五十餘日を控へ居り候へ共それ迄には歸鄕の筈。

○初夏に友を招く

◎春の命とも申すべき、花の眺めには貧しく候へども、これよりは吾家の得意と相成れるにて候。

◎寄せては返す藤波、吾家の眺めをしく候間。

◎十丈の老松より垂下のさま紫の雲舞ひ下るかとも疑はれ。

◎眞鯉緋鯉の喚ふも、眞盛りの藤花に風情を添へ候。

◎路行く人も暫し歩を留め、よき藤の花よと、見上げて呟く此頃。

◎春の名殘とも見るは、只この藤あるのみにて候ぞ。

◎晴にも雨にも趣あり、天氣の如何に拘らず御越しあらま欲しく池亭から淸め相待つにて候。

◎池水に映ろひ、燃えんばかりの杜鵑花、今し盛りに候へば。

○夏之卷

◎吾家は躑躅の世界と相成り、明日小集催さん筈、竹は隣寺のものなれども、目を洗ふに足り候。

◎花時の喧譁にひきかへ、初夏の眺め極閑靜に之れ有り、詩人の君を待たれ申し候。

◎圍碁に飽かば酒酌まん、遠くも有らぬ城外の此處、是非訪ひ給へ

◎燕とび交ふ池の渚に、咲きそめし燕子花、酌むに不足はあらず候へば明日の一日を詩筆のせ給へ

◎花見の御禮に代ふる譯ならねど燕子花咲く池亭に、風流の詩陣布きたく候。

◎市中の住居には候へども、竹と綠樹とは紅塵を隔て、別に天地を成す此頃にて候。

◎市外れの吾家とて、夜に入れば杜鵑憐れに聞かれ候へば、新茶煮て俳談こころみ度候。

◎詩思浮ばずと逃げ給ふは、此頃の君に候へども、詩もて攻めまじ

酒兵して迎へ奉らん。

◎承知との御返辭なくば、重ねて使者立て申すべく候。

○同返辭

◎僕に來て、松に紫の袖振り春送る藤の花見よとや、重ねての御使者勞させまじく候。

◎御自慢の藤、是非見に參るべく午後早々、鯉跳ねて勇しき音する御門叩き申すべく候。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

◎新綠に埋もるゝ御家、などで紅塵の犯し得べき、後刻參上御池亭に苦吟の人と相成るべく候。

◎燕子花は、微雨の池上に宜しく候に、天氣曇れるは注文通りに相成るやも知れず候。

◎映山紅の眺めと御淸談、如何に興深かるべく乎と存じ、又しても御邪魔仕るべく候。

◎御招き承知、少々後るればとて二度の御使者に及ばず候。

〇端午に友を招く

◎武士道の鼓吹と共に、近年盛んに行はるゝ端午の儀式。

◎香茅を結んで福壽を祈の佳辰粽もどつさり仕入れおき候

◎艾を軒端に掛け、蘭を蓄へて沐浴をなす古來の例にて候。

◎青雲の表にひるがへる鯉幟、男兒もつ家のけしき勇ましく候。

◎明日は次郎が初節句、君來て祝し呉れ給はずや。

◎薫風吹き渡る空に、青雲に舞ひ上るさまの鯉幟、其大きやかなる兒の腕白の程も知られ候へども亦前途も想ひやられ申し候

◎祖父が主張により、玄關には處狹く感ずるまで、血の雨灑がせし甲冑、さては槍の外、指物の小旗のかず〱、陳列され居るにて説明は勿論、祖父がやるにて候。

◎萬壽菖蒲の酒、千金琥珀の杯、

君に獻じたく候。
◎先日、次郎にと賜はりし鯉幟、界隈隨一、昨日より九天に鰭振ひ居るにて候。

○同返辭

◎端午の儀式の復古は、何に致せ喜ぶべきの現象にござ候。
◎次郎樣の御節句祝せとや、先づ未來は陸軍大將になり給へとの一語を呈し候。

◎鯉幟の大小により、家々の貧富の程窺はるゝにて候が、この判斷は俗人の眼に入るのみにて、僕は寧ろ、其兒の氣性の大小を見はすものと認むるにて候。
◎御饗應の粽に腹脹らし、種々と承るべく候。
◎小川の石橋の邊に到らば、幟の鯉勇ましく見られ候はんと、今より嬉しく存じ居るにて候。
◎首長うして待たれ候よ、明日の

御祖父樣の說明を、僕は亦、亡父が夢の跡、遼東の戰爭談、當時の日記辿りて相試み申さん哉、

○梅雨見舞

○呟きても詮なき事に候へども、此頃には殆ど閉口にて候。

◎卯花くだすなる五月雨、人の心も晴れやらず、伸びゆくものは竹の子のみに御座候。

◎焚く香の烟もしめりがちにて、淋しさ言はん方なく候。

◎落つる梅子に聲ありと申候はば、其寂しみの程も知られ候はん

◎御地の昨今は如何、菅の小笠も取りあへず、雨にそば濡れて早苗取る娘の小唄、面白し聞かれ申すべく候。

◎常に訪ひ續けし歌の友も來ず、吾も亦疎遠がち、遠き路にも非ざるに、雨に隔てられては千里の感じ致され候。

◎誇りの角いと高き蝸牛、垣に攀づるは、青雲を目ざすにや、今朝は昨朝より二三尺高う、身を進め居るにて候。

◎雨の絶間に訪ひ給はずや、俳談に寂寞破り申すべく候。

◎此一鑵、父が宇治より取寄せし粗茗、御隠居様への寸志にござ候

◎今朝は、珍らしく日の影見え候ひしかど、午後よりは例の雨、鬱陶しさ限りなく候。

◎隣家の二階にて奏づる琴の音、今朝は少し冴えて聞え候は、晴近き徴と存ぜられ候。

◎頭上の樹木さへ打き烟り、一寸先は茫々たる霧の海。

◎妹が乞ふまゝに買ひし金魚、水晶の壺を小天地、陣を列ねて遊ぶさま、今は吾が友と相成り申し候

◎五月雨の空に燃えたつ柘榴、遊ぶ蜂は誤りて枝頭の火と疑ん

◎書にも飽き、詩にも飽き、由な

夏之卷

き事書き綴り御見舞に代へ申し候
◎隣僧の誦經をり〳〵聞え、竹を穿つの燈火青う見え申すにて候。
◎其內、伺ふべけれど如何にと斯く一書を呈したるにて候。

○同返事

◎憎きは此頃の天氣よ、友を隔てゝ心結ばるゝのみに御座候。
◎徒然の折柄とて、御書一しほ面白く拜見致し候。

◎御推量の通り、村は田植の最中にて、水盈々の田には竹子笠の一字文、鄙ぶりをかしく候ぞ。
◎空は墨ながしたるが如き夜、螢火は燃えつ消えつ、田舍の此頃は又別段の景物ござ候。
◎御分與の名茶、老人は早速に相試み、宇治ならではとの獨語もらしたるにて候。
◎鷄のしほたれて羽蟲せゝる、氣色よき眺めにも候はざるぞ。

◎門前の田は既に植付すまされ候て、村の子等の田植唄は、後の藪越しに聞え申し候。

◎何れも目に觸れ易きは蝸牛、青雲との御説親らしく、只その遂げ難き目的が笑止〳〵。

◎僕も御住居訪ふべけれど、君も亦訪ひ給へや、天氣曇ればとて吾門には、雨に消えらずして路照す燭の柘榴花咲き居り候。

◎若し、一川越えて來もし給はゞ何なりとも御注文に應じ申すべく呉々も御傘の橋の柳を拂ふを待ち眺め居るにて候。

◎明日は晴れん、隱々たる輕雷梅雨を驅りて彼方に去り候。

◎何時の間にやら數多の蝸牛、蕉蕉の葉の表に上れるは、晴るゝとの前兆に候ぞ。

◎僕も亦君が筆にならひ、見し儘の一二を記し、御返辭に代へんと城下に使ひする童に托して斯く。

○螢……總語

◎風吹けども滅せず、露洗へども又明かに、面白きは螢火の眺めに候はずや。

◎空に騰りて星隕ち、樹を拂へば風生ずるが如くに候。

◎輕く浮草に點ずるかと思へば、斜に柳枝を拂うて飛び、限りなき幽景にござ候。

◎高う低う、散じつ合しつ、人は螢合戰と呼び嬉しがり申すにて候

◎最も暗夜に宜しく、雨中に宜しく、月前と燈下には宜しからず候

◎左に消えて右に燃え、たくみに團扇の風を逃れ、うす物着し美人を弄ぶかと思はれ申し候。

◎小田に一夜の宴を張り、歌ふ蛙の燈火かとも疑はれて候。

◎よく幔を穿ちて窓に入り候も、既に又風を受けて流れ去り、庭の小笹に青う光るにて候。

▲螢狩を催す

◎君、一夜の螢狩は如何、家貧にして燈火に代へし古人の事は、暫く言ふまじく候。

◎今夜は闇に候ぞ、螢狩するには機よし、只今より納涼かた〳〵、十三橋邊へ御伴致したく候。

◎まだ其地を踏まぬ今より、闇を縫ひゆく風情、目に見る樣にて候

◎萬點の星螢亂れ飛ぶにも似通ふ螢火の出盛りとは申され間敷も幽賞は却て此頃ぞとの噂に候へば只今急に思ひ立てるにて候。

◎連中は學友のみにて、伴せんと乞ふものは次郎と愛子とに候。

◎固より散歩の事に候へば、露しどろの路踏み分けても宜しく候も三郎共は是非にと、電車を喜ぶものに御座候。

◎まだ日暮るには時間之れ有り候へども、早くゆき早く歸りたく候

◎此使者も強請りし一人、御返辭如何にと、御顏色窺ふべく候。
◎城外の野風に吹かるゝは、市の塵洗はするに宜しかるべく、螢は畢竟口實に過ぎず候。
◎今宵、御用事ありとなら、明日の土曜に延しても惡しからず、待つは御遠慮なき御返辭にこそ。
◎弟等は門に待たせおき、只しか〳〵と御誘ひのみ、餘は行きつゝ伺ふべく候。

▲同返辭

◎螢狩とは面白し、衣の裾ぬらし數多捕りたく、御同意〳〵。
◎十里の小田黃昏れては水風涼しく、彼處の草むらより一つ飛び、此處の叢より一つ飛び、終には百千の星の花にほやかにとの景色を現ずべく候。
◎三々五々の螢狩、吾々のみにも有るまじく、田の賑ひ思ひやられ

申すにて候。

◎御伴したけれど事故ありて叶はず、明日も叶はず、今度目に願ふべく、御歸さには十三の燒餅一包惠み給はずや。

▲螢を贈る

◎梅雨後の天氣漸く暑く候へども夜は流石に涼しく、此處は螢火の世界と相成れるにて候。

◎螢いで初め、村の石橋には孫の伴する老人も御座候。

◎露草を命の一籠、御讀書の友とも成らば、吾が寸志の屆きたるにて、螢も滿足に思ふべく候。

◎光りは幽はくゝとも、田舍の詩友よりと思ひ給はゞ、夜店にて買ひ給ひしそれと、少しは趣の異なるべき乎。

◎君に贈るは僕にて候へども、御机を照らす半以上は妹等が興がりて捕りしものに御座候。

〇夏之卷

◎此籠幸に御手に觸れんか、田の夜景ありありと御眼前に浮び申すべく、只御想像に及び難きは小笹手にし、此處彼處を狩り廻る面白さに候べし。

◎出盛りは間も有るまじく、萬星地に亂れ候て、畵にもしがたき景色とならば一箋飛ばし申すべく、其折こそ御浴衣がけの儘、團扇手にして御越しをと。

◎遠くもあらぬ御住居と此處、御興湧き候をり、詩の杖曳き給ふべく、今日こそは明日の夕暮より、橋の袂に野風を迎へ、み姿の見ゆるを待つにて候。

▲同返辭

◎夜を犯して御惠みの一籠、先づ吾が學びの道の暗きを明かにてらし申し候。

◎今宵は明けまで、文机照らさせ申すべく、殊更に燈火打ち消して

御地のさまを心に描きたるにて候芭蕉に宿り青う光るにて候。

◎仰せの如く、同じ螢に候へども詩に深き君よりぞと思へば、いとゞ貴き感じ致され候。

◎御禮とは、少し仰山らしく候へども、兩三日前に出版せる拙著記事文入門一冊と、繪葉書一組、前者は次郎君、後者は敬子樣へ差し上げたるにて候。

◎一つ二つ、試みに庭に放ちやり候に、池に影落スウッして向へ飛び、庭へ飛ぶさまも宜く、浮草に點ずるも宜く帳に影流るゝも宜く御里の夜景いよ〳〵偲ばれ申し候。

◎御知らせの程を待たず、小笹手にする人となるべく候。

◎今宵も光りよからず、延引ながら螢火借り、御返書認め申し候。

▼觀螢に招く

◎御約束の螢、亂れ飛ぶ星の此頃

○夏之巻

明日の晩にても來給はずや、成らば日の落つる前が宜しく候。

○宇治は螢の名所、吾里とは程近く候へば御案內致すべく、日遲れ候はゞ、月となり面白からず候。

○是非早朝より來給ふべし、田の草取は一日休暇し、名所古刹へ御伴致し、夜に入らば螢狩催し申すべく、陸にても船にても、興多きに擇び申さん。

○波を掠むる螢見ながら、川に臨める旗亭に酌むは、御地にても買ひ難き風流。

○風に流れて來る影の、持つ杯の中に映る、宇治ならでは得難く候

○御土產としては、村の童等に數多狩りとらすべく、君をして野路の露に御裾濡さす間敷候。

○既に御覽ずみかは知らねど、鵜飼船も參り居り候ぞ。

○相變らず、御著述に筆乾くまじき、一日の御遊に資料は百に

して足らざるべく、呉々も訪ひ來給へ、と御勸め致し候。

◎御一人興なしとなら、幾人樣にても御同伴苦しからず、こは此方より願ふてもなき事にござ候。

◎御越しは、この土曜日然るべく吾のみ勝手な事に候へども、それと取決め申し候、

◎返す〲も、水村の螢は興多きものにて候ぞ。

◎星散じて前鑑の月を淩がんとし影低うして北窓の風を試むが如しとは、古人の句に候へども、より以上の名作求めんは、君を措いて他に人なき乎と存じ候。

◎かた〲、一日を吾里に來給ふべく、雨降りもせば却つて面白く候ぞ、と前以て御意を得おき候。

▲同返辭　同禮狀

◎螢よりも名勝よりも、御筆の妙じきに感じ入り、御邪魔の事ど

○夏之卷

もは打ち忘れ、委細承知、と思はず書き下し郵に付し候。

◎宇治は年來夢馳せし地、筆の手前もあれば、一遊致すべく候、但とり〳〵の御準備は御無用、螢のみにて十分にござ候。

◎僕も男、且つ張子にも非ず、雨降らば却つて面白しとの御一言、必ず參上の筈。

◎只今、電車に送られて歸宅、遠くは暗を縫ひ、近くは杯に影おとす螢、目を去りやらず候。

◎雨の絲に貫く玉かとも疑はれ候景色、詩にも文にも綴り難く候。

◎歸りて直ぐ、先刻の景色寫さんと筆かみしめ候ひしかど、磨る墨の濃くなるのみにて、今に一句半句も出ず、景いよよ幽に、興いよよ凡ならざりしを感じ申し候。

◎其内にも拙作出來ば御覽汚すべく、まだ醒めやらぬ酒の亂れ書き一寸御禮まで。

○朝顔咲く宿より一筆

◎驚くこと勿れ君、花の徑六寸、こは僕が培養せる朝顔の、今朝初めて開けるものにて候。

◎露の籬に瑠璃の杯、まだ開かぬ蕾は、紅筆にも似通ひ居り候

◎朝毎に、白に紅に緣紅に、はた紫に種々に咲きかゆるは、是れよりにて候。

◎いよ〳〵朝寢なり難き此頃、電燈消えぬ間に見廻るにて候。

◎庭は手の平より狹けれど、花は色々に咲き出で候。

◎杯に似たる花に湛へたる露も凉しく見るからに夏としも覺えず受し慰藉も少なからず候。

◎蕣花一朝の榮など、果敢なき喩に引かれ候も、吾家は是よりの眺めにこそ、

◎御招きすればとて、今日の花明日御目に入れ難く候へども、なほ

○夏之卷

勝れる花の蕾あまた御座候。

◎此書と共に、一鉢と心付かぬ僕にも候はねど、其處は君來ませの計略にて候。

◎夜明けぬ空なればとて、君に門の戸推す勞は取らせまじく候。

◎蓮見と朝顏は、必ず殘月を肩にすべきもの、朝日の上る三竿の頃に來給はゞ、花凋むと云ふには非ざれど、君に倚む茶や酒に興うすきを氣遣ふにて候。

◎聞かんとなら、竹椽に腰打ちかけ、培養の御傳授致すべく候。

◎御來訪の時刻後れ給はゞ、朝顏にも義理たち申すまじく候。

◎御來駕と聞かばそれにて宜しく只此兩三日を出ぬ内に、星の消えぬ間に、僕が寢込を襲ひ給へや、此方にも警戒怠るまじく候。

◎今朝は四時といふに起き出で、一輪の香露を硯に受けて斯く。

○同返辭

◎僞か眞か來て見て糺せと、疊みかけての御筆、一寸御返辭に窮せるにて候。

◎朝寢戒しむる花とは名言、四時朝顏あらば、君が肩書は確かに消え申すべく候、失敬〳〵、こは僕の事にて候ぞ。

◎心づきながらとの御筆、君も御人よしには非ざるよ。

◎御得意の事とは申せ、自由自在に筆舞はせ、言葉の車に僕を載せ

朝酒の相手させんとや、辭すまじ

◎吾れ訪はん折、御門まだ開き居らずば御大事の戶に、墨くろ〴〵と樂書して歸り申しべく、後日の御不足なき樣に書き添へおき候。

◎明日にても有明の月踏み、花にも義理立て、君が御厚意にも亦背くまじく候。

◎朝疾く何事かと存じ候に、御自慢の朝顏見に來よとの御狀、目醒しに伺ふべく、よし十分ばかり

後れ候とも、葉をしげみ日影遮る花、よも凋みも致すまじく候。

◎咲きあまる御庭の牽牛花、明日は又さま／＼に咲くべく、美事寢込を取つておさへ申すべく候。

○暑中見舞

◎流汗を揮ひつゝ酷暑の地より一筆呈し候。

◎奇峰崩れやらず、夏の空燒が如く、此世は汽鑵の底に異ならず、甑の底とは昔の事にて候よ。

◎軒近き松にも波の音絶え、煎り殺さるゝ樣なる此頃。

◎得意の讀書にも暑さ忘れがたく晝中の瀑にも涼生じやらず、流石に夏の眞盛りに候。

◎大川に臨める御宅、此處なる吾家とは同日の論にあるまじきも。

◎屋根の鬼瓦は火焔吐くかとまで疑はるゝ昨今の酷暑。

◎地裂け、松のみどりも黄ばみし

程の暑さ、人の死せざるが却て妙とまで思はるゝ程に候。

◎仰げば空には雲の峰うづ巻き、一點の雨來るべくも候はず。

◎羨むには候はねど、海べ瀑のべ避暑せる人々の事にも思ひ到り候此世の夏を餘所にするかと。

◎然るにても、御一統樣には御無事に候か、み氣色承りたく、汗の半を墨に和し伺ひ上げ候。

◎三伏の熱、いかにも燒くが如く日に曝さば金鐵も鑠けて湯となり申すべく、さて〳〵嚴しき暑さに候もの哉

◎鄙しき書振に候が、丸裸この上もなき暑さ哉、にて候はずや。

◎身に障りなきを、まだしもの事と喜び候ものゝ、使ひ續けらるゝ團扇の迷惑、如何ばかりかと察せられ申し候。

○同返辭

○夏之卷

◎此頃の暑さは又格別にて、寒暖計は九十八度を示したるにて候。

◎氷の山に入らば知らぬ事、なまぬるき川風迎ふればとて、此頃の暑さ消しがたく候。

◎御宅の松に波音絶ゆる時は、吾家も川風死するの時、暑さは御同然ならんと信じ候。

◎軒に吊せる風鈴の音も絶え、床に置ける金魚鉢の水もたぎり、泡立ち居り候。

◎氷ふくめばとて、麥酒あふればとて、一片の涼呼ぶべくも候はず、今年は何として斯くも暑きかと甲斐なき事ながら呟かれ候。

◎水に沿へる有難さには、夜に入れば流石に凉しく、晝の酷暑を忘らるゝにて候。

◎大川の納涼も景氣づき、烟花も打ち揚げられ、繁華に御座候へば御來遊待ち上げ候。

◎この西瓜、新田產にて味よく、

今朝より井戸に冷しおける物に候ふ、二つに割り給はば、赤き肉のそれに、寸志の程も見れ申すべく乎。

○避暑に誘ふ

○紅塵萬丈の都を立ち去り候てより、はや二週、自然を友の深山住居は、眞に生が理想に叶ひて候、曉に起き出で、星うつる眞清水に口を漱ぎ、タオル片手に、冷たき朝風を袂にはらませ、草露ふみわけて、そこはかとなく逍遥ふ其の心地よさ、あゝ、君にも味はせたくと存じ一筆走らせ候。

○避暑とは、吾々書生の身に取り如何はしく候へども、そは程度問題にて候はん。

○此世の暑さは、山にも海にも逃れまじき事ながら、松風濤聲の境に身を致さば、固より忘れられぬものにも非ずと存じ候。

○海ならば砂白く松青き琴の浦宜

（夏之卷）

しかるべく、山ならば温泉あり、水も淸き竹田尾然るべく候。

◯十人十種、地を擇ぶは樣々に候へども、僕は瀑ある處に夏を忘れたく候。

◎三伏の熱を、銀河倒に懸る飛泉の下に忘れ、耳のつぶるゝまで百雷の聲を聞かば、心神健なるに相違なしと存じ候。

◎樹間に轟く晴天の雷かと疑はれ天上より降る白龍かとも想はるる那智の瀧。

◯身を涼しき山水の間に致し、暫し人間の夏を忘れたく候。

◎休暇の三旬を、鷗聲涼しき海村に暮し、詩嚢肥したく存じ候。

◯眞晝は松下に榻を移して書を讀み、夕暮には屐を砂濱に運び月を碎いて游泳試みたく候。

◎借り入れし漁家の一間に候も頭つきつけてならば、五六人は住

はれ申すべく候。

◎準備は既に十分に付、行くには着のみ着の儘にて宜しく候。

◎御承知の山寺の書院、最早借り入れすみ、君は泉流を汲み給へ、吾は薪を拾ふべく候

◎溪清ければ蚊も生せず、涼しければ團扇も要らず、塵外の小天地と庵主の自慢致されたるにて候

◎地は少し遠けれど、汽車は山下まで通じ居り、水清く苔青き山路辿るは一里には足らず候。

◎月照らす淵に臨まば樹影婆娑くとして、山氣人を撲ちて清涼に堪へざるべく候。

◎松風に耳を洗ひ、溪韻に心すまさば、それこそ平生の僕等にも候まじく、御同伴望ましく候。

◎長くは如何と存じ候も、物の十日か二十日は、面白く暮さるべく飽かば海村におし掛け、友襲うても宜しく候はずや。

○夏 之 巻

○山も宜しく候はんも、小島への避暑も面白かるべく、某地へ夏の旅行思ひ立ち申し候。

○月に釣し雨に讀み、夏の三十日を漁家の客となりたく候。

○往復の費用は臨時の樣に候へど滯在中のは此地の半額以下にて相凌がるべく候。

○之を海にするも山にするも、程近き地なきに候はねども、殊更に未見の地を擇びしは、文想をして新らしからしめん微意に御座候

○同 返 辭

○この堪へ難き暑さも、面白く海村に忘れんとの御誘引。

○人の世の夏知らぬ溪寺へ避暑せんとて、讀むゆく儘に涼しさ覺ゆる御書下され。

○沖の小島への御避暑、願うてもなき御伴、御行李を負ふ勞は辭すまじく候。

○月湧く波に水浴試み、風起る松に夏を忘るゝは、人間界の快事御同意致し候。

○逃れがたき暑さとは存じ候へど瀧の音近う宿占め、雪となり玉と散する飛沫に夢うるほさば、身は早くも秋を覺え候はん。

○同じく夏の旅致し候はゞ、生面の地最も宜しく、城市近き地は雜沓に堪へず、熱を嫌ひながら火に赴くに異ならざるべく候。

○費用の多少は先づ第二番、地幽にして景佳きを第一と致すにて候

○心涼しければ身自ら涼しとかの句もあれど、娑婆塞ぎの僕等には此悟道なく候。

○書卷中の涼しき文字に消夏するも、一擧兩得の策と存じ候も、百度近き熱度の城中にては、此唯一の法も効を奏せず、矢張御誘引の通り、松風淸く月色白き海村に如かずと存ずるにて候。

○夏之卷

◎何時にても御伴仕るべく、行かぬ今より早くも溪上の人となり居る心地、置時計の時きざむ音も水音かと涼しく聞きなるゝにて候。

◎明日にても磯村の漁家に投せば沖より吹き上ぐる風に燈消させ、月迎へて夜更るまで歌語り申すべく候。

◎御同意のみとの此書に候へども精しうは小島の宿にてと、殊更に書き殘したるにて候。

○磯村より一筆

◎月もらす松の夜露を硯に承け、磯屋より御便いたし候。

◎今、例の小島へ船漕ぎ寄せ、鷗の仲間入も致し候。

◎淋しき海村も夏ばかりは賑はしく、漁家は取敢ずの旅館、進化か俗化か、何とも評し難く候。

◎十里の松原、月になりゆく清夜

素足にて沙蹈むも心地よく候。

○海水浴場の設備も完全に、避暑の客足しげく候。

○朝日を迎へては海に浴し、夕月を招いては松風に臥し、浴しつ臥しつ、早くも一旬を送り候。

○君に優しと笑はれし顏や手足、赤銅色に變り、鯨突くなる頑丈の漁夫も三舍を避くべく候。

○都にては、夏の命は風にて候べけれど、此處は日に觸れ耳に響くもの、皆涼しく候へば命どころの論にあらず候。

○斯く誇ればとて、眞晝は流石に暑く候へども、軒吹く松風に枕友とすれば、容易に華胥に入らるゝにて候。

○地僻にして何かにつけ不自由に候へども、驕奢の都人少なく、水の清きに最も喜ぶべく、吾々等は避暑を此處に擇びしを得意がり居るにござ候。

○夏之巻

◎眞帆片帆の景色は既に陳腐に候へども巨鯨波截りて潮噴き、海天に七彩の虹を現ずるは、他にて見られぬ景にて候。

◎夕立すれば松原は墨繪の如く、沖の小島は斜陽明かに、往々裏面の景色を見るにて候。

◎驟雨に洗ひ出されし島山、一しほ近う見え、呼ばゝ應へん風情是亦格別の眺めに候ぞ。

◎水練も日毎に上達、一二町ならば浮なくとも心配なく候。

◎雨の夜は淋しく候へども、漁火の波間に隱見する、水禽の拍々と飛び起つ音する、憐れに候。

◎馴れし吾里とは申せ、都の塵に汚れし身を、久々にて波の音に洗はする、愉快に存じ候。

◎同じく海べに避暑し給はゞ、吾磯村に來給はずや、氷かく優しき都風の娘は非ず候も、茶店には淸水冷しの西瓜さく野翁は居り候。

◎人の力に能ふべくは、涼しき風に波の音、差し上げたしとは思へど叶はず、御越し待つより詮なし

◎御店忙しく候はんも、暫し來て夢を共にし給へ、強ち御損にもなるまじく候。

◎暑中休業の期日も、餘すところ僅かに旬日、何もためしよ、御浴衣のまゝ御越しあらま欲しく、狹ければとて、君を臥さす室なきにあらず候。

◎舟嫌ひと御仰せに候へども、陸を隔つるは三里餘、一漕ぎこがは島の人となるを得るにて候。

◎春は都の花に讓るべきも、夏の天地は此處に勝る地、又と何れに有るべき乎。

◎住所は、別紙に認めおき候ゆゑ容易に相分り申すべく、海に接し松這ふ家は外になし、一見よく假住を知られ候べし。

◎漁童とも既に親しく相成り、朝

夕は字問ひに來るものも少なからず、若し相分らずば君よ、尺八好の書生の宅は何處かと問ひ給へ、誰にても知り居るにて候。

○同　返　辭

○海村よりの涼しき御筆の跡、暑き〳〵市の住居に落ち、羨ましく讀み申し候。

○字々みな涼氣、塵深き都門に留守居する僕には、讀みに讀み候て、此頃の暑さを忘れ申し候。

○藻の香高う薰ずる磯館、朝に夕にとり〳〵の御興、ただ羨む外ござなく候。

○松風海月、贈られずとの事に候へど、折々の御文には、より以上の涼しみこもり居り、吾は常に苦熱を忘れ居るにて候。

○月に碎くる黄金の波、肩にて截り泳ぎ給ふ姿も、松風に臥して清き夢結び給ふ興も、目にあり

〳〵と描かれ申すにて候。

○來よとのこと承知、一日なりとも枕ならべ、涼しき濤聲に夢洗はせん考にござ候、

○妙じみ御文により、畵にし難き御地の夏も、略窺はれ候も御厚意には背きかね、兩三日を出でずして御假住叩き申さん筈。

○夢は常に御地に馳せ候も、俗累は猶身に纏うて自由なり難く今後とても數御書賜りたく、せめて其にて不平を慰むべく候。

○御示しの松の門、相忘れまじく相逢ふの日は、涼しき牀の半を分ち給へよ。

○既に着きしと小島の浦に錨下さば、月は彼方に涼しう輝き、冴えし一曲の尺八は、漁夫の子の指すを待たず、吾に一歩の損させずに御門に導くべく候。

○少々の御土產は持參の筈、千里眼研究の君、御手際の程を見たき

ものにて候。

〇溪村より一筆

〇都を北へ三十里、浮世隔てし山寺より一筆を呈し候。

〇七重八重、折り重なる青山に人海を隔てし此處、暑さは藥にしたくも犯さず、竹の小搖ぐ響きなど皆涼しく聞かるゝにて候。

〇世に後れて花咲くを常とする由に候も、有難き事には一點の炎暑來り侵さず候。

〇酒うすくも醉ふに足り、香魚は六寸餘のが膳に上るにて候。

〇瀧の鼓に松の琴、都會より來し僕等には最も微妙に聞かれ候

〇松吹く風に夏さへ忘れ、夜は袷ほしき程にござ候。

〇谷川の響きを雨かと聞き誤りしは眞の當座、今は涼しく聞きなされ、夢も破れ申さず候。

〇夏も尚、寒からんとする瀑布の

もと、朝毎に下り來て口すすぐにて候が、冷氣心骨に徹するにて候

◯和尚に碁を習ひ覺え候に、生き死に丈は會得致し候。

◯四圍の青山雲深く、一しほ詩眼を高う致すに候。

◯一叢の修竹は屋を繞り、亂石は垣を作し居り、文人畫めきし處に暫し身を寄するにて候。

◯五六町の西には温泉も之れ有り浴を取るに宜しく、夜に入りその歸るさには、谷川の小さき螢火の路照らすも優しく候。

◎溪光樹色暑を洗うて淨く人間の夏は夢にも知らざるに候

◯竹の欄干に月を迎ふれば、其下は清き谷川、水の囁きは小琴にも似、河鹿は清き音して歌ふ面白さ後ともいはで日記に上し候。

◯最も快絶なるは瀑の眺めに候も一たび身を其下に致せば鬼氣骨を刺し之を久しうすべからず候

○夏之卷

○岩端に掛る十丈の珠簾、暮に到れば月を捲き、形容するに筆あらばこそ。

○絶壁より下を掩ふは千章の青楓、秋も尚此處の客となるを許さば唐紅に水くぐるの奇觀を見得べく、其勝想ひ遣られ申し候。

○靈泉は烟霞痼疾を醫しがたく候も、松は涼しくして人を健にするの地、御多病の君には適當にて候。

○風と月とを日毎に遊び、一詩も無くて打ち過せる十日餘、然ればとて、君忘れし日は非ず候。

○海の友よりも筆頭主にして書き立て、君を促し候はんも、淺村御意に召し候はゞ、御來遊を願ふ僕にござ候。

○一年振に接せし故郷の山水、さすがに親しまれ候。

○山の奥の又その奥に候へど、日も照れば鷄も鳴き、米の飯も酒も

ござ候。

〇都の御用すみ候はゞ、是非御越し願はしく、秋近う相成らば共に上京致すべく候。

〇同返辭

〇日毎の御便、いつも愉快に拜見致し、此身の塵中に埋もれ居るを打ち忘るゝ程に候。

◎夏以來、都門の暑さと奮闘致し居り候へども、海よりも山よりも涼しき御消息ひきもきらず、御蔭樣にて、山海の景色を坐ら領し得たる僕、此上なき幸福にて候。

〇何れよりも僕を釣り出さんとて酒よ風よ月よと樣々の御文、涼しさ身に余り、都門の塵に臥するも亦惡しからず候。

〇瀧の音近き御宿にての御避暑、君も多幸の人哉。

〇詩人は古來よく誇大に形容するもの、實地に臨むよりも御手紙

○夏之卷

に接するを喜ぶ僕にて候。

○海村の友と互に文にての御自慢定めて盛んなるべく、筆の根くらべは、即ち文才の競爭、綴らば一巻の書と相成るべしと存じ候。

○温泉場の竹枝の詞は如何に、錦嚢に秘めおきて、歸後一時に譽を取らんとの御趣向にや、御示しなきを不審がり居り候。

○さやうに涼しき地に、幾日ともなく御逗留あらば、風召し給ふべし、都も此頃は秋催せるにて候。

○九陌に轟く車馬の響きと、絶壁劈く瀑の音とは、雲泥の相違、羨ましく候。

○夏期休暇きれぬ間に、山越えて訪へとの仰せに候へども、依然として俗中の身、御厚意に酬い得ざるが殘念に存じ候。

○蓮花……總語

○銀嚢破れて香漏れ、玉盤

傾きて露墜つ、曉に見る最も宜しく候。

◎花盛んに開きては錦雲百頃に、月は輕烟に沈んで曉色淸らかに候。

◎碧の葉は曉風に飜り珊々として白露をこぼし、紅き英は朝の日に映じて艶麗比なく候。

◎採蓮の曲處々に聞ゆるも舟を見ず、幽香水を渡るのみ、

◎花中の君子と名を擅にし、また

美人の水中に立つかとも疑はれ候

◎波澄み夜静かにして花に影なく露冷かに風淸く玉に香ある風情、他に形容の語あるを知らず候。

◎氷を欺く花、曉の露に濕うて淨く、遂に此世の花にあらず候。

◎水をわたるの曉風芳ばしく、一歩は一歩、人を花前に導くにて候

◎十里の蓮塘水烟深く、鴛鴦の夢も涼しく思はるゝに候。

○夏之卷

▲觀蓮に誘ふ

○常には淋しき辨天池、紅蓮白蓮に噂たちそめ申し候、

○白きは君子のそれにも似、紅きは佳人のそれにも似通ひ候。

○曉の雲をちこちに流れそむる頃杖を殘月の堤に曳きたく候。

○泥中に生じて聊かも汚れず、此世に欲すべきの花。

○東雲の空白きを待たで、路しとどの露しだき度候。

○翠蓋の佳人は輕烟の中に立ち、淸香を送りて曉に醉はしむべく候。

○勝手ながら順路につき、落月に先だち、僕が夢を驚かし給へ、と敢て御淸遊促し候。

▲同返辭

○觀蓮せんとの御書、此方よりと存せし折柄、是非御伴ひたし、一詩を得たく候。

○某地の蓮は、曾て詩料に數へし一、殘月肩に掛けて御伴せん。

○蓮見のこと承知、明朝四時を期し辻の石橋にて御待合はせ致すべく必ず後れ給ふべからず、拜復。

○拜承、何事も蓮塘の殘月に歩しながらと、先は御受けまで。

▲觀蓮に招く

○池とは名のみ、君に捧ぐる杯より小さく候へども、蓮の初花開き候をしほに卯飲試みたく候。

○例年御賞めの鉢栽の蓮、紅きが先づ笑ひそめ候。

○抹香くさき花と君のたまはんも時に取りては詩料の一、

○舟よりも小さき亭に候へど、三四人を容るゝには難からず候。

○見し上なら、君がために折るを惜み申すまじく候。

○殘月かげ淡く、庭樹に沈むの頃最も眺め宜しかるべく候。

○夏之卷

○御一座は何れも名流(ナノキコエ)、暫く其人を明すまじく、是も君を賺す手段と思ひ給へよ。

▲同返辭

○蓮もよく、卯飲(アサザケ)もよけれど、筆の走り位も程こそあれ、君に捧ぐる云々の一句は御取消し願はし

○僕がためには、折らんとまでの御厚意、必ずまゐり申すべく候。

○抹香臭くとも、般若湯(サケノコト)さへあらばよし、枉げても詩に入れ申さん。

○曉の微風に翠蓋(ハスノハ)ゆらぎ、ほろりと零るゝ水晶の玉、美事に杯に受け、朝日さすまで御邪魔願はん

○君が御自慢の蓮、何れ今年も亦車輪の如くに候はん、一句は事の實否を驗しての上にと。

○故鄕より都の友へ

○此夏は御歸省との御使、久々す

ゞみ舟浮べんと存じ候に、修學御旅行とや、落膽いたし候。

○涼しき波に夏の影なく、青き山には雲みち候て、相變らずの故郷と思し給はるべく候。

○御旅行も瀧巡り、或は温泉行、或は都近き海に夏忘れんとならば、日に角たてゝ咎むべきも、修學をして朝鮮への御行商、僕は嬉しく思ふ一人にて候ぞよ。

○故郷の夏を知らせとや、筆に覺えのあるに非ざれど、涼しき事のみ聞え上ぐべく候。

○相逢ふよりも、筆には仲々情のこもるもの、意の足らざる處は推讀し給へよ。

○朝より田草取りての晝休み、涼しき木蔭に走り書き試み申候。

○田舍なればとて、涼しき物のみに候はず、人の田預る小百姓は血の汗流るゝにて候。

○夕暮に門前の清水に鍬洗ふ頃、

○夏之巻

青田を渡る微風に、初めて晝の苦熱を忘れ、膳に就くよと思召せ、御宅にても亦然りにて候。

○螢は同じ螢にあらざれど、夜の景色は五歳前に變らず、小橋は例により夜毎に賑しく候。

○淸水湧く吾家さへ暑さ堪へ難く候に、なまぬるき水道通ずる御地想ひやられて候。

○夏の暑さは、世界行く處として逃れられ間敷、只追ふまじきは私利私欲の熱にこそ。

○心靜かならざれば磯べも山べも百度以上の熱、君が心の平かなればこそ、三伏の熱を大阪中央の船場に、練習の功積ませ居らるゝに候はん。

○秋には尙餘日あり、涼しき故郷の影に接し給はずや。

○久々の事に候へば、暫く御歸省も惡しかるまじく、別に事故設けずとも、御主人も心よく十日餘の

暇ならば、よしと申され候はん。
◎夏の末より秋の初めに掛けては健康傷ひやすく候へば、御自愛專一に祈り上げ候。
◎鎮守の森の眞晝は如何に、千里ヶ濱の夕暮は如何にと、此頃の景色を事新らしく繰返し申すまじく君が御推量に任せんのみに候。

○同返辭

◎御文の一々よく相分り、讀みゆくまゝに故郷の影あり〳〵と眼に浮び申し候。
◎田の畦なる椎の木陰に染め給ひし御筆、涼しくも讀まれて候。
◎然り、のたまふ如く、筆には妙じき力あり、面を會さんより文こそ面白く感ぜらるゝに候。
◎夢馳するは、鎮守の森の晝涼みのみに候はず、煮えかへる小田の眞晝を、草取りに御餘念なき事にて、都暑しと云ふも扇風器か

○夏之卷

けたる店に、算盤はおくは何のそのにて御いそしみ恐れ入り候。

○然るにても、羨ましきは田園の御生活よ、晝しのびし暑さを一家團欒の食卓に、美しく咲く言葉の花には、何とて此世の暑さの犯し得べきぞ。

○商賣は、恰も戰爭と同樣にて一刻も油斷ならず、殊に見習の身に候へば、涼しき故郷へ歸省する譯にも參りがたく候。

○先日は兩三日、主人の伴して和歌浦へ、旅行致し候に、其やさしき景色、遙かに千里ケ濱の上に出でとり〳〵愉快に、命の洗濯致し候

○體は、御蔭樣にて頑丈に、勉強に汗たらすより外に、何もさはりも御座なく候。

○朝鮮よりは漸く一昨日歸校、同行のもの何れも無事、成績も思ひがけなく宜しく候ひき。

○暑さは固より、海村や山村へ避

暑する樣にも非ざりしかど、得たる知識は少なからず、今日より日記の淸書に掛り居るにて候。

○何れ人間の世は、汗かゝずは樂に暮されぬものに候ぞ。

○粒々みな辛苦との語は、よく實を穿てるものよ、秋風吹きそめば御田には黄金の波立つべく候。

○水都の夜景を友に

○一條の澱江、分れては横縱の運河となり、架せるは古來八百八橋との稱へあるにて候。

○水は水なれども、浪華の水は何れも黄金にて候。

○黄金を說くは卑し、水の爲に繁華なるは大川の納涼にて候。

○水の都と謳はれし浪華の納涼、さすがの大川も船に埋められて候

○岸に客待つ納涼船、樣々の章燈揭ぐる中にも、柳屋、松家、

〇夏之卷

〇藤屋などとは俗ながら、涼しく見らるるにて候。

〇日は柳より先づ暮れそめ、おもむろに吹く川風涼しく、兩岸の樓臺には、燈火上りそむるにて候

〇吹けよ川風、揚れよ簾、夏の夜の遊びは、船に樓に思ひ〳〵に候

〇風に流されて來るみづ〳〵しき歌、心憎う聞かるゝもおかしや。

〇岸には電車馳せ交ひ、今年よりは格別なる眺めに御座候。

〇納涼とは名のみ、熱追ふ人の集合場廣き〳〵川中に、一區の銷金窩を現じ申し候。

〇烟火は空中に五彩の花を咲かしめ候も、一夜の中に烟と消ゆる黄金は、一箱や二箱に止るまじくと歎ぜられ申し候。

〇幾千艘とも數知らぬ船の中に、眞の涼貰ふ人は、稀なるべく候よ

〇舟遊は、消夏唯一の法に候も、空明に棹さして上流に至ら

ずば其實を得られぬに候。
◎十里の長江月に棹さし、夜の更くるをも知らで。
◎凉を追うて乘出す屋形船、更に水樓の下に繫ぎて醉を買ふ。
◎獨り繁華をあとにし、櫻の宮附近に棹し候へば、古城の松黑うして長橋の柳淡く候。
◎水禽の羽ばたく音高く、微紋の響きさへなく、凉氣衣に透りて秋將に近からんとするにて候。

◎夜航の燈火またたく邊には魚の跳る音凉しく候。
◎岸に近づきて舟漕げば、早くも鳴きそむる蟲の聲、紛々として雨よりも繁く、草には露宿りて月光輝き、水晶の玉を散ずるに異ならで、此處は早や秋の景色。
◎舳を西にし傾く月を追うて下り候へば、大川も舟漸く減じて燈疎に、夜は一時にも候はん。
◎暗に流れゆく灯は、納凉跡り

の舟なるべく、人は見えねど笑語手に取る如くに候。

○兩岸の家々には、珠簾下すもあり捲くもあり、幽かに聞ゆる笛の音にも、秋のけはひ響き候。

○盡きぬ名殘を月に預け、舟を浪華橋に乘り捨てゝ歸り申し候。

○別莊より友に

○別莊とは名のみ、苔蒸したる草舍より一筆を呈し、君迎へんとするにて候。

○家こそ小百姓の栖み棄てしものに候へども、屋敷は某長者の跡にて、いと床しく候。

○その昔、亭たち並び花紅葉見に興やりし處は、今し竹生ひ茂りて晝も小暗く、月さへ漏れぬ風情然りとて一方開け居れば陰氣にはこれなく候。

○朝夕は分けて涼しく、晝とても清風竹度りて來れば、思はず知ら

ず、手に執り居る團扇すべらし落す事も少なからず候。

◯藤も山吹も老いたれど、落花の頃より訪ひ來て、今も尚淋しさ破るは杜鵑、又なき友にて候。

◯僕は病を養ふの身、今し酒と交りを絶ち候も、客に饗するには客ならず、御合手には藥煮て話せん

◯梅雨も晴れたり、路も乾きたるゴモ輪の輕車驅り給ふにも便よし御暇の時分に訪ひ給ふべし。

◯新竹わたる夕風は分けて凉し、都の暑さ忘れ給ふには、又なき友に候はん。

◯買笑花と名を得たる薔薇もとりぐに咲き居るにて候、買笑とは緣起よからずや、君。

◯一歩出づれば小川にて、向ふは波狀の連山、萬馬の馳するが如くに見えて愉快にござ候。

◯暇つぶしには、小川に鮎釣るも宜しく、夜の螢狩も竹馬時代

〇夏之卷

を思ひ出し興淺からず候。

〇長者が名殘の蓮も咲けり、いとど品高く泥に犯して淸らかに。

〇木立に鳴く蟬は、稍暑く聞え候へども、獨り居る日は面白く、思ふよりも涼しく候。

〇まだ半作事の海邊の別莊、物足らぬ心地致し候へども、涼しき風は十分にて、暑氣を洗ふには決して不足これなく候。

〇此處は、電車の便なければ西宮附近の如く朝夕に忙しき暇ぬすみ海水浴試みに來る俗人もあらず、吾れ一人の占有にて候。

〇彼の砂白く松靑き磯とは申し難く候も、石卵累々と聳ゆる海べ、風少しあらき日は潮うち寄せて雪を碎き、雄壯なる眺めに候

〇暇にまかせて、五六町山路辿りゆけば、溪いよゝ深うして飛泉掛り、是亦雄壯にて候。

〇斯樣に申せば、化物の住むやう

なる磯べに聞え候はんも、二三十戸の一漁村、魚には不自由なく候例の酒屋もござ候。
◎來るには、往還の一本松より右に折れ、小川に沿うて下れば直ぐにて、道程は小半里にて候。
◎日來淋しさ嫌ひ給ふ君なれども此頃は弟も妹も參り居り候へば、御相手には不足あるまじく、詩歌留多も持參致し居り候へば、氣早き事ながら、正月の下稽古し度候

◎御越し待ち、十丈高き岩頭に衣を振ひ、一長嘯試み申すべく候。

○納凉に誘ふ

◎金鐵も鎔けて湯ともならんの此頃況して人の身、凌ぎがたきも道理例の瀑あび暑さ消したく候。
◎夕暮より凉を江上に納れたく候團扇手にして御出掛け如何
◎眞晝を森のしげみに臥さば、冷

○夏之巻

風颯と吹き來て、人間の熱を洗ひ去り申すべくと存じ候。

◎松吹く谷風は謖々として彼の音身も骨も涼しかるべく。

◎山紫水明の黄昏より、大川に舟遊試み納涼いたし度。

◎袖吹く江風水のごと涼しく、坐に午熱を消し申すべく。

◎只今より瀑茶屋に遊び、六月の秋を領したく候。

◎細流に臨みてハンモック張り、詩集手にして暑さ忘れもせば、一日の興を買ふに足り申すべくと御誘ひ致せる次第。

◎苔打ち掃うて坐し、松のした露浴び、半日の仙を學びたく。

◎谷の水に足ひたしもせば、頭の毛までも涼しさ覺ふべく。

◎夏は水こそ人の命よと、納涼の船を買ふ人あれど、僕等は谷川の邊に身を寄せばやと斯く。

◎橋の袂に歩を停め、歌誦しなが

ら涼納る〻一興と存じ候。
◎田は早くも螢の領、蛙の聲も面白かるべく候。
◎夜は野路に蟲の聲も聞かるべく人に先んじて秋訪ふも惡しからざるの韻事に候はん。
◎月の波に小舟浮べ、秋ならねども東坡が夢を繰返したく候

○同返辭

◎常には尻重き僕に候へども、此頃の暑氣には大弱り、今日の御誘ひ直ぐに御伴いたすべく候。
◎舟遊にも誘はれ居り候も、晝は君と共に森に赴き、夜はまた他と水に浮ぶべく、氣の多きを咎め給ふまじく双方を全うするにて候
◎御書手にすると忽ち涼しさを覺え候に、百雷轟く飛泉の下に立たば、冷さに身の毛よだつべく候。
◎舟遊あしからず候へども、俗を

○夏之卷

脫して上流に泝りたく候。

◎瀧茶屋に西瓜割く殊に妙ならん生は一歩後れ候べけれど、辨慶の泣坂では追ひ付き申すべく候。

◎冬は幾度となく出掛け、氷柱折りし事思ひ出で、脇の下より涼氣催したるに候。

◎承知と御返辭書く間に、幾度か汗揮ひたるか知れず候。

◎奇峰崩れやらず、夏の空燒くが如き此頃を、飛泉懸る下に身致さば、流石に人間の暑を洗はれ申すべく候。

◎藻の香薫ずる晝の磯に棹さゝば、都の夜の涼みよりも夏知らざるべく、と即座の承知。

◎吹けよ川風、颺れよ簾、今宵の舟遊、などて贊成仕らざるべき。

◎柳陰に舟漕ぎ、水よりも清き風袂に孕ませ申すべく、とり〲の興今より目に描かれ申し候よ。

◎早くも秋近うなりし此頃、御地も淩ぎよかるべく吾が住む山家に瀑の音も寒う聞ゆるに候

（四七頁ノ内）

◎暑さ恨みしも束の間桐の一葉は秋な魁致し、朝夕冷へ〳〵しく相成り申して候（四九頁ノ内）





◎草花の葉末を渡る風清く、氣は飽くまで澄みわたり候。嗚呼、げに心地よきは秋の自然に御座候（一八五頁ノ内）

◎淋しき秋風に、人里離れし温泉場たも訪れ轉た都戀しう相成り申して候

（一八一頁ノ内）

秋之卷

○新秋……總語

○一雨に涼氣生じて秋動きそめ申し候。

○書燈に涼しき影搖ぎ、詩興坐に湧くにて候。

○秋は來りぬ、階に語りそむる早蟲の聲に。

○山の影に野の色に早くも秋のけしき催し。

○夜々に澄みゆく星の影、氣は更に涼しく候。

○燈火に親しむべき時節、秋は實に吾人の世界に候ぞ。

○山靜かにして雲初めて白く、霜微にして葉未だ紅ならず候。

○秋來ぬと目にはさやかに見え候はねど、流石に涼しく候。

○昨夜の雨にて殘暑も退き、肌吹く風も心地よく候。

○一道の銀河は半空に横はつて影

〇秋之卷

淡く、人間に流れ來りて涼氣はとばり申すにて候。

〇朝夕心地よき涼風そよ〳〵と、吾廬に訪れ候て、はや初秋は龍田姫の息吹に送られ來り候。

〇遠近の闇には蟲夥しく鳴き初め地は今まさに蟲の領にて候。

〇仰げば高し澄みし初秋の空には無數の星、さながら紺地に銀砂子を蒔きしとばかり、疑はれ候。

〇夕月淡く掛れる宵、野路を辿り候へば、とり〴〵の秋の草花美しく、蟲さへ鳴き居るにて候。

〇綠の樹蔭に涼風戀ひて、泉の音に耳すませし夏も、今は夢。

〇窓をかすむる桐の一葉、吾家の秋のしるしにて候。

〇簾にたつ翠の波にも秋の影あり〳〵と見ゆるにて候。

〇夜は漸う長く、人を懷ふには最宜しく候。

〇塒の宿に秋早う訪れ、美し

き白萩はいつしか高き色に咲き亂れ、下ゆく水も匂ふべく候。

◎夕べの吾家は涼しき物のみ、月の影、水の音、露の光り、さては口號む詩までもにて候。

◎桐の一葉は風なきに散り、新涼すでに郊墟に入り、滿目の金氣漸く冴え渡り候て、燈火親しむべきの候と相成り申して候。

◎昨日今日、漸う萩の花さき初め淋しき吾家の庭も、少しは景色づき申し候。

◎夕べの時雨、名殘なう晴れ渡り候に、軒の玉水音も涼しう月の光清くして、夏ならねど弔り殘されし風鈴頻りに鳴るにて候。

◎園を遶れる清き流れの小川を越えて、吹き來る朝風の淸きが、軒の檐馬に音づるれば、おゝ、此處にも秋の響き。

◎秋の氣そゞろ身に沁みてうら寒く、桔梗の花一輪、露重たげに撓

○秋之卷

みたる憐れ深く候。

◎夏もいつしかすぎの戶を、おし明け見れば月一輪、淸眸ゆかしき幾萬點の星を率ゐて、嗚呼、秋は來れるにて候。

◎何處からともなう、颯々として秋の風、絃なき琴をかき鳴して訪れ申し候。

◎垣根にからむ朝顏は、朝毎の花少さうなりゆき、力とたのむ笆竹に、蔓のすす枯れたるも覺束なく候

◎此頃は實に詩の領、大空は青く高澄み、白雲は輕らかに飛ぶ。

◎秋はまだ深けれど、草にすだく蟲の聲々は、雨よりも滋く候。

◎蟲語を聞きては故鄕を懷ひ、雁聲を聞きては、父母如何にまします乎を懷ふ。

◎秋風は先づ遊子の衣に吹くかと疑はれ、千里隔てし旅路の枕うるほし勝ちにて候。

◎暑さ忘れし水に口すすげば、齒

も落ちんばかりの感じ致すにて候
◎垣根の朝顔も花漸う小さく咲き露さへ冷たく相成り申し候。
◎鳴く蟬の聲もいと涼しく、小笹の響きも雨かと疑はるゝ此頃。

▲友に寄す

◎柳の入江に棹さし風よ月よと戯れし納涼も今は夢と相成り候。
◎一霎の過雨に秋生じ、神骨やゝ快活を覺え候。
◎讀書にも詩に耽るにも宜しき時節と相成り申して候。
◎此頃の涼しき秋を如何に暮し居給ふぞ、定めて銀河の影流るゝ御書齋に、此世を外に詩誦し給はん。
◎月の影も夜々に澄みゆき、蟲の聲も憐れに聞かるゝにて候。
◎御宅は水に臨み居り候へば秋殊に早く、涼氣溢れ候はん。

○秋之巻

○玉なす露は園の萩に滋く、秋吹く風は庭の槐を落すにて候。

○うす寒き金風、人の詩思をして清からしめ候、

○曾ては午熱を避けし梧桐、此頭は影痩せて月自ら高う掛り候。

○詩に淺き僕さへ、筆執る事多き昨今、君には朝に夕に名句吻を銜くべく、御示し願はしく候。

○蕉葉いまだ破れず候も、荷衣は雨を遮り難く、吾家の眺めも日毎に秋の淋しさを添へ來り候。

○面白く鳴く蟲の聲に伴うて筆執り、よしなき事のみ書き綴り候

○初秋の月影清き窓に筆呼ひ君に寄せんの書斯く。

○手紙は相見るよりも興あるもの御書齋の秋承りたく候よ。

▲同返辭

○細々の御書、窓もる月に照らさ

せ巻きつ展べつ幾度も拜見。

◎月の光りこぼるゝ窓に綴り給ひし書文、面白くうち讀まれて候。

◎月は梧桐に來りて舊夢を尋ね、秋は蟋蟀を倩うて先聲をなす此頃、吾家も興多く候。

◎夏よりの怠りは日記の白きにも知られ、いと恥かしく候ぞ。

◎名作は此方より願はん筈、御得意の二十八字の見えぬは、書き漏らし給ひしには非ざる乎。

◎命の如く、水に枕む吾家に候へば涼氣は御手の物、されど御地は靜けき野べ、秋の景色は更に澤山に候はん。

◎夢に入り易きは月夜の蟲、吾れ來て聽くを許し給ふか如何に。

◎近日に萩咲く御門叩き、蟲の鳴き初むる黄昏まで、歌語試みたく候へば、必ず待ち給へよ。

◎書きたき事は仲々盡きやらず候も、暫らく御預り致しおき、參堂

の節に十分に聞え上ぐべく候。

◎今し斯く書き終れば、夕日は岸の柳に掛り、漁唱涼しく聞え、限りなき興味を覺え申し候。

▲歸省中の友へ

◎涼氣水よりも清く、蟲鳴き初むる燈下に筆執り申し候。

◎都門の殘暑嚴しと御通信致せしは昨日の事、此頃は眞の秋にて凌ぎよく候。

◎夜市にも蟲賣る人多く、草花も秋の町を飾り立て居り候。

◎海水浴にゆきし人、温泉場にゆきし人、都の秋戀ひしがり、日毎に歸り來るにて候。

◎御地は世の塵稀なる海村、秋は疾くに訪れ候はん。

◎暑中休暇も既に終り候に、御上京の後れしは深き仔細ぞあらん、夏恐ろしとなら、都は前にも申せし如く、それは〳〵涼しく候。

◯久々の御歸省、山にも水にも古き御馴染の方にも、盡きぬ御名殘に候はんも、都の空にも首長うして君を待つ僕あるにて候。

◯御樂しみの事どもは、度々の御書にて拜承、御上京の後るゝも無理もなく候へど。

◯他の歸省の友は何れも吾れ先にと上京、涼しき影ゆらぐ燈下に、海の話や山の話に、とりどりの花咲かせ居るにて候ぞ。

◯母君の乳房は御妹君に預け、一日も早く御入京あれかし、妙じき御歸省の日記拜見待ち遠く候

◯一別四十餘日、日毎に積る山々の御話、孤燈の下に語り盡さばやと、待ち焦がれ居るにて候よ

▲都の友へ返辭

◯芳情溢るゝ御書、淋しき歸省の宿にて懷しく拜見致して候。

◯都の秋のかずかず、目に見より

○秋　之　巻

も嬉しく讀まれ申し候。

◎誰も彼も追々に上京、夜毎に土産話に賑ふよし、一しほ都戀しう相成り申して候。

◎此方は固よりいやが上にも涼しく、初袷の着心地宜しく候。

◎君は吾を懷ふとや、吾も亦君を忘るゝ日とて無く候ぞ。

◎母の乳房は妹に預けよとの命少々憎くらしき書振、誰に稽古しての御筆に候ぞ。

◎少しの事故に上京に後れ候ひしも、今は解決して心は秋の空の樣に晴れ渡り候へば、明日にても故鄕を辭せん都合に候。

◎不日に上京、故鄕の自慢話に御書齋を賑はし申すべく候。

◎南征する雁に文掛けさせ、先は御返辭のみ、さらば。

◎餘は何事も都の夜雨に燭剪りゆる〳〵披襟致すべく候。

▲七夕小集に招く

◎年に一度の逢瀬を待ちし七夕は今宵にて候。

◎双星の物語を聞かんとてか祭るには最も高き樓を選む人々

◎彩箋に詩歌を書して祭るは、和漢共に今も昔に變らず候。

◎只今の空模樣にては、今宵は心ゆくばかりに晴れ候はん。

◎烏鵲翼を張りて橋を銀漢に架け牽牛織女の二星を渡らしむとの説いと風流に候はずや。

◎七夕の佳節をしほに雅筵開き度。

◎村の子等が星祭るとて色紙に、芋の露うけて磨りたる硯の墨もて書きしやさ歌は、おぼつかなき筆振に候も、美しうそれぞれの家の軒端に飾られ居り候。

◎山紫水明の頃より御越し願はし。

○秋之卷

◎天の川波秋しるき下に、一夜を長う詩歌闘はせ申さん哉。

▲殘暑見舞

◎秋暑を拂ふ團扇の手停め、御見舞の筆執り申し候。

◎凌ぎがたき名殘の暑氣、鳴き立つる蜩の聲も聞き苦しく候。

◎秋とは名のみにて、昨今の殘暑は三伏の頃より嚴しく候。

◎涼しみ欲しけれど、一點の雨さへ零れず、風も動かず候。

◎桐の一葉に秋立ち候も、暑さは仲々退きやらず。

◎夜に入れば流石に涼しく候へど眞晝は猶暑く候に、此頃は如何にして暮し居給ふぞ。

◎餘りの暑さに、世は倒さに夏に歸りしかとまで疑はれ申し候。

▲同返辭

◎軒近う起る松風、浪の音にまが

ふ御住居さへ、今年の秋暑は烈しきよし。

〇水に臨むの御宅、今も尚暑しとや、町住居の吾家の涼しからぬも無理ならず候。

〇蟲の音にも萩の初花にも、秋とは知られながら、此頃の暑さは何たる事に候ぞや。

〇今朝の一雨に少しは暑さ消え候ひしも、秋とも思はれず候。

▲轉地療養の友へ

〇垣根に萩の花も咲きそめ、淺茅が原には、はや蟲さへ鳴き出でし此頃、御病氣も日増しに御快方に候はん。

〇涼しき波に淸き月、醫藥よりも御身に効驗多かるべく候。

〇山水の間に身を寄せ給ひしより三十餘日、日を經るまゝに御健全疑ふまでもなく候。

〇元來の御輕症、夙に海風に洗ひ去られ候はん。

○秋之巻

○折々の御文、雄健なる御筆蹟にも御快氣の程推量せられ、吾々の喜び斜めならず候。

○温泉場への御保養も夏に限り申すべく、秋立ちし此頃の山氣は御身には如何やと存じ候。

○太洋より吹き送る潮風、秋は餘りの冷氣に候はん。

○都は暑からず寒からず、御病後の君には、却て御健康に適し申すべく候へば。

○百花園にも草花の咲き初め候て君を待つ風情ほの見え申し候。

○御病氣は早く〱、一日も早う逝く夏に餞別し給うて、御歸家待ち入り候。

▲同返辭

○日毎のやうなる御見舞有り難く其度毎に嬉し涙に御書沾すにて候

○此處海村の保養、涼しき松風や清き月影に、夏の暑さは忘れ候ひ

しも、病は今に癒えやらず。

◎名たる靈泉の効驗著しるく病氣も少しは怠り申し候。

◎一たび罹らば治し難きと申す肺患、氣長き保養には敵し兼ねてや先以て生命には別條有るまじく候

◎夏期中は繁華なりし漁村、秋立ちて一人去り二人去り、歸り後れしは僕のみにて候。

◎淋しき秋風は、人里離れし温泉場をも訪れし、轉た都戀しう相成り申して候。

◎山の冷氣は實に身に毒、遠からず都の秋に接すべく候。

◎苦吟は身に障ると禁ぜられ候へども、醫師には内證にて朝夕に試み、既に一卷に成し候へば何れ御評願ふべく候。

◎生命取り止めしを自慢に、不日歸京の筈、余は其節にと、わざと書きもらし候。

○秋之巻

▲夜會を催す

◎一雨驟涼を催し、詩人待意の天と相成り申し候。

◎燈火親しむべき時節とは、實に此頃の事にて候。

◎俳句の研究も漢詩の輪講も然るべき事に候へども、更に文會催したく候。

◎一枝の筆に成れる數行の書、よく思想を千里の遠きに致すは手紙を措いて他に之れ無く候。

◎手紙の德を發揮するには、固より墨の匂ひ床しき書振を要するにて候。

◎凶事を弔し、吉事を賀し、花月に對しては其情を寄せ、山水に逢うては其景を叙べ、書き贈る事は百にして足らず候。

◎世に習はぬ經は讀まれずとの喩の如く、巧に書く事の稽古最も肝要と存じ候。

○世の青年、英語や算術には腹肥え候はんも、寢食と共に發すべからざる手紙文には、誰が見ても大に飢ゑ居るに候はずや。

○同士相圖りて此會を催す、聊か見る所ありての事、幸に御同意の上、會員御誘導願はしく候。

○文章は意を達するに過ぎず候へども、辭を修むるに非ずば意を達し難く候。

○御同樣に切磋せば、知らず識らず、一度は其妙處に達し得べく彼の天才は吾輩は取らず候。

▲同　返辭

○美擧青年界に最も有益と左袒、有志募るに怠るまじく候。

○世人が等閑に付し居る書翰文の研鑽、誠によき御企圖、及ばずながら驥尾につきたく候。

○御説の如く、書きたき事を流暢に、筆に物言はする人は極めて

少なく、此會にして盛んにならば文體に大革命を來すべく候。
○此頃の文體は筆に力なく、最も輕薄に流れ居り候へば、これも次第に矯正致したく候。

○秋の野へ便……總語

○秋の野を飾る花の種々、春にまさりて艶麗にて候。
○秋の草花とり／＼に咲き出で野は綾錦を布きしに異ならず候

○心ひかるゝ秋の野べ、女郎花の露に立てる優しく候。
○紅葉の眺めは幾夜重ねての後に候はんも、野の愛づべきは此頃にてござ候。
○風になびく初花薄、秋の夕ぐれ憐れにて候。
○門田の稻も花咲きみち、朝の風に打ちそよぎ、黄金の波寄する晩秋も想ひやられ候。
○野に立てば肌吹く風心地よく、

晝の草むら露なほ乾かず、蟲の鳴く音にも靜かさ知られ申し候。

◎前に媚ぶる女郎花、後に招く尾花、桔梗袖にみだる、苅萱裾にまつはり、花野十里は夢より醒めて世な紫に明け申し候。

◎今し月出で候、黄金白金と輝く露ふみ分けて、そこはかと歩く又なき興にて候よ。

◎草花の葉末を渡る風清く、氣は飽くまで澄みわたり候、嗚呼、げに心地よきは秋の自然にござ候。

◎耳をすませば、蟲と申す蟲の音の、雨の如くに流れて、天地は自ら蟲籠となりしやの感あるも妙にて秋は野べの夜に限るにて候。

◎苅萱は雨に打たれし後の眺め、女郎花は風に靡くが優しく候。

◎小川の邊に杖立つれば、萩は雨の如くはら〳〵と清き水の面に散り、點々たる紫白の花うち雜りてゆるう流れゆくにて候。

○秋之卷

▲草花を贈る

○秋は淋しと歎く人あれど、吾は其靜かなるを愛するにて候。

○庭の梧竹すでに秋聲あり、草むらの蟲、灯をしたひ來て机邊に鳴くも憎からず候。

○朝顏の花は瘦せはて候ひしかど、萩は眞盛りに之れ有り候。

○御馴染の花賣に托せる此一枝、同じ花ながら吾家の萩、如何に眺め給ぞや。

○手に取るな、矢張野に於る女郎花、との句は承知の前、君が爲に手折れるにて候。

○今し吾家は賑かに候ぞ、秋の草花に飾り立てられて。

○君來ませ、酒酌まん、萩のしげみに榻横たへて。

○花語らずとも、君筆に誠心こもらば、君がみ車枉げさすに難からざるべく、と草々。

▲同返辭

○露しとどの一枝、愛嬌こぼるゝ花賣娘より受取り申し候。

○たゞ一枝なるが恨めしく候へど數多咲けるは來て見よとの謎か。

○色も香もある女郎花、俳句の意に拘らず、書窓の友と致すべく候

○仰せ有らなくとも、此方より推參致し、幽に艶なる萩眺め申すべく、御庭の露に裾ぬらすを得ば幸甚〳〵。

○秋之卷

▲蟲を贈る

○少々自慢かは知らず候へども、秋の此頃は田舍に限り申すべく、其證據として御目にかけたき物これ有るにて候。

○茲に贈り奉りし一籃、淋しき吾家の友と親しむ、鈴蟲の一番ひにて候。

○水よりも淸き月明の夜に、露に霑ふ蟲の聲々、吾家ならではと存じ候、雨の夜とて惡しくあらねど

○村の住居は一しほ憐れさを感じ

○秋之巻

まゝ、一人秋を聽かんも惜しう思ひ候てのしわざ。

○一夜歌に憧れて逍遥ひ、月明るき野路に捕わるが此一籠の蟲、幸便ながら贈りまゐらせしは、君がよき御思料にもと思へばこそ。

○夜更けて御夢路淸き枕邊に、何と響き申すべき乎、明日にもならば其事が承りたく候。

▲同返辭

○露のまゝなる一籠、御厚意有り難く秋聲を領し候。

○試みに机上におき候へば、時を移さず涼しき音に鳴き出で、野邊の景色を心に描き候。

○金鈴うち振る樣なる淸き音、愛苦しく聞かれ申し候。

○夜毎の友とも存じ候へども、露を命の蟲、今夜は庭のしげみに放ち申す筈。

○今夜より狹き庭に秋の興添へ申

すべく、と只今より待たるゝに候果して如何に鳴くべくや。

○中秋……總語

○清賞また三五の月の良夜に及び、舟に樓に宴を張る人多く候。

○鏡を欺く月の東山に上れば、江樹に烟なくして晝よりも明かに候。

○空に一輪の月かゝり、波に萬顆の玉碎くる景色。

○轉ずれども玉盤に聲なく、照らして明鏡に影あり候。

○光り冴えにさえ候て、夜ならずかとも疑はるゝにて候。

○吾は舟を湖水に泛べぬ仰げば、月は天心に掛り、俯すれば影は水心にひたし居り候。

○黃昏の雨晴れて空一しほ淨く一點の雲もなく候。

○月白く風淸く、秋の最中の遊は舟にまさるものもなく候。

○秋之巻

◯夜更くるまゝに、山愈高く月いよよ小に、赤壁の遊も斯くやと思ひ出され申すにて候。

◯金波きらめく中を、水のまにまに舟を流し行くも之れ有り。

◯何れの樓閣も月見の筵、笛を吹き詩を吟じ、興はとり〴〵。

◯晴れし空に星の花稀に、過ぎゆく雁も數られて候。

◯小波に碎くる月の影、さながら金粉を散ずるに異ならず候。

◯月氣水の如く、風露衣に滴り候て、清冷骨に透り候。

◯金波入江に湧き、舟は畫中に棹さすかと疑はれ申すにて候。

◯來りて岸の松枝に懸れば、奇景えも言はれず候。

◯月を賞するには各宜しき所之れ有り、松院に宜しく竹亭に宜しく將僧樓に宜しく候

▲月見を催す

◎蕉翁が句ならねど、三日月の頃より待ちし十五夜、しかも今宵にて候ぞ。

◎只今の空模様にては夜に入りての晴想ひやられ候。

◎月見は例によりての船、金波銀波の湧く中に、東の白むまで遊び更したく候。

◎年に一度の明月、今宵を詩なくて過され申すべき。

◎舟に飽かば水樓の下に漕ぎ寄せ月の傾くまでもと存じ候。

◎碧天に雁過ぐる多く、良夜に人眠るもの稀なり、とは今夜の月を詠じたる名句に候はずや。

◎月に變りはなく候へども、催す遊びは種々これ有り、物數寄にも僧院を選び申し候。

◎雨降ればとて無月も風流、水亭に宴張りたく、中秋の酒は晴にのみ限り申さず候。

▲同　返辭

〇秋之卷

〇御同樣に待ちしは今宵、暮るゝを待ちかね候。

〇月は舟遊に限るにて、漕ぎに漕ぎて沖の小島に漕ぎつけ、千里の海原に一輪を迎へたく候。

〇是非に御作致し候て、清風徐ろに來りて水波起らずてふ、東坡が遊を其儘に繰返したく候。

〇雨なればとて固より中止すべくもあらず、白を浮べて名句賦し出で、雲間の姮娥を弔ふべく候。

〇月に名高き千里ヶ濱、沖には九十九の小島碁布、黄金碎くる波に棹さし、詩酒の興を縱にするは今宵に限り申し候。

〇月に名を得し江寺、舟に勝りての清賞想ひやられ、心は早くも其處に馳せ申し候。

〇君よ、御得意の一曲今宵を逸しては更に時なし、例の笛御忘れなき樣にと。

▲觀月に招く

◎今宵は名月、芋も掘り候、團子も作り候、酒もござ候、來て吾家の秋賞し給へや。

◎急に思ひたちし月見の宴、吟友に檄飛ばしおき候へば、君にも御詩筆携へ南樓の客となり給へ

◎月よりも圓き心あひの友のみの寄り合ひに候へば。

◎申す迄もなく候へども、席は新築せる水畔の亭、月上らば小川に金の波たち申すべく候。

◎船をも傭ひ、今朝より樓下に繋ぎおき候へば、月に棹さし空明に泝るも自由にござ候。

◎來べき客は、詩酒にかけては天狗連中のみにて、御相手には不足あるまじく候ぞ。

◎鬚面のみの獻酬は御意に入るまじくと存じ、此頃籍掲げたる清國藝妓侍らすべく、少しは韻事をも解するとの前披露にござ候。

○秋之卷

○御越しの早ければとて、太陽よりの苦情も有るまじく、月の上らぬさきにこそ。

○今し月の上らんとする處、手なる杯暫し擲ち、急ぎみ車飛ばし給へと斯く。

○君來ずば一座振はず、月は既に高う上り、天王寺の塔尖に懸らんとする處、一刻を後らさば不可、早々に來給ふべし、と飛札斯の如くに候。

▲同返辭

○御寵招有り難く、芋も酒も團子も辭すまじく、少し後れもせば暫時月に預けおき申すべく候。

○詩筆は既に焚き捨てゝ僕、雅筵に陪する甲斐あるまじきも、月には背き難くて御受け致し候。

○山に對し水に臨める御亭榭、月迎ふには絶好、必ず御末席汚し申すべく候。

◎命なくとも、爭でか月に後れ申すべき、日落ちぬ頃よりと、

◎御厚意にも月にも背くまじく、淸國の歌妓にも亦背き難く候ぞや

◎御急詩拜見、すぐ參上致すべく何事も御筵に侍り候上にと、月の光を浴びつゝ、草々。

▲友に寄す

◎千里隈なき月の光に誘はれ、淋しき旅の窓に筆執り申し候。

◎指折れば一別早くも五星霜、月も五たび圓き秋に遇ひ、樣々の事思ひ出でらるゝに候。

◎今宵眺むるは同じく一輪の月、身は各千里隔つる西東、月を鏡に取り代へ、二人を照らさせて見たく候。

◎住居定めぬ柁枕、今夜は浪花の浦にて月に逢ひ申し候。

◎船窓推せば空に一點の雲なく、露を宿せる江樹は玲瓏として秋淸

○秋之巻

く、見渡す限り晝よりも明かに候

◎澄めるみ空に通ふ雁の羽風に、零れて降るらしき露、樹に宿りて玉となり、砂に滴りて夢と消え、聲しなけれど返らぬ秋のためしには、逝く水には淙々と聲するに候

◎一天月明かにして長江水清く、君に寄せんの詩を思ひ、遂に成らで止み申し候。

◎月光千里、郷愁を照して明かに砧聲萬戸、客夢を破りて寒く候。

◎吾身如何にと問ひ給ふまじく、十年の落魄も亦功名の一つ、よしあし繋き浪花江、暫し假寢の水枕、月に愁を照らさせ居るにて候

◎人間の十年短しとも思はねども西や東と漂ふうち、早くも夢と消え去るにて候が、故山の今宵の月如何に照りしぞと懐かしく候。

◎水を欺く空の色、仰ぐも悲し其昔、君と別れし月に異ならず候。

◎江天一碧、秋氣澄んで水の如く相思いやまヽ月今宵、筆執れども字は行をなし難く候。

◎語ること多きも筆に盡し難く候僅かに數行の字、只是れ涙の跡とも申すべく、足らざる所は君よ君天上の月に問ひ給へ。

○菊花………總語

◎菊花は幽人の如く、梅花は烈士に比すべく候。

◎東籬に咲きそむる黃菊白菊、吾家を艶に致すに候。

◎凜々しく霜におごる姿、いと愛すべく、香亦聞くべく候。

◎寒を迎へて秀で、霜を帶びて芳しく候。

◎野人の籬落に咲き競ふ殊に宜しく、鷄の配合も亦惡しからず候

◎露は千片の玉を凝らし、菊は一叢の金を散ずるにて候。

◎翠葉は雲布き、黃蕊は星羅

○秋之巻

なるに異ならず候。

◎げに白菊よ雪彩氷姿他の黄菊等は遂に無用に候。

◎芳しきことは芝蘭にまさり茂ることは松柏に過ぐ。

◎黄なるを俗と云ふは、黄金の色なれば乎。

◎重陽に折り殘されし菊の花尚香の高きが床しく候。

◎萬の草木枯れゆく秋を、黄なる白なる花に咲き出で。

◎此花開き盡せば更に花なきにて愛惜に堪へず候

◎手折りて銀瓶に挿み、之を讀書の室に置く。

▲菊花を贈る

◎少々自慢かは存せねど培養の菊花雨三枝御覽に入れ候。

◎丹誠の程は、花の善惡にも相知られ候はんも、今春根分け願ひ上げし菊のそれにて候ぞ。

○花は他に後れて咲き出で候ひしも、吾家に育ちし菊姫にて候ぞ。

○野生のもの頗る趣味深く、序に任せ枝振のよきもの二本三本御詩料にもと參らせ候。

○田舍は菊によく、何れの垣根も黄金白銀に埋められ、翁等は一夜の暴富を誇り居り候。

○春の花時の様に騒々しからず、自然の眺めは壽命を延すに足るべく、御越し待ち上げ候、斯く申すは菊の主よりにて候ぞ。

○此に呈せる一本は、御案内の使者に代へし次第、菊に免じて一言の御返事賜りたく候。

▲同　返辭

○御惠贈の秋色一叢、其白きは霜にもまして清く、君が高風そゞろ欣慕の念に堪へず候。

○御自慢の香高き菊の一本、實に美事の出來榮、本家の僕も殆ど顏

色これ無く候。

◎御厚意の程は花の香に溢れ、書齋は忽ち野趣化したるにて候。

◎此頃の御地は、固より三月の花の繁華なるに引きかへ、靜幽なる事疑ふまでもなし。

◎其内、淸樽を具し候て、菊の戶相叩き申すべく候。

◎御宿の秋色には必ず背くまじとみ惠みの菊の露硯に受けて斯く。

▲觀菊に誘ふ

◎打ち續く菊日和、風流男には又なき此頃の秋に候はずや。

◎人聳しげの天氣、世は菊の噂とり〳〵、詩筆すてゝ身も心浮きたち申して候。

◎橐駝師の手に成れる人形仕立は自然を損じて趣味乏しく、菊は野生のものに若かず候。

◎凉しき野べに袂連ね、城外に

散歩試み、一日を菊の香に醉ひ面白く暮したく候。

◎幸に今日は重陽の佳辰、出でゝ村家の秋色を賞したく候。

◎金風白露、秋も漸く深うなりゆき、靈氣天地に滿つる一夜、美しき夢にや誘はれけん、み星頻りに雫して、淸くも咲き出でゝ菊の花

◎澄み渡る空高く、日影うらゝかに、鷄長閑に餌をあさる田舍の垣に、作らねど亂れ咲ける菊、目に見る樣に存ぜられ候。

◎噂に高き菊人形、俗なればとて亦すて難き風情之れ有るべく、午後早々團子阪へ御伴致し度候。

▲同返辭

◎春の花には背き候ひしかど、此度は首して御伴願ふべく候。

◎同じ菊にても野邊のが氣韻高きは、如何にも命の如くに候。

◎靜けきは此頃の郊外散歩、瓢簞

○秋之卷

は必ず忘れまじく、日の落つる迄野人の東籬に醉ひたく候。

○野べは菊の外、黄金打ち靡かす千町小田の稻の浪、如何に美しかるべくや、鳴子挽く子の姿も、群雀の騷ぐも想ひやられ候よ。

○都の秋は今年が初、是非團子阪への御案內願はし。

○名のみ聞く向島の百花園、菊は固より重陽に匂ひ出で候はんも、他に愛づべき花も多かるべく。

○明日の一日を利休下駄の齒のちびるゝまで、野の客と相成りたく一も二もなく御受け致し候。

▲菊見に招く

○我里は菊の花盛り、殊に評判高きは延命寺の花壇にて候。

○園は狹けれど、花は少なけれど發育よきは吾家の菊、なりとの村人の噂、一日來て野の秋に酌み給はずや。

◎白き菊よしとなら、吾家へ詩筆載せ給へ、黄なるが好ましとなら延命寺へ御案内致すべく候。

◎菊の添物としては、目を娯します青楓、鼻の下を喜ばすには御好物の鮎も御座候ぞ。

◎團子は御手の物、官營に等しき酒なれど、正宗の瓶詰用意ずみ、村酒は差上げまじく候。

◎霜を欺く菊の前に竹床几おき、歌語せば此世を忘れ申すべく、御相手には例の僭招く筈にござ候。

◎君が駕を迎ふるを得ば、花の香も一しほ高う薫ずべく、み姿の小川の橋に見るゝを待ち居り候。

◎桃と螢とに背き給ひし君、菊こそ是非にと、力をこめて筆太に書きしるして斯の如くに候。

▲同　返辭

◎菊の露硯に受けての御書、いとも香り高う讀まれ申して候。

○秋之卷

◎菊の香より高き御筆の跡、讀みゆくまゝに心よく、御庭の秋如何ばかりぞと慕はれて候。

◎今し、何れも菊の噂に人氣たち打ち續く日和をあて込みて、菊の本場の高津は賑かに候。

◎御地は菊にて古來名高く、分けて御園のは白き物のみの由、淸き香あるにより、霜に非ざるを辨ぜらるゝに候はん。

◎菊は隱逸の花とやら、君が高風と共に欣慕止みがたく、必ず參上の筈にて候。

◎菊の自慢聞けとなら、爭でか辭すべき、團子と正宗の壜と鮎とやら、まだ外にあらば、多々益辨じ申すべく候。

◎吾れ菊の御門叩かん日は、必ず榻の一半を分ち給へ、淸き香に醉はゞ足る、他の御用意は御無用

◎都下のは園のみ名高く、菊人形と來ては殺風景、御庭のに目を肥

やし申すべく候。
◎君、拒み給ふまじくと、俳友相伴う筈、此儀御承知あれかし。

○茸狩に招く

◎松茸の番小屋より一筆試み申し候、君招かんとて。
◎茸は疾く市場に上り候はんも、食ふよりも狩取りが第一の愉快にござ候。
◎大川の納涼の御返禮と申す譯に候はねど、茸の頃にも成らばとの御約束、忘れねばこそ。
◎所有の山は狹く候へども、君等が五人十人來給へばとて、尚餘りあるべく候。
◎腹ふくらすには此頃の時節に限り申すべく、手飼の鷄一羽二羽、よし十羽の上に出で候とも、命には背く間敷候。
◎盛りには少々早く候も、狩る事の競爭には此頃に若かず取

り易き御傳授致すべく候。

◎茸の一點張にて興なき樣に候へども、景色は極めて宜しき山選び御案内せん考へに候。

◎觀音寺と申すは、界隈第一の眺望に富み、澱江に往來する白帆をも手に取るべく、河内一帶の青山我物に致さるゝに候。

◎狩り取りて後の料理は、加勢賴みし村の娘に任すべく、紅襷かけて甲斐〲しき働き、御氣に入りたらば御賞め願はしく、豫め御約束申しこみおき候。

◎自轉車やゴム輪車に馴れし御一統、必ず一番列車にて我里訪ひ、下り阪の石車にも乘りて見給へよ

◎御越しの當日は、獲物の多少により優劣つけ申すべけれど、御土産の一籠と添物の栗には、決して甲乙かけ間敷候。

◎よし萬が一、日暮れたれば汽車は間に合ふにて、後れたりと宿に

は御不自由見せまじく候。
◎日は明後日の休暇然るべく候も御都合により、何日と御指定苦しからす候。
◎御連中は多き程宜しく、元氣よく押しかけ給ふべく、臨時汽車御仕立てならば最も妙に候はん。

○同返辭

◎御自慢だらけの御招待、如何に御手の物とは申せ、筆にも程こそあれとの評判にて候ぞ。
◎辭すまじ、明日の御招き、知ると知らぬ人との別なく、ロハなりとの廣告致し、御指圖の通りに押しかけ申すべく、男兒に二言なしとか、大勢なるに氣を呑まれ、後見せ給ふまじく候。
◎只御氣の毒なるは初山荒すと、鷄平ぐるとの二事に候へ共、そは御本望に叶ふべく候。
◎紅襷、何より氣に入り申して候

御望み通り関の聲上げ賞め申さん○土産の御心配は御無用、腹にドッサリと詰込み滿足致さん哉。

○秋の江村より

◎心ゆくばかりに晴れし秋の海、千里のはてなる白帆も近う見え候て畫よりも美しう候。

◎白き鳥一羽、水を掠めて彼方へ秋風さら〳〵と吹いて、汀の蘆をさわがすも心細く候。

◎眞砂三里、波に續ける松の綠に狹霧いつしか晴れ渡りて、秋の海の眺め清けく、朝風に送らるゝ白帆の二つ三つ。

◎秋風一しきり、枝を拂へば紛々と散る磯家の銀杏葉、名も知らぬ小鳥の夕日に友呼ぶ聲も悲しく候

◎空江月湧き、蘆花雪を吹き、漁唱の高う聞ゆる秋の暮、涙しぼるは遊子のみに候はざりしよ。

◎老いたりな秋江の景色、西風蕭

颯として蘆花の雪散る。

◎征人を送り盡す陣門の柳、秋に痩せて烟も薄れ冷かに候。

○紅葉……總語

◎青女の手に織り成さるゝ千反の錦、秋の野山は繪よりも美しく、日毎に詩人の夢を牽くにて候

◎楓葉一枝また萬枝、谷の小川に映ろひて、唐紅に水くゞる趣、秋の眺めは古今同じく、車を停めさせ申すべく候。

◎堆き紅葉の尾上に孤松の秀でたる、又一しほの眺めにて候。

◎花に名をあげ月に噂を流せる嵐山、紅葉の色もすて難く候。

◎夕嵐颯と吹けば、錦の千切れ飛ぶかとも疑はるゝ迄に散る紅葉。

◎瞰下すれば碧溪遥かに幽谷を流れ、老楓兩岸を擁して依稀、その白湍を隱見し、素絲を以て蜀錦を縫うに異ならず候。

○秋之卷

◎秋霜樹を染むるまゝに、紅葉黃葉淸き谷川に映じ、風景筆紙の盡す所に非ず候。

◎俯すれば一簇の紅雲深溪に湧き樹間よりは急流の白きを認め詩も書も及ぶまじき景色。

◎紅葉の映じては、十丈の飛泉も爲に赤う見え、素練を懸くるとは秋の瀑の形容には不相應。

◎黃なる紅なる秋の樹々、夕日に照らされては、殆ど形容の語を知らず候。

◎吾庭にも龍田姬のすさびは漏れで、柿の葉の燃えんばかりに紅葉して、隣寺の楓と相映じたる、美しさ限りなく候。

◎上り行く程に、樹林いよ〳〵濃かにして、紅葉いよ〳〵美しく、見上げ見下す錦繡の色、一入ほしいまゝに眺むるにて、思へば龍田姬の惠は淺からじよ。

◎夕日の光り明かに、紅葉の山に

照り返せば、紅いよ〳〵鮮かに、常磐樹の青く其間に綴れるも趣深く見られ候。

◎白雲蹈み分け、今し山の頂に達したるにて候、見下せば千溪萬谷秋酣に、二月の花よりも美しく見らるゝにて候。

◎血の如き紅葉の絶間より、一條の瀑布はかゝれり、白絲の瀧と申す由に候。

◎風なきに散る紅葉の、一片二片袖にとまりては錦を綴り申し候。

◎滿岸の楓葉霜に飽きて溪流水瘦せ候、われ吟杖を立つれば、唯見る錦を晒せるが如く、血汐の漂ふが如くに候。

◎山より山、谷より谷、見ゆる限り打ち渡す限り、紅葉ならぬは之れ無く候。

▲觀楓に誘ふ

◎二月の花よりも美しき紅葉の秋

〇秋之卷

色、小牡鹿の聲も戀しう相成り候

◎三尾の紅葉は夜每の霜に色づき淸き流れも赤う見ゆる由。

◎京都は四時に宜しき地、眞如堂若王寺、訪ふべき秋は高尾栂尾槇尾に限らず候。

◎紅葉と瀑となら、浪花を北へ六七里なる箕面公園然るべく、電車中の客とならば、一步を勞せずして送り呉れ申すべく候。

◎健脚自慢に徒步試み、草鞋に喰はれて俄跛も氣の利かぬ話、汽車か電車か、何れか其一を選び度候

◎名所の紅葉なれば、友は文に卷きこめて贈り越し案內に代へたる次第、遊意動きそめて此催し御贊成如何。

◎風なきに散る紅葉の雨、夕日に立ちて浴びもせば、繪にまされる趣ぞと。

◎石徑に車停めし古の詩人の事共思ひ出で、白雲飛び交ふ山路の客

とならばやと存じ候。

○盡きぬ興をば夕日に預くるにも及ぶまじく、開けし箕面には旅舘も無きにしも非ず候。

○瀑の音近う宿占め、月夜の紅葉眺めもせば、山神に於ても錦の着腐れにも相成るまじく候。

○宿泊は僕が勝手なる議論、先日歸の紅葉狩よと御承知の上、頭の振様を御返事有りたく候。

▲同返辭

○君ならいではの御發起、まづ其勞を謝し、改めて御賛成致し候。

○懐古の涙灑ぐは、何も吉野の花に限らず、一たび京都に足踏み入れなば、灑ぐに暇あるまじく候。

○紅葉は兎も角も、氣清うして天高く、此頃は實に吾々の乾坤とも申すべく候。

○示諭の如く、漸う秋老け候て野山の景色宜しく、白雲紅葉そゞろ詩情を動かすに候。

○秋之卷

◎此頃の野山は紅葉のみか、松茸に菊に秋興とり〳〵。

◎何れ日脚短き秋、月に野路を辿らん考へ、思ひは同じ紅葉狩にて候ぞよ。

◎急がぬ花の旅衣と洒落れし春の夢、今度の紅葉に繰返し、京の名所のすべてを探り盡したく候。

◎競ひたきは詩文、節したきは囊中の物、人の嫌ふ老人役、一筆僕が勤め申し候、御採用如何に。

◎頭の振樣を聞かせとや、委細承知、長き頤にて只一度、胸をばウンと叩き申すべく候。

◎御約束の觀楓は、纔かに一夜を隔つるのみ、吾が夢は容易に雲白樹紅の中に逍遙ふべく候。

◎飽かば景色に日暮れもせば、山腹のみ寺は雲に鎖され、鐘のみ緩う流るゝ風情、あり〳〵と心に描き出され候。

◎一度は明くる明日なれど、待ち

焦るゝは箕面の紅葉、早く錦引きはゆる山の人となりたく候。

○豐年の村より

◎先、僕が自慢を聞き給へ、村の秋は賑かに、千町小田には黄金のなるにて候ぞ。

◎案山子は功すでに成り、破笠と骨とのみに相成り、足よりは鳴子が手柄を立つるに候。

◎一國は愚か、日本中の雀が我村に集合せしかとも想はれ候が、豐年も此に至れば絶頂に候べき乎。

◎打ち續きし凶作は今年の秋に償ひ、而も尚十分の餘りあるにて、御學資は疾くに取れ候ぞ。

◎早稻はボツ〳〵、刈り取られ居り候も、中稻晩稻は首低れ、さら〳〵と風渡れば、足の下まで黄金の波を打ち寄するにて候。

◎稻のみか芋も柿も栗も豐年、み代太平と鼻唄謠はぬ人もなく、宿

○秋之巻

題となり居りし鎮守社の改築も、漸う解決致され候。

○六月の炎天に汗水垂らせし苦勞も、此秋に遇ひ候て自慢話の種と變じ申し候。

○豐年につけて多きは、倉の普請と嫁入婿取、少々現金めき候へども、兩三年前より延びしが行はるゝに過ぎず候。

○流石に商人は拔目なく、第一に入り込みしが呉服屋、幟おし立て鳴物入の廣告勢よく、娘御持つ人が迷惑と存じ候。

○餘の儀には候へども、田吾作までが敷島吹かすとは言語同斷、村長殿は顏しかめられ居るにて候。

○十年以來、故障のみにて打ち絶え居りし村芝居、老人等が若者に舁ぎ上げられ、鎮守の鳥居下にて興行の事に決し候。

○田の畦縫ひ行く村の娘は、新らしきリボンにメリンスの帶、昔の

我村には非ず候。

○豐年のおかげにて氣違ひじみし所作少なからず候へども、生命の洗濯と遁辭を附すれば、强ち咎むべき理由を見出し難く候よ。

○芝居の役割も出來居り候へども擧行して後駄評書き加へ、更に聞え上ぐべく候。

○栗を贈る

○秋深くなるまゝに、吾が山里は淋しく候へども、茸に續きての遊興は落栗拾ひに及び申し候。

○昨夜は大嵐、屋根は少々吹きめくられ候ひしが、栗と云ふ栗は樹に殘るまじく、夜の明くるを待ち兼ね、山に分け入りしと思ひ給へや、例の後の深林に候ぞ。

○案の如く、小石より多き栗、山猿と競爭にて拾ひしが即ち是、而も篩にかけん計りにして大なるを選み、御目に入れたるにて候。

○其一つ二つの興を記さば、携へし籠に溢れ、雨の袂にまで拾ひ込み、地に引きずりて歸りたるに候

○食ふよりも拾ふが樂しみ深く候へども、遠く隔てゝ君には叶はず何よりの殘念に存じ候。

○尚、此上と存じ候へども、小包の制限に餘儀なくせられ、余は後便を期し申し候。

○味は茹でたる物より燒きたるがよし、只御注意申し上げ度は其燒方の事にて候。

○卵の丸燒すると同様の理窟にて表皮を少しむき、熱灰の中に埋め給ふべく、香ばしき臭ひ鼻を衝かば、最早食ふ一點を餘すのみ、甘しとて頤を外さぬが肝要〳〵。

○食ふ事に心急き、少しの注意怠るが最後の助、爐中に百雷一時に發し、御書齋は忽ち修羅場と變じ申すべく候ぞ。

○山の人は、當分栗をば米に代ふ

るにて、貯藏は二三斛に及び候へば、何時にても御用に應ずべく候。

○晩秋だより

◎萬木悉く凋落し盡して山骨瘦せ、白雲底う飛んで晩風轉た冷かに身に泌み、秋は今し酣于に候。

◎夢とは露知らで消えにし春の色香をば、梢の霜に求むる秋の胡蝶の破羽は、まだ物知らぬ若き子が甘き暖かき戀にすてられ、この世苦しと戰く唇の震ひとも見えてあはれ深く感ぜられて候。

◎吹く風うら寒き秋の夕べの事、吾は孤影蕭然として、殘柳淋しき川の邊に杖立て申し候。

◎小川の堤に至れば、岸の柳は枯れがれに、水の囁きかすかに葦間の風に送られて、飛び立つ小鳥の二羽三羽、秋の影淋しく候。

◎紅葉に名を得し山々も、今は誰

○秋之巻

とて杖曳く人もなく、落葉ふみ分け鳴く鹿のみ、此上なう哀れに候

◯終日降り續く秋雨の未だやまず、さらぬだに夢成りがたき旅枕、衾はいよ〳〵冷えに冷え、目のみ冴え渡るにて候。

◯殘月の宿せる手水鉢の上に、大きなる桐の一葉浮び漂へるは、昨夜の木枯の名殘とも見えて哀れ深く、又さびしく候。

◎白露變じて霜となる五更の空雲井の渡る雁がね、秋草のしげみ露に咽びて鳴く蟲の聲冴ゆるとき誰かは淋しき想を催さざるものぞ遊子は況しての事に候。

◯野川の水淺う清らかに、霜枯れし秋野の末を細う流れては、宛ら一條の布を引きたらん樣、さゝ波に殘りし紅葉ばの、行末は何處の里ぞ、處定めぬ吾身の跡とも見られて悲しく候。

◯世のうき事もしろ雲の、山を浮

世の隔てなる、み山の庵の床しさは、落葉降りしく秋の暮にますものあらず候。

◎夜はいたく深けたるらし、瘦せ細りたる蟲の音斷續に、霜帶びし月は枯れし柳に影冴え候。

◎床しき花の朝露硯に受け、はかどらぬ詩筆執りしも、憐れいつしか夢と相成り申して候。

◎草花のいろ〳〵、暮れゆく秋の運命もろとも、散り布く公孫樹の朽葉に埋れ申し候。

◎小さき白き蝶一羽、瘦せたる翅ひら〳〵と、花なき萩の上に止れば、冷たき夕日池水を照らし候。

◎何處の寺の晩鐘ぞ、尾花の床を渡りて、餘韻かすけく流れゆく彼方に、旅僧の影見れ申し候。

◎野鳥一羽、あわたゞしく紅葉せる木の葉一片二片を、羽風に落して、遙かに墨繪の如くなる、杉の森へと飛び去る夕暮。

○秋之卷

◎淋しきは旅舍の秋雨、しみ〴〵と心に灑ぎ、故郷慕はしの念を促すにて候。

◎君は如何にして、逝く秋を送り給ふぞ、運命脆き吾には、涙の外に物もなく候。

◎花に泣き鳥に泣き、又しても暮れゆく秋の雨に泣く、自ら女々しと心に鞭ち候も、泣かでは晴れぬ吾胸の中にて候よ。

◎故郷の此頃は如何に、曾て別れし土橋の柳は、まだ散らずにか、御庭の菊は如何に、朝毎の霜に氣高う匂ひ候か。

◎旅より旅のさまよひ、面白きにつけ悲しきにつけ、重たき筆執りながらも、處定めねば御返書受くる由もなく、片便のみにて候。

◎今朝は海に出で候に、久々の上天氣、涙にぬれし袖かわかし、磯茶屋の酒に愁襟洗ひ申し候。

◎申すまじ、必ず申すまじ、秋の

◎いとゞ淋しき山里、夜毎の木枯に夢も破れがちいよゝ君戀しき空と相成り申して候（四五一頁ノ内）

◎凍れる硯に息吹きかけ、此方の雪景色聞こえ上げんとするにて候（四三三頁ノ内）





◎人の噂は固より信ずるに足らず候へども、火のなき處には烟の騰らぬ道理にて候ぞ（二九九頁ノ内）

◎御立志の點は、固より勇ましく存じ候も、待てば海路の日和とやら、人は時機に乘ずるが肝要かと存じ候（三〇三頁ノ内）

◎雪より白き霜踏み碎ての練兵、而も市街の民家に未だ炊烟起たぬ曉、殘月に煌々と鎗を西山に懸け、騎兵の馳突ふ、歩兵の掛聲も勇ましく候（三二一頁ノ内）

悲しさを、此世の苦勞を背むるも勉强の一つ、此頃よりは愉快なる御たより致すべく候。

冬之卷

○初冬……總語

◎み冬立つ頃としなれば、人目も草も枯れゆきて、たま／＼音なうものは、朝風に散る木の葉ならでは小夜更けてなく猿の聲のみに候

◎朝はおく霜白くして寒かりしが日の高くなるまゝに暖かになりゆき、詩集懷にして、柴折戸くゞりぬけ野に出で申し候。

◎柴折戸くゞりぬけ、枯草におく霜ふみ分けて、小川の石橋にかゝれば、はや薄氷結びて、落葉はとぢこめられ居るにて候。

◎朝日きら／＼と稻の刈株に霜白く、百舌の聲さても勇ましや。

◎操を誇る菊さへ枯れはて、木枯

〇冬之卷

を先驅として冬は來り申し候。
〇今朝聞きそむる百舌の高鳴き、霜の花朝日に映えて美しく候。
〇雲をも凌ぐ大銀杏、吹く木枯に落葉して我山里に秋は音づれ候。
〇冷たき霜に秋の七草は、悉く枯れはてゝ、世は冬の領と相成り候
〇庭の泉水は鏡の如く淺く澄みて二つ三つ浮ひし落葉の裏に、小さき金魚の斜に潜むもいと面白く、落葉を除くれば忽ち尾を搖り出し申し候。
〇冬の日は何處も短きに、まして嶺より明けて山に暮れ行く山里は殊に短きやうに覺えて、そゞろ憐れを催し候。
〇梢の木葉は絕えず吹く木枯に散りはて、今は一片の秋の影だに留め申さず候。
〇十里の松原ゆき交ふ人の影もなく、空かき曇るより早く、降り出でし村時雨、

◎ばら〳〵と窓に灑ぐ木葉は時雨かとまで疑はれ、故郷の夢も破れ勝ちにて候。

▲都の友へ

◎木枯すさぶ山窓に筆執り、淋しき此處のさま聞え上げ候。

◎落葉よりしげき思ひのかず〳〵筆に運ばせ申し候。

◎此頃の田舍は如何にと問はせ給ふか、拙なき筆に切なき情思御意を得べく候。

◎何事も後れ勝ちなる山里、木枯のみは早う訪れ申して候。

◎窓おせば昨日まで、操の香高き菊、あはれ凋殘見るかげもなく候。

◎散り殘れる紅葉を風流と、爐開の披露する俳人あるは、何れ都の事なるべく。

◎朝夕は大分冷え〳〵しく、冬の山々と同樣に、人の體も骨立つ感

じ致さるゝにて候、

○冬之卷

○春立つ頃は、優しき姿に見えし小富士にも、今朝は初雪白く候。

○海には怒濤荒れ狂ひ、吹き上ぐる北風も刀の如く、耳鼻殺がるゝ思ひ致すにて候。

○蕎麥の花の白きも散りて實と相成り、家々の圍爐裡には舌鼓打つ人のみにて候。

○今朝は霜分けて嚴しく、柿の枯木にて鳥一羽、其止まれる樣いとも淋しく見られ候。

○山には、初渡の小鳥聲高う、銃の響も聞え申すにて候。

○麥は凛々しう霜に傲り、二三寸伸ひ申し候。

○松原のみは相も變らず綠濃く、村時雨する折には、例の辻堂には巡禮の鉦淋しう鳴るは每度の事。

○渡の柳も枯れ盡し、流るゝ水は澄みに澄み、底に沈み居る茶椀の缺けまで讀まるゝにて候。

◎戸板にて圍ひし据風呂、鎌の如き三日月眺め候て、霰と共に浴するも愉快にて候よ。

◎一山越えての里の風呂、歸さには手拭氷りて杖にもすべく、此事田舎ならではと存じ候。

◎ザク〳〵と霜柱ふみ砕き、勇む獵犬牽き、朝の山入は愉快此上もなく候ぞ。

◎雜木林に白う立ち騰る一條の烟は、流れて雲と化するに候が、辛き世渡る炭燒の竈よりするぞと思召せ。

◎此方に寒月凍る夜半には、都の町の辻には、按摩の笛も冴え申すべく、憐れに聞き給ふは讀書する君にて候はん。

◎南天の實もあり竹椽つめたく、手水鉢には薄氷、柄杓手にすればザラ〳〵と響き致すに候。

◎朝の十時と申すに霧は尙晴れやらず、午後は上天氣にて候ぞ。

〇冬之卷

〇龍門瀑の下に、氷柱取る日も漸う近づき候。

〇霰たばしる板庇、破らるゝは都に馳する吾夢にて候ひき。

〇村時雨、晴れゆく西の空には夕日の影淋しく、鐘の響は緩う野を這ふにて候。

▲出遊に誘ふ

〇打ち續く小春日和、野の此頃は靜かにして宜しく候。

〇冬としも思はれぬ昨今、老木の櫻にも狂花咲き、出遊するには好天氣にござ候。

〇散り殘る紅葉に咲き殘る菊、村の初冬眺め惡しからず候ぞ。

◎湖上には一點の浮雲なく、輪を劃して舞ふ鳶、いとも長閑に散歩するに宜しく候、

〇沙魚釣や、青山萬里一孤舟、如何にも名句に之れ有り、一日を海に浮び候も興あらん。

◎一山越ゆれば諏訪の湖、富士の影さかさに映り申すべく、見にゆかばやと存じ候。
◎輕寒輕暖の初冬、登山も興あるべく、絶頂に杖を立て候て、千里の眼を縦に致したく候。
◎晴れし日は、隱岐の島根も見ゆるとやら、固より高からぬ山に候へば一汗かき度候。
◎山の骨を見るには、木葉落ち盡せる初冬に限るにて候。

▲同返辭

◎實に春を欺く天氣、御伴して長閑き景色に醉ひ申すべく候。
◎湖村の眺めは實に宜しく、鹽尻峠にたたば、優しき富士の姿目に入り申すべく候。
◎狂花もよし、殘菊もよし、村の小春に醉ふ一事、爭でが兩手を擧げずに居らるべき。
◎野茶屋に柿むき、駄菓子に腹ふ

くらすも妙に候はん。

◎餘は何事も袂を聯ねて、行々盡し申すべく候。

○入營者に贈る

◎愈御入營の事に決せし由さぞ御滿足に候はん、生は思はず知らず、萬歲を三呼致し候。

◎血稅を無理と騷ぐ竹槍時代は知らぬ事、不合格の人々は、護國の資格なきも同樣に候はずや。

◎御希望空しからず、而も甲種の御合格、目出度と申す外、呈する所の語を知らず候。

◎兵種は騎馬とや、いざと申す場合は、先以て斥候に立たるゝ事と存じ候。

◎砲兵最も勇ましく、實戰は固より望むべき儀ならねど、演習は時々行はるべく、其愉快さ目に見る樣に候ぞや。

◎步兵とや、射的は殊に御得意、

御入營後の成績、先筆頭にて候はん、隨分御勉强然るべく候。
◎輜重兵とかにて、御不滿の由に候も、國民の義務を盡す點に至りては、何も兵種に拘らず、御說の理由を知るに苦しむ僕にて候。
◎先年不合格の僕、御入營の事聞くも羨ましく候。
◎是よりは兵を練るに宜しく殘月淡き霜の晨、勇ましき事の數々第一に心に浮び申し候。

◎固より君が身體に相違なけれど御入營と決せし以上は、責任輕からず、國家のため折角に御自愛成さるべく候。
◎兵營御生活の模樣時々承りたく、敎育の一端として村の子弟に聞かせ申すべく候。
◎參りたけれど遠き此處、運び鈍き筆借りて萬歲言はせたるに候。

○同返辭

○冬之卷

○まさか不印にも有る間敷と自信致し居り乍らも、入營すべき身と成りしを聞き雀躍百回更に千回

○入營の事聞き嬉しさ限り無く、抃舞したるにて候、

○今も尚、兵役嫌ふ腰拔これ有り候も、固より大和武士には非ず、僕の如きは、他に千百もの體ほしき想ひ致して候よ。

○希望通りの騎兵、不日入營の曉には、練兵場の霜ふみ碎き、朝日浴び申すべく候。

○當分は馬に乘るより、馬に牽かるゝ事に候はんも、稽古積み上げ凛々しき騎兵と相成り申すべく、祝し呉れ給ひし萬歲の三字、必ず銘肝致すべく候。

○何より嬉しきは希望の砲兵なりし事にて、他日演習擧行の際は、他にひけ取る間敷と存じ候。

○自信の射的に候も、他に名手は雲の如くあるべく、稽古の際

の注意怠るまじく候。
○輜重兵とて不平には非ず、同じく合格もせば、騎兵こそと思ふのみ、入營の上は勤勞他に讓るまじく、幸に御安心下され度候。
○愈明後日出發の筈、入營後は御書なくとも、寫眞見るやうに詳しく御通信致すべく候。
○固より國家に捧げし身、自己の體と何しに思ふべき、此一事のみは、決して忘れ申す間敷候。

○夢に入るは先、霜の花しろき練兵場の曉にて、身は早くも劍影月に閃く間の人となりし心地。
○餘は何事も、營所の飯試み候上にと、御返事かたく〴〵右のみ。

○雪…………總語

○松に浪の音絶えし朝、世は只眞白く、常に喧しく聞く雀の囀り何となく靜かに候。
○あはれ、朝に夕にをかしきは、

○冬之巻

○山里の雪景色にこそ候へ。

○月は雪に、雪は月に、映り映ろひて、氷よりも冷かに候。

○見るに足らぬ冬枯の梢も、また常磐の松も、ひとつなみ、六の花咲き出でゝ、春の盛りにも勝りたる景色、いと面白く候。

○六花紛々として鵞毛の飛ぶがの如く、また鹽を空中に散ずるが如く、忽ち世は玉と變りはて申し候。

○昨日より降りしきる雪は今も尚やまず、書齋の窓は半ば埋もれんとするにて候。

○一夜にして塵の世を埋め、頃刻にして、枯木に花咲かせ、清しとも美しとも筆に叙べ難き景色。

○霏々として柳絮の如く、紛々として鵞毛に似通ひ、而も地に落ちて聲なく、見る〱白妙に世を淸くするにて候。

○賤しき茅家も玉の臺、半ば朽ち

し板橋も水晶の欄と變りはて候。

○二の字蹈み出す俳人、轉ぶ處迄と洒落るも有るべく候。

○雪の夜は歌集には興がり難く、油も凍らんばかりの窓の下に、軍書繙くが妙にて候。

○雪の光を借りて書を讀みし孫康が苦學、常に想ひやられて候。

○松に灑ぎ竹を壓し、天地は死して四方に聲なく候。

○積みては夜も尚明かに、遶れる山山、よく目に入るにて候。

○見渡す限り只白う、皚々たる銀世界と相成り候。

▲雪見に誘ふ

○今朝は珍らしき雪、人烟繁き大阪にては拾ひ物、二の字蹈み出さざるを得ず候。

○天地の靜けきも道理にて、深さ五寸に達せる町の雪、二十年振との事にて候。

○一帶の連山、水晶の屛風と變じ石橋も玉と化したるべく、書齋にかじけ居る塲合にある間敷候。

○蒲團着た姿は兎も角、雪の東山も亦愛づべく〱、急に思ひ立ちし小集、酒瓢の御相手は如何。

○自宅の雪見は興淺し、せめて橋詰の茶屋まで參りたく候。

○豆腐に名高き菊の茶屋、雪も自慢の景色、鶴氅着け給ひては如何に、獨酌は興あるまじと此書試み申して候。

○玉塵蹴り、御存知の俳友月仙子訪ひ度、雪の口に來よとは平生の約束にござ候。

○京の雪見は木屋町宜しく〱、美人に簾捲かすが最も風流かと存じ候

○雪は朝酒に限るにて、下戸の議りは、棚に上げて然るべく。

○此寒さに、とは孫娘の注意、其處が俳人よ、とは野拙が返辭、遂に此催し致せる次第。

○一風變れるが即ち詩人とも申すべく、固より酒はつきもの、罪あるにも致せ、そは頑是なき罪。

▲同返辭

○御書來べしとは、昨夜ちらつく雪にて豫知致し居るにて候ひき。

○實に都會の大雪は拾ひ物、酒價たかければとて、今朝を醉はずに可るべき。

○必ず御誘ひ有るべし、と瓢には酒入れ、相待てるにて候よ。

○昨日の野茶屋も今日は玉の臺、僕等は大臣氣取りて縱飮試み申し度、すぐ御伴する筈にて候。

○理窟つくれば飮む事多き詩人仲間、其處が佳癖乎と他人申すべけれど、耳塞ぐが上分別。

○お前達が雪達磨遊びと同樣なりとは、孫へ對して答へし遁辭、御一笑あるや、否や。

○木屋町にて、と本式の雪見、名

○冬之卷

○句を得ば高くもつく間敷候。

○花に背きし東山、雪に無沙汰拂ひするも妙に候はん。

○興は積れる雪と深きを爭ふべく肩隨せん、轉ぶ處まで。

○菊の茶屋の湯豆腐、一層酒に味つけ申すべく、雪待ちし三升入の瓢、用意のため携へ申すべく候。

○鶴氅を典して酒に換ふるは實に此雪、君が御誘引猶更吝むべきかは。

○田舍の住居は如何はし、町に來給ふべしと勸めし手前も候へど、月仙子驚かし申すべく候。

○御指圖なかりしも、今日の雪見に漏し難き友の候へば、共に御伴致すべく。

○雪月花には、假りに世捨人となるも亦風流、よき御誘ひ何とて辭し申すべき。

○變人同士が氣の合ふも面白く、雪の解くる迄もと存ずるにて候よ

○迂回して詩友誘ふべく、町外の玉の樣なる石橋にて御出會致すべく、其處に御待ち候へ。

▲雪合戰を催す

○案外なる大雪、運動として例の合戰相開き度、場所は櫻の馬場然るべく、會期は準備出來次第にと飛檄斯の如くに候。

○只今より雪合戰致し度、君は取敢ずの西軍、御指揮の下に同士御召集然るべく、此方は無人數ながら志氣振ひ居るにて候。

○今朝の雪の深さは平地で六寸餘これて彈丸に換ふるは苦もなき事花々しき合戰申し込み候。

○戰機は今朝の雪に熟し候ぞ固より御用意濟みとは存じ候へど整々堂々の陣張りたく、敢て此書を將軍に呈し候。

○去年の東軍と侮る勿れ、今日は美事に勝ち申すべく、十分に壘を

○冬之卷

固くし死士をして守らせ給へ然もなくば危く候ぞ。

○兵を募るには、兩軍の自由に候はんも、辨慶橋を界に東西を分ち各の領と致したく候。

○去年內應したる者は、必ず隊に編制すまじく、我軍に反者多く出でしとて、此儀あるには非ず、双方の神聖を保たん爲にて候。

○混戰自由、また騎虎の勢に候はんも、相搏するは怪我し易く候御部下へは父母の身體なる事御諭し願はしく候。

○方法は例の通りにて、勝敗の審判は、豫備軍曹の某氏に願ふべき筈にて候。

○手の甲赤くして雪こね、力の有らん限りに行り申すべく、戰死は申す迄もなく覺悟の僕。

○双方の勢揃は、共に毘沙門堂にて致すべく、子供好の住持には芋粥の饗應を乞ふべく候。

○雪は又しても降り出し申し候よ世に云ふ天助とは、今日の天氣に適し申すべきぞ。

▲同　返　辭

○流石は君に候かな、意氣養ひての二度の旗擧げ、會戰の事委細拜承決して背を見せまじく、討死すれば東に伏し申すべく候、武士に因める櫻の馬場、勝つも負くるも時の運、只々いさましく戰ひ度ものにて候。

○案外なる大雪との前提へ、敵に油斷させん爲の一語なるべきも、其手には誰が乘るべき、昨夜よりの御支度知るに難からず候、

○東西兩軍の領分異議なし、宗黨の者共は此方の指圖を待たずして夜の明くるとすぐ、疾く馳せ集り居るにて候。

○內應も時に取りては軍略の一つ强ち咎むべきにも非ず候へども、

雪合戰には取らず、至極御同意致し候、但、去年の人々は免してやりたく候。

◎奇道は廢し申すべけれども今度は戰場廣く、地勢高下、隨うて進退に變化も多かるべく、伏兵は固より禁ずまじく候。

◎組討は常に腕力を誇る人の免れぬ所に候も、嚴重に申し渡し置くべく、何れ二人三人の違背者は勢ひ上、生ずべけれど、其は軍律にかけ申さん。

◎城壁を固めよとは天晴の御忠告に候も、そは敵にこそよれ、烏合の兵には無用の事にて候ぞ

◎何れは戰場に骨曝す軍人、花々しく戰ふは覺悟の前、成らば命を全うし名を揚げたく候。

◎馬場の雪にて不足もせばと存じ夜の中に丸めおきし雪達磨、軍馬と共に運び申すべく、其内の一つ御見舞として持たせ上げ候。

◎御互に健闘シタタカ試み、後の自慢の種作りたく、負けもせば笑の種と變ずべく、御用心が專一に候ぞ

◎今し練兵中、卍巴と亂れ降る雪の中にての走り書き、文意不足の點候はんも、應戰快諾の事は分明に候べし。

◎共に勢揃へする事も、審判官の事も承知致し候、又しても降るよ雪、此世の埋もる迄もと望み候。

○嚴寒見舞

◎凍れる硯に息吹きかけて筆驅り御機嫌如何にと伺ひ上げ候。

◎寒燈の下に雪折の竹聞き、思ひを千里隔てし君に運び申し候。

◎冬の寒けさは言はずと知れし事に候も、今年は特別に嚴しく候はずや。

◎山家の此頃は言語に絕えたる寒氣、爐の榾火に溫まり、寄ると觸ると君の噂するにて候ぞ。

◎狸汁の價値いよ〳〵著しく相

成り申し候。

◯今年は大池全面に氷張り詰め候て、餌漁る獺の叫びも寒く、月は物凄き光放つにて候。

◯雪は毎日の樣に降り、大地は水晶の如くに凍り、駄馬の往來する蹄の響きも冴えて聞え候。

◯寒さは此上もなく候へども、氣は愈凛と引き締り、何をするにも張合ひに御座候。

◯御宅の御老人樣も相變らずの御元氣、宿元の隱居も鑁鑠若者そこ退けにて候ぞ。

◯舊に依り瀑の氷柱取り盛んに行はれ候が、今年のは孟宗竹の子よりも大きく、手頃の石擲げつけたりとて、容易に折れ申さず候。

◯雪打も大流行、達磨は家每に作られ候が、此頃の寒氣續き候はゞ來春迄も形崩れまじくと存じ候。

◯愉快なのは雪の日の狸薰べ、昨日も二疋獲物これ有り、後とも言

はで腹へ埋葬、お伽噺めきし事實際に行り居るにて候よ。

◎住めば都と申す如く、水鼻啜り一里の山越えての學校通ひ、吾里を極樂淨土と觀念致し居り候。

◎都の此頃は如何に、いつも花のみには候まじく、辻には按摩の笛月に冴え申すべく候。

◎水の都と謠はるゝ大坂、川風如何に寒かるべき。

◎縱橫に馳せ交ふ電車にも、暖氣通はせ居る由に候へば、寒氣は夢にも知り給はざるにや。

◎暑きも都、寒きも都と噂に聞き及びたるにて候。

◎暑氣も寒氣も天地自然の順序、只長へに保ちたきは、交情の冷めぬ事にこそ候へ。

◎寒ければ寒き程、御達者の事と信じ居り候も、老人共は殊の外に心配、御近況承りたく候。

◎荒ぶ浪音に紛るゝ千鳥の聲聞き

つゝ、火さき寒き燈下に筆執り候て、よしなき事迄斯く。

○同返辭

○寒燈友に御認めの文、霰だばしる下宿の窓に繰返して拜讀な致候

○何日も御元氣よき筆致勇ましく讀まれ申して候ぞ。

○花の都も冬の寒氣には漏れ難く霜に磨かれし月の夜半、見上ぐる鬼瓦も物凄く見え申すにて候。

○此方も仲々の寒氣、今年は又別段の由、只嬉しきは田舍にて鍛えし吾身、君にも勝りて達者なる事にて候。

○普通の運動に飽きし諸學生等は遠き諏訪湖の氷辷りに行く人多く寒氣を恐るゝは何處も同じく老人のみにて候よ。

○宅にては何れも無事の由、御序のとき、書中の事ども御傳言、安心する樣に願ひ上げ候。

○今も尚、昔想ひ出すは狸捕る一條圍爐裡の椽の雪の夜、羨ましく存じ候。

○都下は紳士も書生も功名の熱に驅らるゝ人多く、寒さは身に感ずまじく、生は勉強に熱中して汗流し居り候。

○名にし負ふ水の都、吹き上ぐる風は流石に寒く、夜航子の燈火の瞬き身に泌む樣にて候。

○今に忘れ難きは氷柱取り、瀑の音も絶えんばかりの景色、目に見る樣にて候ぞ。

○今朝は都にも少々雪降り、丁稚等が興がりて作りし達磨、土と共に丸めて漸くに六尺餘、差當りての役目は明家の留守番にて候。

○千鳥鳴く磯村の夜半、海も眠りて更に寒さ烈しかるべく、御書の筆のかすれは、硯の水凍りての結果と讀まれ申し候。

○雪の日の御登校は、例によりて

の蓑なるべく、厚羅紗に身を埋むる都下の書生に見せま欲しく候よ
◎元氣なればとて、身の寒氣に鍛え給ひたればとて、斬らば同じく血の流るゝ人、隨分に御保養專一
◎寒氣よりも苦學こそ身に泌み申すにて、此書も火の氣なき二階の隅にて認めたるにて候。
◎寒の明くるよりも、身に花咲く春が待たれ申して候。
◎吾筆も冬枯してか思ふ十が一も盡し難く、匂はぬ言の花不風流に候はんも、元氣なれば幸に御休神あれかし、と書き納め申して候。
◎學舍の雪の光を借りて筆執り候て、思ひ出るまゝ千切れ〳〵に書き綴り、御返書に代へ申し候。

○歲晚だより

◎流るゝが如き年華又しても暮れんとするにて候。
◎歲月人を待たずとやら、顧みれ

ば一事成るなく、今年も殘り少なく相成り申して候。

◎光陰の過ぎゆく箭よりも早く昔も今も怠る人を待たず候。

◎何事も進みやらぬに、年のみは白駒の隙を馳するが如く、春よりの怠り今更のやうに打ち驚かれ申し候。

◎過ぐるともなう、いつしか年は暮れ行き、憾概遣るに處なく候

◎惜みても過ぎし年月は返らず、再び此後悔をば招かぬ樣にと存ずるにて候。

◎花や納涼は昨日の樣に思はれ候に、轉りて止まぬ年の小車、除夜近くおし迫り申して候。

◎こしかたを顧れば皆夢の如、今更悔いても詮なく候。

◎長き一年を何事にか暮しぬる、思へば盡きぬ恨のかずく、小さき胸に溢れ申すに候。

◎荒浪しげき浮世を渡る棹執る手

○冬之卷

拙なく、雨雪亂れ灑ぐ天涯に歳又暮れんと致すに候。

◎一事成り難く年は容易に老い、十九の春も眼前に逼り、胸に疊むに餘りある山成す慨慨。

◎今更申すまじ、今更歎ずまじ、學の道に後れずば、二度の後悔無き筈にて候よ。

◎花にも月にも罪なし、夢のごと跡形もなく一年を暮せしは、全く吾身の過ちにて候。

◎今年こそはと思ひつゝ、又しても慰藉し難き天涯歳末の感。

◎今日より、側目もふらずに學海に舟進め申すべく、御互に來年よりと申す間敷候。

◎月日と共に學びの道に進みたく勉めて休まずば、流れ早き年の瀨にも戻され間敷候。

◎年明けなば、父母の兩鬢に春風吹き上り、一層の霜を添ふるかと憂に堪へず候。

◎旅路の歳晩、君にも漏し難き遺憾多く、知れるは寒燈のみに候はん、餘は御賢察をと。

◎逝く年は快く餞すべく、元日を待ち、一生の計立て申さん哉

◎今に至りて無益の筆は弄すまじ何事も來年よりとこそ。

◎明日は暦も改まりて、人も新に文の林に分け入り申す覺悟。

◎明日は今年の吾ならずと、悲しき中にも又嬉しき事の心に湧き。

◎錦着て故郷に歸る日も、年送る毎に近づくにて候。

◎友より贈られし早梅見るにつけても、出世の花着くる事の遲き身恥かしく候。

◎來れ新年、汝と競はん哉、とは日記の最後に大書したる句にて候ぞよ。

◎春待ち顔に笑む盆梅の香聞きつゝ、斯くは筆執り申して候。

◎今年と共に盡きなんとする殘燈

の下にてと、草々。

○盡きぬ事共は筆に預け、來ん春にとて、先は右まで。

雜之卷

○結婚を賀す

○相生の松枝千代かけて諸共に榮え給はん御事も、今度御良縁整はせられ、愈明日の吉辰に御輿入の由。

○御良縁、首尾よく御整ひ、華燭の典擧げさせ給ひし由。

○松の翠の色深く、龜の齡の萬代までも、限り知られぬ御契。

○千代呼ばふ鶴の翅を重ね、高砂の松の色かへぬ深き御契。

○鶴龜のよはひをこめてと、深く〳〵祝ぎ奉り候。

○千代八千代と幾末永く、御祝ひ申し上げ候。

○若松、嫋竹の生ひ末遙かに、御

家門の榮え、是よりとこそ。

◎千歳の蔭に、萬代の色を添へ、御行末ます／＼繁昌。

◎才學淑徳世にも雙びなき御伉儷。

◎正木のかづら、元の根ざしを尋ね候へば、水と魚との契。

◎新婚の御旅行にもならば、遠くもあらぬ吾里にし給ふべく、花も盛り、鳥も好音に歌ひ居るにて候

◎頃は彌生の花しげく、温泉もござ候へば、優しきみ姿の影二つ、胡蝶戯るゝ春の野路に見ゆるを待ち居り候ぞ。

◎此二品、海老は近き浦曲に、海人が漁りたるにて、絹は今年九十の祖母が、夜毎のすさびに紡ぎし物、また是れ献芹の微意に候へば、幾久しく御受納。

○出産を賀す

◎平生の御希望の如、大兵の

○雜之卷

御男子御出生の由、御祝儀に代ふるに、御手柄の三字參らせ候。

◎陸軍萬歳、御得意の程知るべく餘所事とは思はず、小躍〱して打ち喜び申して候。

◎君が御喜悦は言はずも哉、令閨の御鼻は正に三尺なるべくと存じ日頃嚴格なる御隱居も、顏崩しての御滿足に候はん。

◎大きやかなる鯉幟、貧乏質に入れても進呈致し、御前途の功名禱りたく鬼が笑ふとは昔の事、今日より御豫約致しおき候。

◎女御子にて、少々御不平の樣に候へ共、奥樣は却て御喜びなるべく、此次に御手柄拜見致し度候。

◎最初は御女子の方が寶とは、古來の言ひ慣はし、子なき吾々等は羨ましき極みにて候ぞ。

○出產通知

◎御心配の妻、朝日さす窓に元氣

よく、男子生み落して候。

◎祝して呉れ給へ、生れしは肥滿の男子、徵兵合格は保險附にて候

◎泣き立つる聲は雷より烈しく候何れ行末は陸軍もの、相當の御役に立つべくと存じ候。

◎不首尾なは女子、目出度さ一向に引立たず、內證に御知らせ申す迄に過ぎず候。

◎若し御祝詞となら、男子生るゝまで御預け致すべく候。

◎姉上様には、兄上の御留守中に御安產、何れも御健全、其生れしは女か男か、千里眼御研究の材料に供し、殊更明記せで、御通知のみに留め置けるにて候。

○入學せる友に

◎中學へ御入校の由、普通の事に候も、其實出世の門出、前途は雲の上まで開け居り候へば、進み次第は勉强次第に候ぞ。

○小學時代より才學秀で給ひし君前途知らるに難からず候へ共、尚此上ながら螢雪の功積ませられ度、希望此事。

○よし七里の城下とは申せ、故郷辭すれば同じ遊學、恙なく御成業祈り上げ候。

○學生の風亂れし今日、御志操堅固にし給ふべく、才子才を恃んで終生を誤るは、古今其例に乏しからず候。

○隨分御勉强、我鄕に學生の模範を御示し成さるべく、呉々も前途の遙けきを忘れ給ふべからず。

○一村の希望の通り、商業學校へ御入校相叶ひし由。

○豫期の如く、工業學校へ御入校の事に成りし由。

○敎育會の後援あるにも致せ事此に至れるは全く、御才學と御行狀の然らしむる所にて候ぞ。

○有志等の厚意に基く御遊學、申

さば村費も同樣にて、從來になき例、御責任輕からず候。

◎君が御名譽は、即ち僕等が名譽此上は何事も申す間敷、御心に御判斷仰ぎ候。

◎君をして商校に入れしめしは、其仔細申さずとも自ら明白、此上に願ふは御健康と御勉強。

◎我里の工業衰微の今日、將來は君が腕を待ちて恢復せんとする一統の屬望に候。

◎君御入學出來しと聞き、嬉しき餘の走り書き、隨分勝手な事のみ申し候へども、鼻垂れ時代の腕白仲間、必ず咎め給ふなよ。

○卒業の友に

◎雨に風に雪に三百六十五日、而も幾年を重ねて御通學の功一朝に成就なされ。

◎町の學校とは事違ひ、野越え山越えての御登校。

◎怠り給はざりし證據には優等の御成蹟。

◎積年の御苦學、見事にも一朝に其功を奏し。

◎貧しき中の御苦學、普通の御卒業とは思ひ申さず、此上は如何なる御方針にて候乎。

◎御卒業と聞き何よりも目出度、吾事の樣に嬉しく存じ候。

◎中學の御卒業いと賀すべきも、此上尚、高等學校の門御潛り成さるべく候。

◎彼岸は尚遥けく、大學の門は、雲に鎖されて見えぬ程に候へば、隨分御奮勵願はしく候。

◎商校御卒業とや、刮目して待ちし事に候も、今更の樣に目出度、錦衣しての御歸鄕遠かるまじく、同窓の誰彼君の御噂のみに日を暮し居るにて候。

◎此方も日に衰微、君が敏腕を待つもの多々之れ有り、御歸鄕

をば千秋の思ひ致す人ばかりにて候。

◎水産講習御修了の由、御歸村後は島の面目をも一新致すべく村長も自慢の鼻高く候ぞ。

◎文學、さては法律を選ばず、工業に身を立てん御目的、一統の敬服に堪へざる所、今後の御活動目覺しく候はん。

◎是より暫し實地の御練習とやら大阪は東洋第一の商業地、御經驗積みし曉こそ、御腕ます〳〵冴え、信用いよ〳〵厚く、御得意知るべく候。

◎算盤手にするは俗務に相違なく候へ共、世の萬事すべて俗ならぬはなく、志操は高尚にして、餘事に風月を樂しむ、眞の商人とも申すべく候。

◎今後は愈御才學の實地に顯はるゝ處、名を江湖に博せらるゝ豫め知るに難からず候。

◎村の有志の眼識に違はず、今日の御卒業、舊同窓の吾輩等も大に面目を施せるにて候。

◎御歸鄕遠かるまじきも、嬉しさの餘、一言以て祝詞に代へ申し候

◎錦衣して御歸家の君に接する近々の事と存じ候も、一片の祝辭呈したるにて候。

○長壽を賀す

◎御父上樣には、還暦の御賀花の此頃を卜して御宴開き給ふ由。

◎御老母樣には古稀の御年、彌生の吉辰に御壽筵。

◎喜壽の御賀とや、人生七十古來稀なりと申すに斯かる御高齡。

◎御祖父樣には米壽の域に達せさせ給ひ、尙壯者を凌がん御元氣。

◎九十の御高齡、而も高履闊歩の

御達者此上尚、百五十迄もと賀し上げ候。

◎百千の御齢の末までもと、御祝ひ申し上げ候。

◎御兒孫の君等、鶴髮童顏の御祖父樣の爲。

◎年波の程も見えさせ給はず、御百歳とは眞しも思はれず候。

◎此一軸は、御高齢に肖りて試みし拙筆、只ほぎ參らする印までにと。

◎賛辭は父、畫は僕、拙なくとも御老母を祝ぎ奉る寸志。

◎舊師の爲の御賀筵、學風の如何も此一事に知られ、先生の御德、轉た慕はれ申すに候。

○壽筵披露

◎明日の紀元節を卜して老父の壽筵開き度候、折柄梅の花盛り御遊び旁御枉駕願はし。

◎九十と申せば恐るべき高齢、し

○雜之卷

るしばかりの賀の宴催し候に付。

◎過日は美事の御畫有り難く、祖父は御題詩に次韻一双の掛物に仕立て申し候。

◎明日は曾祖父の壽筵、君等を招き相撲取らんとの希望、八十の老人に負け給はゞ極めての恥辱、腕によりかけ褌引締め、早朝より御攻めかけ然るべく候。

◎餘興として自彈の薩摩琵琶試みんとは、吾が祖父の前披露、四十年來人に示さぬ隱藝の由。

◎日露役の實戰談に花咲かせ、君等を喜ばせんとの事、よき聽き物なるべしとは、曾孫の僕が御案内致すに候。

◎頃は三月花盛り、珍物なけれど其多き事が自慢の御披露、當日は前日より腹減しおき、御來車こそ願はしく候。

◎御祝儀物の御禮は、式場の酒肴にて相殺願ふべく、待つは御越

しにこそ。

◎力自慢の君漏しては、老人も不興に候はん、君よ必ず來ませ。

○新築を賀す

◎自然の山水を利用しての御第宅四時の勝に宜しからぬはなく分きて春の花に富めばとて、香雲閣と名づけ給ひし由。

◎六甲山脈を後に、大阪灣をば前に、山水の勝を一樓に集め給ふ由承り候。

◎環らし栽うるに修竹と野梅とを以てし、泉を引きて池に注がせ、一園悉く數寄を凝させ給ふ由

◎南方は際涯なき海原、高樓の簾卷かば、沖ゆく眞帆片帆の影、席間に落ち申すべく候。

◎山に倚り水に沿ひ、高底として樓閣構へ給ひし由に候へば、花と月とに最も妙にて候はん。

◎竹樹の蒼々たる、溪水の潺々

〇雜之卷

くたる人間の夏を知らざるべく候

◎御宅此程落成の由、聞くが如くは、一木一石の微と雖も、數寄を盡くし給ふとか、さらぬだに好き山水の勝地、更に幾倍もの價値を增せる事に候はん。

◎情を園池竹石の間に肆にし給ひ以て塵事を忘れ、詩酒三昧に世を送り給ふは是よりにこそ

◎城市に接したるも地自ら高く四圍の修竹は俗を遮り、雲に聳ゆる高樓には、群峰相競うて座に入る由、聞くも羨ましき御住居に候はずや。

◎流石に君が御住居、自ら浮世の外の趣のみに候はん。

◎花開き鶯鳴き、人の來るを喜び申すべく

◎好花相續き、啼鳥遠く聞ゆるにて候はん。

◎酒を酌みては水に望み、琴を抱きては松に倚るべき御住居。

○百花園と名づけ給ひし上は、四季の花とりぐ\に咲き代へ、目を娯しませ申すべく〻

○其内拜觀願ひ上げたく樓上の客となるを許し給ふや、如何に。

○あはれ、吾は塵深き巷に臥する身、只の半時にても雲の影流るゝ亭に坐し君と相對するを得ば此上なき幸福に存ずるにて候。

○新築披露

○別莊とは其實名のみ、雨露を凌ぐに過ぎず候へども、山にも海にも富める絶好の地にて候て、自慢の點は是のみにて候。

○雲を自然の垣根とする住居、門には小琴の音に似通ふ細流清けきが繞り居り候〻

○園は廣からず候へども、處狹きまで栽ゑ込みしは四時の花卉、今し梅の花盛り、香雪の地に滿ち青きは門なる松のみにて候。

○雜之卷

◎梅咲く下にて、新築祝の宴開きたく、此頃は月も宜しく〳〵、夜に入ればとて、灘の美釀に寒さ防がせ申すべく候。

◎今し櫻の花は雪を漲らし、屋は一角を餘すに過ぎず、君よ、駕を枉げさせ給はん日は、細流に從ひ修篁を穿ち給はゞ、直に吾家の門に達すべく候。

◎凝りては思案に背きがち、花に後れて今し落成、葉櫻を肴に一獻まゐらせ度、鉢栽ながら牡丹は盛りにて候。

◎見渡す限りの新綠、一しほ詩眼を淸うし、幽景比なく、式ばかりの粗酒獻じたく、麥浪蹈みわけ音なひ給へ。

◎夏なればとて蚊もゐず、墨繪の如き松原越しには、白帆鮮かに見らるゝ今度の家。

◎小阪だら〳〵と下らば淸き濱邊海水浴に御伴致すべく、晝の日中

と雖も、松の木蔭に臥さば夏は此處にはあらず候。

◎第一の自慢は夏の此頃、青葉漏る月影凉しく、杜宇の聲も憎からず候、

◎假普請には候へども、君臥せらすには御不自由させ間敷、避暑の御逗留何も御遠慮に及ばず候。

◎御饗應は、松吹く風に波に湧く月、其處を見込みての今度の新築一夜來て吾家の客となり給ひ、嘘か眞かの御吟味願はしく候。

◎春の花は口廣く申し兼ね候へど紅葉には聊か自慢の積り。

◎電車停留塲よりは少し隔たり居り候も、一筋路の迷ひもなく五六町にして石橋を得べく、見上ぐる山の中腹に、茅家の軒づま現はるゝ其が即ち吾家。

◎御披露申せばとて、評判程には無き俄普請、樓よ亭よ閣よと種々名あるは、風流氣取りての事、必

ず一見驚き給ふ勿れ。

○招けるは文字の友のみ、旁々御越し待ち上げ居り候ぞ。

○轉居通知

○北野なる舊鶴の茶屋跡へ轉居致し候、今しも櫻の花盛り、市内とは申せ、尚以前の面影を留めて靜かに候ぞ。

○城南の舊梅屋敷へ轉居、流石に名園の跡とて、古木の一二株、昔のまゝに咲き出で居り候へば、黄昏の月に柴門叩き給へ、久々にて歌語せん。

○町とは名のみ、相も變らず片隅に候へども、淀川橋西詰南側に引越し候、櫻の宮の花には後れ候へども、殘花なきにしもあらず、御散歩かた〴〵御來駕待ち入り候。

○森の宮、藏鷺庵へト居致し候、以前の住居とは眺め雲泥の相違、連山の影座に入り、詩料

多く候。

◎折柄の新綠、暗破る杜鵑も聞かるゝにて候。

◎電車を利用してと、肩書の處へ轉居、年久しく住みすてし屋敷とて、化物の出さうに思はれ候へ共今し藤の花盛り。

◎新綠すべる風淸しく、市内とは趣異なる景色、俗に飽き給ひし折、み車命じ給へや。

◎大川に臨める此度の住居、涼風は壹錢を要せず、花火も面白く眺められ申すにて候へば、何時にても欄干に倚る人となり給へ。

◎半永住の目的にて香櫨園へ移轉眺望を第一の條件としての住居、北より西にかけては山、南は蒼波萬頃の大阪灣、

◎一歩下れば夙川の松原、夏の眞晝も尙涼しく、海水浴も自由にて月にも風にも宜しく候。

◎昨日某所へ宿占め候、菊は一叢

に過ぎず候へ共、酒屋は隣にて豆腐屋は筋向ひにて候。

◎田園生活を學ぶには非ず候も池田の某所へ移居、折柄の秋の末箕面の紅葉も見頃に候へば、一日電車の客となり給へ、共に瀑の下に杖立て申すべく候。

○移居を祝す

◎流石は風流の君なるよ、荒れし名園を修して御移居の由。

◎日に年に俗に化しゆく名跡、君が御所有に歸せしは何より目出度、一詩無くては叶はじ。

◎梅咲き出で、昔ながらの春とや必ず花の散らぬ内に酒樽載せて祝し申すべく候。

◎幾度か主をかへし鶴之茶屋、新に君が御住居と相成り、花の面目此上なしと賀し上げ候。

◎住居するには市外に限り候、夏は尙更の事、其内に閑を得ば御地

の凉風に膓清めんと存じ候。

◎新緑最も宜しき由、二日醉に頭重き朝、御祝ひ旁伺ふべく候

◎藏鷺庵は浪花名所の一、平楚を隔てゝ波狀なす山々、御説明を待たずして好景目に入るに候

◎幽靈屋敷と知らるゝの御轉宅、國音相通はせ有禮と改めば宜しかるべく、禮に厚き君が御住居には、最も適當と存じ候。

◎藤の花盛りとや、新緑の眺めも亦佳なるべく、近々必ず御訪問する筈に候。

◎御舊宅に比すれば餘程隔たり候も、電車の便を借らば却つて近きわけ、時々御邪魔致し候て、天王寺の塔に夕月の懸るまで、詩談に時を移し申すべく候。

◎川添へ御轉居羨ましく、凉しき風に夏忘れたく候へば、成るべく暑き夜撰び御訪問致す筈。

◎山上に一市街をなすは香櫨園今

○雜之卷

日の實況、御宅は別に靜境を選び給ひしなるべく、何れ近日に參上、白帆の影を手に取りたく候。

◎今年の夏は海水浴に通ひたく候時々の休息許し給ふや、如何に。

◎松に起る風、波に碎くる月、御住居の景色目に歷々、御祝物持參、一夕相伺ふべく覺悟。

◎酒家と豆腐屋に接しての御轉宅、隱士には付物の菊も有る由、訪はでやは。

◎學ぶには非ず候もとは、確かに眞似し給ふ所以、兎も角も田園主義貴く候。

◎箕面の秋の御案内願ふべく、御祝ひは公園内の旗亭にて、君が爲め一獻まゐらす筈に候。

○開業を祝す

◎年來の御計畫熟し、貿易商御開業の由、經驗に富ませ給ふ君の事に候へば。

○學術經驗共に抜群の君、名聲を轟かせ給ふは、今より火を見るよりも明かに候。

○南洋を目的地となされしは、天晴遠大なる御志

○日に月に隆盛に赴くは疑ふ迄もなく、御腕の技倆は是より世に顯れ申すべく候。

○奮進は君が御得意に候へ共大事に構へ給へとは、老父よりの傳言にて候ぞ。

◎出版業御開始の趣、本日の新聞紙上にての御披露、幾年來の御素志はじめて事實に現れし。

◎學生には最も密接なる關係を有し居り、同じく看板掛け候ても大に趣を異にする商業。

◎永年御著作の經驗を積ませられ居り候事とて、所謂鬼に鐵棒。

○御目的通りに着々相運び候上は忽ち書生社會に好評を得べく、前途ます〳〵多望と賀し上

げ候。

◎月日を重ぬるまゝに、世に公益を與へ申すべく、今度の御開業學界のため、賀する次第に候。

◎講談物も其種類により立志の一助と相成り申すべく、御選擇の上御出版慫慂致し候。

◎君により出版界の宿弊一洗せられ申すべく、其が第一に祝さるゝに御座候。

○就職を賀す

第一　町村長

◎公衆の推す所となり、某町長へ御就職の由。

◎衆望を容れ、大和村々長の椅子占め給へる由。

◎兎角、治め難しとの評有る村の事に候へ共。

◎商業衰微、昔年の面影を留めぬ町も、君を得て漸次隆盛に赴き申すべく。

◎君には最も御適任上下の幸

福、之に過ぎずと賀し奉り候。
◎教育を首として工業に農業に、君に待つもの多く候はんも、漸次に御改善願はしく。
◎行政事務には御經驗深く、著々治績相顯れ申すべく。
◎御經歷と令名とは、闔村の夙に敬服する所に候へば。
◎顯位を擲ちて御就職、先づ一統をして感喜せしめ、君が德を稱へぬものも無かるべく。

◎自治體の面目、追々に發揮致すべくと、遙か此方より期待致し居るにて候。
◎君は遠來の客、土地の人情を斟酌し、長を取り短を捨て、萬事御實行こそ願はしく候。
◎元來複雜なる町村の事務、一時は完全は望み難く、漸を追ひての御處置然るべく。
◎宿弊一朝に洗ひ去るべくも候はず、此處が緩急の御手心

を待つ所以。

○良村長を得たりとは一統の評判、何分にも拮据御經營、世に模範を示され度。

○町とは申せど尚發展の餘地之れ有り、將來は市とも相成り申すべく、地方のため御盡力希望。

○御就職と聞き欣喜の餘、希望のかず〳〵筆に任せて述べ、御祝詞に代へ申し候。

第二　小學敎員

○功名の熱度高き都の巷より一筆奉呈致して候。

○算盤の響き小休みなき銀行の晝食堂の片偶にて此書認め申して候。

○君には神秘の鞭取り給ふ身と成られし由、いと羨ましく候。

○小學敎員と申せば、世人に度外視され居り候へども、神聖は其處に宿るにて候よ。

○名に驅られ慾に迷ふ此世の人多きに、實に敬服の至りに候。

◎而も肩書の法學士、一層光彩を放ち申すべく候。

◎物質主義の當世、見上げたる今度の御決心、村の人々は神と崇め申すべく、聞くからに感服の外あらず候。

◎口にこそ教育事業を說け、其身を此に致す偉人ならずば叶はぬ事。

◎教鞭手にしながら、其職責を重はゞ、一身を犧牲に供する人は、果して幾人にて候べき乎。

◎大臣も大將も會社の重役も、一度は鼻垂れて小學校の門、日に二度潛りし人。

◎一言に申しもせば小學校は、有らゆる人物の苗床、教員其人の任重くして貴きは、今日に始まりし事にも非ず候。

◎今度の御決心も、定めて是等の點に存するなるべく。

◎今後二十年も立たば、俊才

○雜之卷

一校の下に出づべく、今より御得意の程推量致され申し候。

○君が一生を百戸に滿たぬ村に老いしむるも、人才薰陶の功は長く千載に殘り申すべく。

○將官佐官の町村長は、隨分世に少なからず候も、若手の文學士や法學士の小學教員は、鐘太鼓打ち鳴し搜しても、君の外に又と一人有るまじく候ぞ。

○君が御奉職は固より、斯かる現象を見るに到りしは、眞の開化とも申すべく、慶賀至極。

○君が今日を惜む人もあれど、僕は舊家の嫡長として、今度の御就職を喜ぶものにて候。

○俗務に從ふ筆清め、誠心誠意、祝賀の詞を奉呈致し候。

○他年歸省もせば、一村の風俗昔年の比にあるまじくと、其が待たるゝにて候。

第三　會社員

◎御宿志相叶ひ、而も樞要の椅子占め給ひしとや。

◎御入社は御客員の由に候も、後日は却て好地位を得給ふべく、固より優待に出でし事に候はん

◎從來の御境遇には御同情に堪へず候處、今度の御就職誠に喜ばしく、呈する祝辭を知らず候。

◎愈御運開けしと申すべく、御敏腕是より實地に相顯れ、御名聲世に馳すべく候。

◎今日の事、全く御才學の然らしむる所に候はんも、先君の御蔭に因る事も忘れ給ふまじく候。

◎御地位こそ卑くけれ、負ふ所の責任は上下甲乙なく、善惡共に會社の體面に關し申すべく候。

◎何處にも心狹き小才子は多く候へば、極めて愼重の態度を願はしく、忠實と勉強とには敵はなきものにて候。

◎現社長は御亡父樣の配下の人

に候ひしも、今は實業界朝日の紳士、君を遇する固より厚く候はんも、夢にも昔の事想ひ候はで敬意を拂はるべく候。

◎萬事が華侈に流るゝが若手達の風俗、十分に御注意なさらいでは、取返しの出來ぬ事に陷り申すべく候。

◎才子は古來吾が才に身を誤り易く、成功と失敗の決する所は、只間一髮ぞと御心得なさるべく、最後に憎まれ口たゝき斯の如くに候。

◎自身の事は吾が目に見えず候も人には缺點よく見ゆるもの、只御精勵にこそ。

◎名に驕らるゝは誰しも一度は有る事に候も、秩序的こそ望ましく、一足跳を念懸けし人に、轉け落ちは稀にて候ぞ。

◎御祝ひに代へて苦言呈するも君が行末思へばにて、強ち釋迦

に說法とやらにも陷り申すまじく願ふは失禮御容赦にこそ。

○病氣全快を賀す

◎舊臘よりの御病氣、春風に洗ひ去られし由、世は今し花の咲き盛り、詩情も以前に戻り候や。

◎花に憧れてには非ず候も、久しき間の御疎遠、御全快との郵箋に接し、一同喜び申して候。

◎花に御伴の出來ざりしは遺憾に存じ候も、見るからに淸しき新綠の此頃。

◎御散步には花時に比して御身に敵し申すべく、散り殘りの牡丹に候へども、愛づるに足る色香は君を待ち居るにて候ぞ。

◎遠路は如何しけれど、近郊への御遊步は惡しかるまじく候。

◎市中とは事違ひ、初夏の眺め淸けき此處海村、御病後の君には適し申すべければ。

○御病後は氣を養ひ給ふが第一にて候はん。

○御逗留としての海水浴は如何、自慢の樣に候も、夏は知らぬ位の涼しさ、狹しと申さばとて御起臥には御不自由なき吾家。

○今にも御服藥中とならゝ、中學へ通ふ弟へ取り寄せさせ申すべく、吾家へ御病後の身を養ひ給うては如何。

○所變れば心も自然に冴え申すべく、何れも御越し待つにて候。

○急に冷え〲しき初秋、此上の御保養が專一。

○最早菊見の酒酌み給うとも御身に害ある間敷、其内參上百花園へ御伴致すべく候。

○一時は眉打ち顰め候に、命取り留めしとの御書、喜び之に增すも非ず候。

○前途多望の御身、例の御氣性よりしての御無理は禁物、尚

も緩々御養生願はしく、社の事務は此頃閑散にて候。

○全快披露

◎日毎の樣なる御見舞の文、藥の香高き窓に讀みしは夢、花の噂とりぐ〜なる昨日今日、病院よりは漸う退き申し候。

◎命は無きものよと覺悟の僕、運はまだ盡きぬと見えて漸次に快方に赴き、花笑ひ鳥歌ふ野邊の人と

相成り候とも、不足なき身になりし嬉しさ。

◎厚き御惠みの數々に冥路より引返し、又もや娑婆の人と相成り申して候。

◎梅の頃と思ひしは徒に相成り候ひしも、人並の花見には差支なく、以前の健康體に復し申し候。

◎庭の櫻は雪と亂れ咲き候へば、式ばかりの床上げ祝ひ致し度、久

々にて一獻まゐらせ申さん、明日十時頃より御越しをこふ。

○盛り過ぎ候も殘花の下にて、君邀へて粗酒酌みたく、招けるは吟社の諸賢のみに御座候。

○借家なれども吾が爲には命拾ひ候磯館、此處にて快氣祝ひするも宜しかるべく、障子おし開けば、白帆の影に坐せらるゝ處に候

○服藥は既に止め、酒も少々はと條件付の禁解け、今迄憎くかりし醫師も今は佛の思ひ、御相手せんとの小宴。

○吾れ自身が遠慮がちに酌めばとて、客に侑むる事には怠るまじく心ずみ車枉げさせ給へ。

○運動仕事に作れる菊、冥途の土産にもならずして、東籬に黄金を綴り出で、取敢ずの談の種。

○祝ひとは名のみて候へども、久々の獻酬に、舊交温め度候

○御禮かた〲參上して、是非に

御越し願ふ筈なれども、筆に代理勤めさせ申し候。

○人を悼む……總語

◎僅か十八を一期として、歸らぬ水の流れとなりましぬと思へば、悲しさ限りなく候。

◎吾はいと數多き友をもてり、そが中にも最も堅く契りしは、詩文に深き太郎君。

◎月は曇るとも又下界を照し、花は散るとも再び咲き匂ふ時あるを、君は一たび逝いて歸らず。

◎君が形見の寫眞は日々に薄らぎゆくも、吾が心に印せる君が面影は長へに消ゆる能はず候。

◎何れ終りは有るべけれど、世に譽の花咲かせで逝きし君、地下に遺憾の淚呑み給ふべく。

◎そゝろに過ぎ來し方を偲びて、落花の窓に懷舊の情を繰返すも切なく候ぞ。

◎そもや君と吾とは、花の朝や月の夕、四つの袖を聯ねし仲。

◎うき世はあすか川と言ひそめしも、實に道理ある事。

◎人の生命は、日影待つ間の朝顔にも比すべく、げに朝露の如くにて候。

◎花は去歳の木に咲けど、逝きし君は遂に見えぬ悲しさ。

◎吾が心に深く刻みし君がみ姿は永久に失せ候はねど、再び優しき君は來まさず。

◎悲觀を共にする茲に五年、今や君逝いてあらず。

◎共に愛でにし白菊の、今はなき亡君の手向となるぞ口惜しく候。

◎幾度かみ墓をなづれど、冷たうして石語らず。

◎香烟淋しく墓門にたなびき、夕日の影冷かに候。

◎野花の開くも哀れいや増し、追懐の涙はら〳〵と。

○涙にくれゆく日さへ、いとゞ名殘の惜まれて候。

○秋風に立つみ墓の影あはれに、人の弔ひ來るも稀にて候。

第一　父母を喪ひしを

○御凶報戰く手に封切れば、御親父樣には御他界とや、夢か幻か、夢ならば早く覺めよと打ち驚かれ申し候。

○御母上樣、御逝去の御訃音御悲歎如何ばかりかと、去歲の吾身に絆されて候。

○御歸省後折々の御書に、次第に御快方と承るものから、今日の御凶信に接せんとは思ひ設けぬ事にて、急に御容體革まりしか。

○日頃の御孝養、御心殘りは在らせられ間敷も、御年頃と申し御地位と申し、眞に惜みても尚餘りある御事に候ぞ。

○兼ね〴〵、御孝心深く渡らせられ候御事とて御衷情如何ば

○雜之卷

かりかと、慰むるに辭を知らず候

◎せめて御成業の後ならばとは、御同情に堪へぬ僕が推量。

◎今は返らぬ事に在しまし候へば御心を勵まし給ひて。

第二　兄弟を喪ひしを

◎御兄上樣には、あはれ御藥餌のしるしもなく、逝く春の花と共に此世を辭し給ひし由、

◎悲しき秋を次郎樣には、返らぬ永の御旅路に就かせ給ひしや。

◎一校の俊才と稱へられ給ひしも夢なれや、餘すは只青山三尺の碑石、机並べし吾々には、殊更斷腸の思ひ致すに候。

◎花洸ふ雨の窓、香の烟も御淚に濕ひがちなるべく、此方にても御噂のみに袖濡し居るにて候。

◎分けて御骨肉の情、御悲しみ比するに物もあらばこそ、鶺鴒原上秋寒く、御傷はしき極みに候。

○前途御有爲の英才哀れ白玉樓中の客、天の命を假さざりしが殘念に存じ候。

○常に樂しく聽く鳥の聲も、今日は悲しく、鳴かずも哉と存じ候て熱き雫のみ膝に零れ申すに候。

○逝く秋は逐ふまじと思ひ切り候ても、歎き繰返すは次郞樣の御身の上にて候。

○御父上樣と同樣に事へ給ひし御兄君樣の事に候へば、一しほの御愁傷。

○悲歡共に笑ひつ泣きつ、起臥を同じくしたる都の學舍、昔の夢辿れば淚に哭るゝにて候。

○兄上樣の御遺業御繼續、他日御成功の曉は、地下より御喜びなさるべく候。

第三　子を喪ひしを

○敏夫樣には、御養生叶はせられず候とや、折柄の春雨に袖絞り申し候て、御悔みの語も出でず候。

◎花子樣には、哀れ十五の蕾の春を、一夜の嵐に消え給ひし由。
◎常なきは、世のさがとは存じながら、御殘り惜しさは、山々御察し申し上げ候。
◎校友誰一人として惜まぬ者も之れ無く、よろづ衆に拔け出で給へるも、長かるまじき御世なりしかと、打ち寄りての御噂。
◎分けて同じ旅路の學舍に、机並べて螢雪の勵み、思ひ出づるも轉た悲しく候。
◎如何なる言の葉には、取り出でゝ慰め奉るべき。
◎況して、老い給へる御方の御心の中、如何ばかりぞと涙に暮れ申し候。
◎多年の御勉強其功を積ませられ來春は御錦衣を故山に飾り給ふ御身なりしを。
◎御悼しき限りに候へども、何卒強ひて御諦らめのやう。

○此上は御身大切に、逆緣の御影向。

○紀念品に添へて

○御心こめ給ひし御書、悲しき胸を慰められ、有り難く拜見致し候

○袖の乾くまなき昨日今日、眞情溢るゝ御書戴き、返らぬ事歎くは愚の至りと悟り申し候。

○歎けばとて返らぬ事に候も、山嶽の恩萬分の一だに報いず、不孝此上もなく候ぞ。

○せめて、父の遺業を紹ぎ孝養に代へん覺悟に御座候。

○再び學校の窓に、君と燈分つ事叶はずとも、兄に代りて老親に孝養怠り申すまじく。

○抱負を地下に齎せし弟、遺憾の事ども察するに餘り有り候も君には御身大切に、他日の御成功祈り上げ候。

○生前の御交情は、折々の御手紙

にも知られ、よき友得しを自慢致し居り候に、太郎には返らぬ旅し

○此硯一面、君に差し上げ呉れよとの遺言、裏なる銘は御存じの如く、自身が撰びて自身に刻せるもの、意味は既に御承知の事にて候はん。

○手垢に汚れし古書には候へども十年以來、心血を灑ぎて書き入れ精しきもの、よき物よと君が言ひ給ひしとは、臨終に申し遺せる父が一言、御用にも立たば地下にての喜び如何ばかりに候べき。

○兄が形見として呈せる此時計、申すも恐れ多き事ながら、學校卒業の折、賢きあたりより恩賜の物、今更申す迄もなく、君が御前途を祝する寸志にて候ぞ。

○生前の御交誼を忘れぬしるし、何卒御受納下され度、此品は君にと臨終の遺言にて候ひき。

○君によりて世に傳ふるを得ば、

亡兄は死せぬも同様にて、御交誼をも全うする所以に候はずや。

○落第の友人を慰む

○男兒には、悲觀と涙との二つは大禁物、君に先づ此語を呈し候。

○落第も時と塲合によりては目出度もの、君程の才子にして此に心づき給はざるか。

○試驗は全く運不運によりて及落の分るゝ事も御座候へば、強ち其人の學力の深淺にも因らざる道理とも相成る次第に候。

○山を相して狩せよとやらの俗諺、君が蒲柳の質を以て、海軍に志願せらるゝは、直言もせば全く御門違ひ、少し氣を靜の心に手をおき御思案願はしく候。

○好きこそ物の上手なれとかの語も善く聞く事に候へども、希望は遠大にすればとて、結局は其人相當以外に得らるべきものに非ず候

○希望を小さくし給へと申すには非ず、漁父にして山に求め、樵者にして海に行く如き、天性に逆ひし方針取り給ふなとの意にて候。

○今更取返す事の出來ぬ落第、御身の急務は一たび汚れし面目をば雪ぐ事にて候。

◎よし一年後れ候とも、其頃合は直に出來申すべく、勉めて倦み給はずば、其容易なる事お茶漬にて候はん。

○面目なしとは婦女子の言、其裏面に大名譽は潜み居り候へば、こは君が取り次第、護符もして呈したきは落第との二字にて候。

○妙な事を聞けり、君は陸海軍々人ならずば、君國に忠たり義たるを盡し得ずと。

◎土百姓に忠義者なき乎、素町人に愛國者なき乎、何れも大有りにて、君が軍人を希望せられれば、

名譽心に驅られしには非ざる乎。

◎理窟責めにする樣に候へども、斯樣な筆執りしも皆君が行末を想うての老婆心、

◎今の落第は後の名譽と、み心をとり直し給ひ、手に唾して力足、學校の門前に地の凹む程に踏み給へ、泣事は無用に候ぞ。

○失敗の友人を慰む

◎僕に、戀に敗れし人慰むる筆は之れ無く候も、國家的事業に脆くも敗北せし人に對しては、血潮を絞りての言呈すべく候。

◎成功と失敗とが相伴ふは、古今殆ど揆一、敗れたりとて歎く可らず、捲土重來の意氣欲しく候。

◎運とは薄志弱行の徒が申す言葉、苟も事業を成さんとする者は運を作り、且つ適當の乘すべき運を見出すが肝要に候。

◎失敗は成功の母、たしかに一階段を進めたりと申すべく、而も研究の不足を證據だてたるに候ぞ。

◎商業上の失敗は恥づべき事にあらず候、只事の此に到れる原因こそ、調査の必要を感じ候はん。

◎七轉八起は人生の常、一度の挫折に屈する如きは、到底事業界の人となられ間敷候。

◎君が爲には失敗好ましからず候へども、事業上には百度もの失敗相願ひ、完全なる結果を得たきものと存ずるにて候。

◎利に趨る當世の人情、君驚き給ふべからず、事業の背後には助勢者控へ居り候ぞ。

◎再度の旗擧げ然るべく、差當りての兵粮は小生にて相辨じ申すべく、一番の勇氣奮ひ給へや

◎君や年尙壯、是しきの失敗に志氣の撓まぬは、吾々の信ずる所に候へ共、鋭意他日の

御計畫・刮目して待つにて候。
◎敗將は再び兵を語らずとは、ずつと昔の事共、商業上の敗將は他日の名將とも見得べく候ぞ。

○遊學する友に

◎東の方遠く京に遊び給ふ由、御得意の樣目に見る如く、他日の錦衣期して待つべく候。
◎東都は文物の淵叢、身を立つる學科は選びがまゝにて候はん

◎大阪は日本一の商業地、御腕をば磨くには不足有るまじく候。
◎明日の御出立・實に一歩を商界に踏み入れ給ひしとも申すべく、最も愼重の態度望ましく候。
◎都には秀才雲の如くに候はん、願くば田舍に於けると同樣に、自身を待ち給ふべからず。
◎志を立てゝ故郷を出でし人は實多く、學就りて名を揚げし人はに曉星も啻ならず候ぞ。

○雜之卷

◎螢雪の御苦學、固より期し給ふ事ならんも、人は情に脆きが常、他に誘はれ易く候

◎花に思を傷め、月に情を惱ますは、今より幾歳かを重ね申すべけれど、嬉しく待たるゝは錦衣御歸國の一事にて候。

◎信を托するに雁魚あり、情を寄するに詩歌あるにて候。

◎數聲の風笛に君を送り一曲の離歌に手を分つは、早く明日と迫り申し候

◎身は山川萬里を隔てんと致し候も、夢には容易く相逢ふ樂しさ思ひ出でられて候

◎御勉強も然る事ながら、折々の御運動怠らせまじく候。

◎花も月も宜しかるべく候へども只場所を御撰びなさるべく候。

◎御成功を待つは吾輩同窓のみに止まらず、朝夕の勞を學資に送り給ふ、御兩親の在す事をば忘れ給

はぬ樣にと。

◎君、錦衣して再び土橋を過ぎ給はん其日は、僕は鍬肩にして相迎ふべく候。

◎すべて人生の物事は、思ふ樣に成らぬものと御覺悟然るべく、又それと同時に、覺悟の如何によりては、何事も成らぬ筈なしとの御決心をも望ましく候。

◎兎も角、賀すべきは明日の御出立、別後に待つは無事との御便、時々の鴻鯉に托してよ。

○不勉強を戒しむ

◎竹馬の友誼默し難くて、聊か苦言を呈し申し候。

◎此頃は御身上に就き、兎や角の噂耳に致し候。

◎人の噂は固より信ずるに足らず候へども、火のなき處には煙の騰らぬ道理にて候ぞ。

◎君が才能を妬む俗輩の言と

は思ひながら、萬一にも事實とせば打ち棄て難き御擧動。

○噂をして烟の樣に消し度は、誰も望む所に候へども。

○世の人の口には戶は立たられ申さず、十二分の御反省こそ願ひたく候ぞ。

○醜聞をして打ち消したく候も、日每の樣なる御缺席、證據だつるを如何にすべき。

○酒と色とは古來の聖賢、口を酸くして戒しむる所に候はずや。

○まだ乳の香失せぬ御年、交際の爲とは萬人が萬人、決して許さぬ御口實にて候ぞ。

○よし幾百萬圓の御財産にも致せ愛嬌溢るゝ笑靨をば塡め難く、而も幾代重ねて得給ひし血の汗、御先祖のみ靈にも義理立つまじく候

○御國許には、年老い給ひし御双親、夏の炎天に汗水流し、君が學資を作り給ふにて候。

◯既往は誰も咎め申すまじく望むは飜然としての御改心。

◯英雄を氣取り給ひ、わざとの御行爲かは知らず候も、方今は秩序的ならでは身を立て難く候。

◯惡魔は此世に絶えず候も、此方に弱點あればこそ犯すにて、人に確乎たる志操を要するも畢竟、是等に誘致されぬが爲にて候。

◯言ふ所、何れも君がみ心に逆ふべけれど、能く玩味もし給はゞ、はッたと膝打ち成程と迷の夢醒め給ふ節もあるべく候

◯才能人に秀でし君、今日の御樣子不思議に思はぬ者はなく、後日の御悔悟が案じられ申すにて候

◯御取捨は固より君が御自由、如何に心眩み給へばとて、是非の御分別力は尙存すべく、深くは申すまじく候。

◯先哲曰く、過を改むるに憚るこ

言を呈するにて候。と勿れ、とかや、僕は最後に此一

○不心得を戒しむ

○打ちすて難き事耳に致せるまゝ細々の書奉呈致し候。

○御覧を願ふ此書、何事かは先以て御心に響き申すべく候。

○都への御遊學叶はずとて、御不滿への結果は、御兄弟御不和とやら、聞くも苦々しき事に候ぞ。

○理非御辨別の力なき君に非ず、今度の御所爲腑に落ち申さず、惡友に誘はれ給ひしか。

○他の專門學は知らぬ事、中學の科程は東京に限り申さず、城下にて不足なく、何れの方面より論じ候ても、君に一點の正理を認め難く候ぞ。

○君が御說に道理あり、兄君のに無理あらば、此書は却つて太郎樣に呈し、次郎の君には力を添ふる

僕に候へども。

◎よしや一歩を君に讓り候とも、御學資の出處、何れよりぞと御胸算も肝要に候はずや。

◎兄として弟の出世望まぬ人のあるべき、殊に義理ある御仲言語にし難き事情あるは、君の才にして酌み分け給はざる乎。

◎苦學せんとの御趣意も能く分り候へども、言ふべくして成功は覺束なく、千人中の一人となり給ふは、到底君に望まれまじく事。

◎成功雜誌に見ゆる記事は、第一に君をして蘇したらんも、僕は取らず候。

◎果して御志操堅固ならば、山間にても海邊にても、今の御身を處するには難かるまじく。

◎御立志の點は、固より勇ましく存じ候も、待てば海路の日和とやら、人は時機に乘ずるが肝要。

◎此頃は御缺勤がちの由、御病氣

〇雜之卷

に乎、先づ伺ひ上げ候。

〇豫て申し上げ候如く、實業界は信用が第一に之れ有り、後日の事業の一切は、此信用が生み出し申すにて候。

〇御才學に比しては、聊か不足の現地位に候はんも、經驗は時日を要するにて、天下一の才子も一朝一夕には穫取されぬに候。

〇御不足たら〳〵にての御不勤とは、君を猜む人々の口なるべく、少々御交際上手に過ぎ、よからぬ巷に春買ひ給ふには非ざる乎

〇此頃の御擧動昨日の君に候はざるぞ、御出勤先の門、定めて御取違への事と推し候。

〇社に對しての御責任は申す迄もなく、生前に盡さざりし孝養は、亡父君のみ墓にとて、御就職當時の御誓約。

〇御尊父樣には事業に敗れ給ひ、而も利慾深き人々の犧牲に供せら

れ、未だ恢復の春に遇ひ給はずして、此世を逝きし御不幸。
◎君が今日の御地位も、御亡父の御徳によると知り給はざる乎。
◎斯く申す自分も失敗のなれのはて、田舍に土堀る身を甘んずるも祖先を尙ぶ所以に外ならず候。
◎迷ひの夢覺すには、舊友の言に勝るものなかるべく、御一讀を得ば滿足に存じ候。
◎心得違も經驗の一、玉の樣なる良心は、君が方針を示すべく候。
◎いつも不風流の言に候も、苦き中にも甘み存し申すべく、酒にて喉通し給うとも咎め申す間敷候。

○奉公せる弟に

◎花にも月にも雨にも、片時も故鄕忘れし事非ず、との御手紙嬉しく讀み申し候。
◎此兄とて然り、水沸く田に草取りながらも、如何にして暮らし居

らるゝかと案じ煩ふにて候。

〇貧賤に身を起せる例は多く、富貴に身を誤りし人も亦多く候へば今の貧賤は必ずしも悲しむべき儀には非ず候。

〇希望通り、夜學校へも御通學の由、前途は遠しと云ふも進み次第に候はずや、只々、身を粉にして勵み、後日の地位を作られたく候

〇御主人を大事にし、仕事に陰陽なきは、廻り〳〵て御身に報い來る德の一端、朋輩には憎まれ給ふまじく、人に尊ぶべきは忠實と友愛の二つにて、今の御身には最も切なる此二つにて候ぞ。

〇花咲く春には、故郷も夢に入り易く、雨降る秋の夜は、しみ〴〵悲しい事も胸に迫り候はんも、こを忍ぶも勉強の一つにて候ぞ。

〇丁稚と輕しめらるればとて、決して恥づべき事に候はず、冷たき枕に後來の事業を尋ね候はゞ、愉

快なる夢見らるべく候。

◎小包郵便にて差立ておきしは、例のつるし柿、妹と二人にて製せる物、よきに見計ひて分配し、故郷の味を試みられよ。

○推薦の禮

◎今回は非常なる御盡力により、名譽の地位を得、不肖の面目之に過ぎず候。

◎身上に就ては、前後一方ならぬ御配慮。

◎積年の目的相達し候も、全く尊兄の御斡旋、

◎筆舌に陳べ難き程の御奔走、御禮の申し上げ樣も之れ無く。

◎都合よく就職相叶ひ候ひしは、全く御高配の致す處、

◎舍弟入社の儀に就ては、何かと御厄界のみ相掛け。

◎此上は申す迄もなく、誠實と勉強とを以て事に當り。

○雜之卷

◎今日の地位は、全く尊君の賜物と存じ候へば。

◎身を粉にして、御恩に酬いんとは舎弟の申し狀。

◎固より未熟の小生に候へど、熱心職に當り、御推擧の高義に背く間敷。

◎御心添の事共は、夙に銘肝致し居り候へば。

◎刻苦精勵、誓つて御推薦の勞に酬い申すべく。

◎御蔭により今日の就職、父母の喜ひも斜めならず、共々に御禮申し上げ候。

◎未經驗の事業に候も、忠實と愼密とを以てせば、追々會得致し申すべく候へば。

◎此上ながら、御遠慮なく御忠告願はしく。

◎僕に似て愚鈍なる弟、時々相伺ひ候節は、何かと御敎訓下され度

今度御社に入り候も、偏に君が御

厚意に出で。
◎父母在世中、今回の事あらましかば、如何に喜ぶべきかと。
◎不取敢御禮のみ、委曲は拜芝萬縷披陳仕るべく候。

○忠告に謝す

◎熱き〳〵御心こめさせ給ひし御書、今朝學舍の窓に封切り、押し戴き拜見仕り候。
◎一字〳〵に御厚情の程あふれ、讀み行く儘に懺悔の涙に呉れ申し候て、酬いまゐらす筆ぞなき。
◎友誼上默し難ければ、重ねて筆執り給ひしとや、今更の樣に身の不心得を悟り申し候。
◎善き友はもつべきものぞとは、豫て父母よりの訓誡、君が御書戴きては今更の如くに覺えられ。
◎熱誠こめて是非の御諭し、讀み行く儘に迷夢頓に覺め、前日來の不行跡目に見えて恥かし

く候。

○顧みる友もなき今日、君は尚も僕を捨てずしての御書、

○數度の御忠告に背き、今日に至り候ひし罪、決して淺からず。

○今更、貴兄に謝するに言辭を知らず候も、飜然として志を改め申すべく。

○後れながら事に勉め身を愼しみ地に墮ちし信用を恢復致し、必ず御厚意に酬い申すべく候。

○今に於て悔いても甲斐なし、唯前過を償ふ事に勉め申すべく候。

○昨非を悟りし吾身、度々の御書繰返し候に付けても、御情の深きに恥ぢ入る外これなく候。

◎墮落の底より救ひ出されし吾身全く友情に厚き君が御力。

○君あらざらましかば、身は迷夢醒めずして、死に至るべく。

○今後の吾身は尊兄の賜物、萬一又しても心得違等あらば、君を辱

しむるの道理と夙に改悛、
◎今は謝するも甲斐なし、行爲の
上に現はし申すべく。
◎茲に誠意誠心改悛を表し
申し候、謹言。

○添削の文稿に添へて

◎今度の御作、何れも面白く拜見
致し候、中にも日記は、簡にして
要を得、感服〳〵。
◎御示しの作、追々に御上達の跡
見え、御推敲の程あり〳〵字句
間に溢れ居り候ぞ。
◎記事文より、手紙文の方御得意
と見え、文題に應じて意到り筆隨
ひ、詩趣に尙ぶものと、事實の
明白を重んずるものとの區別も申
し分なく發揮され居り候。
◎何事に限らず、進めば進む程上
もあり、究むれば究むる程底なき
者に候へば、此上の御勉強こそ第
一と存じ候。

○雜之卷

◎文字は意思を表はすものに候へば、善き工夫も文字を使ふ巧拙によりて、活き死にの別生ずるもの、初學の人は兎角、文字に付て工夫をつけ、工夫に基きて文字を自由に使ふ者は稀にて候。

◎韓文公が使ひし文字も、蘇東坡が使ひし文字も、紫式部が用ゐし文字も、淸少納言が用ゐし文字も、吾等が用ゐる所の文字にして文に巧拙の差生ずるは、使用に巧拙の差あるが爲にて候ぞ。

◎善く出來たりと申せばとて、多少の瑕疵は免れず、其削りし處、其添へし處、能く御玩味然るべく候。

◎例により加筆相試み申し候、原作惡しと云ふには非ず候も、今一しほの文にせんとての意見、

◎凡そ文は、長きを尙ぶ譯にも之れ無く、簡潔と申し候て、短くして其意は不盡なるが上乘のも

のと申すに候。
◎美文風の書翰は、當時の流行と申し、詩趣の點と申し、奬勵すすべき長所少なからず候も、能く注意せずば、文に骨力なく、動もすれば輕薄才子の筆に似て、惡道に陷り易く候。
◎文に關して申したき事、外に數多之れ有り候も、そは御示しの文ある每に意見書き加へ申すべく以上は序に任せての一言のみ。

○饗應を受けし禮

◎昨夕は何氣なし參上致し候に、以ての外なる御饗應に陪し、十二分に頂戴致し、今朝は少し頭痛を覺え、湯豆腐欲しき位、
◎盛大なる御園遊會、とりどりの御趣向、何れも滿足の色見え、岳の上、池の邊、歡喜の聲聞かぬはなく。

○雜之卷

◎橋に倚る人、花潜りぬくる人、洋裝の人、和服の人、酒の人、團子好の人、皆一園に集會し。

◎模擬店は何れも賑ひ、御令孃樣方の御給仕とは恐れ入り候。

◎花より團子とか申し候も、酒店の繁昌筆に盡し難く、流石は君が御催しの園遊會と評判高く。

◎彼れ程に、御用意なき樣にと申し上げ置き候に、山海の珍味と酒責め（タクサンナサケ、サカナノチサウ）、

◎晝の花見は月に成り、茶のみとの御案内のが酒に變り、夜更くる迄も御邪魔致し候。

◎した地はすきなり御意はよしの諺、吾れは盛り潰されしと御禮もせば、御夫婦はまた異口同音（フタリガオナジ、コトヲイフ）に兎も角酩酊。然らずと逃げ給はんも、

◎幾度か飲むまいと誓ひても、藥と申しては、やり一杯位は毒にはなるまじと申しては、やり分けて

御侑めある儘の大醉。

◎御蔭樣にて俗腸を洗ひ淸め、山海の景色のありく、尙目前を去り申さず、此身の城中に入りしを忘れ申すに候。

○寫眞に添へて

◎御地と此處、汽車の往來は三日に出でず候も、相見るに由なき身は千里も啻ならずと存じ候。

◎約の如く御取換へ願ひ候此寫眞善く語り得べくも候はねど、逢はぬに勝り申すべく候。

◎一葉の寫眞、語らぬが却つて情深かるべく、君のも戴きたく候よ。

◎久しき間御意に背きし寫眞、此程漸う寫し取り候ゆゑ、御覽に入れ申し候。

◎御自身のを棚に上げおき、何ぞ其徵す事の急なる、此方よりせば、御返しには必ず御姿拜さるべくと思ひ、先づ一家族のを御

目に掛けたるにて候。

◎豫て戴きし御寫眞に對し、僕のみのを海山越えさせ申して候。

◎都の風は白う吹き、田舍の風は黑う吹くにや、君のと僕のとの相違に、斯樣な批評を試みたるは、今年十二の妹にて、僕が左に立てるそれが即ち妹の千代に候。

◎同じ在京の時分は、白すぎると嘲られし僕、歸鄉以來、海に山に日每の稼ぎ、鍛えし筋骨逞しく、肺病も何處へやら逃げ申して候よ能く肉のつき工合を見て吳れ給へ

◎僕が後に背低き一人が立ち、赤子抱き居るは說明すまじく、大兵の男兒なるは、吾ながら手柄と鼻高め居るにて候。

◎不作法なる蠻カラ姿を君に寄せしも、奧樣見んための計略、斯樣に白狀すれば、口八丁筆八丁の君も、新らしき御逃辭とて有るまじく候。

○入社勸誘の文

◎豫て御噂致し置き候會社、其筋より許可之れ有り、今後は開業する一點のみの仕事に御座候。

◎曾て御交渉致し候如く、私利一遍の事業に之れ無く。

◎廣義に解すれば國家的、狹義に解すれば一縣、更に下れば一郡或は一村の公益事業。

◎事業としては極めて吾村落に適切に、無盡藏の海産をして、十分に獲得し上下を利すべく。

◎規模は事業に比し、稍狹少の感致し候へ共、元來試驗時代に屬するもの、良成績を重ぬる毎に追々と擴張致す考へ。

◎貴兄も御存じの如く、吾村の二十幾年前は、漁業を以て名を得し地、其後樣々の風潮に逢ひ、亦當年の面目をば留め申さず。

◎如何に公益に基づけばとて、事

○雜　之　卷

業の上には確實なる打算が必要にて、固より殿樣風の商賈は決して取らず候。

○損ノ得とは事業の興廢に關し、公益を全うし得ると得ぬとにも亦影響を及すに候。

○吾々一同發起の某社、機漸く熟し、諸賢の御賛成を得んとするにて候。

○口に利を説くは易く、之を事實に擧ぐるは六かしく候も、關係の人々は何れも經驗に經驗重ねし老練家、殊に事業は基礎鞏固

○此點は世の知る所にて候はん。

○資本は、第一回募集のみにて、營業費は十分に之れ有り、豫期の擴張せんには、利益の一半を投じて之に充て、着々歩を進め申すべく。

○此際、令望高き貴下の御入社を得ば、世間の信用幾層の厚きを加ふべく。

◎如上の次第にて、有益なる事業と認め、小生も百株引受け申し候始末、貴君へも勸誘致し呉るゝ樣、發起者一統よりの希望、篤と御勘考願はしく候。

◎趣旨やら利益計算等は別紙の通りに御座候へ共、所謂見積りに過ぎず、小生は事業に重きを置き贊成、君に慫慂する次第。

◎尚、御疑問の點も候はゞ、御申し聞け下され度、筆の到らざりし事、且つは是までの模樣具に御耳に入れ申すべく候。

◎久しく熟しかねたる同志會、郡長や各町村長、其他名望家の贊成の下に成立致し候。

◎趣旨は、平素吾々が主張の如く、郡の秀才をして拔擢遊學せしめんとするにて、一言に申さば學資給與の團體にござ候。

◎敎育會の副事業とも申すべき本會、秀才をして草莽に老いしめ

○雜之卷

ず、十分に驥足を伸ばさしめ度が目的にて候。

◎事業が事業に候へば、何卒御賛成の上、名譽會員御承諾願ひ上け度、御賢息樣には吾々同樣、普通會員の御一人に在らせられ候。

◎御承知の如く吾村にさへ、將來有望の秀才にして、志を枉ぐるの二三あり、郡の一斑推して知られ候はん。

◎固より有らゆる青年に、貸費遊學は叶ふべからず、拔擢試驗を行ふか、便宜の町村を一區として數人を擧ぐるか、此點は會長幹事に一任する筈に御座候。

◎或る人は、保護體團かと申され候も、保護を與ふるもの、又保護を受くるもの、善き事の上に就てなれば、寧ろ名譽と申すべく、最後に附記致し置き候。

◎規則には、單に學生と之れ有り候も、女學生を含み居り申さず、

學科も文學、法律、醫學と限れるも、本人の長所と地方の狀況により、有らゆる學科を加ふる筈に御座候。

○兵營より

◎入營後、日を經るまゝに其生活の愉快を感じ申し候。

◎營所は固より別世界、數ふれば興味多き事のみにて、一々筆に盡し難く候。

◎上下の區別正しく、同士の仲睦じく、朝夕の營所の事共は、他に喩ふるものを知らず候。

◎雪より白き霜踏み碎きての練兵而も市街の民家に未だ炊烟起たぬ曉、殘月はきら〳〵と鎌を西山に懸け、騎兵の馳せ交ふ、步兵のかけ聲も亦勇ましく候。

◎盡忠報國の四字、入營の際御餞別として戴き、無論銘肝致し居り候へ共、兵營內は大將を第一に、

一兵卒に至るまで、彼の四字に五體を固め居る人のみに御座候。

○最も人情の厚きを知らるゝは、軍隊以外に又と有るまじく、いざと銃執る場合の親しみ、平生に之を見るにて候。

○千人中に一人位は、不心得にも兵營生活を厭ふものなきに非ざれど、其は眞に當座限りにて、訓練の如何に、家族的たる事を知られ申すべく候。

○兵營の第一新年迎へ、屠蘇も雜煮も思ひの儘に詰めこみ、雪の元日殊に目出度、銃槍の技試みなどして運動したるに候。

○日曜の市内散歩も亦愉快なるものにて、見世物など覗くは、其無邪氣なのは小供に同じく候。

○營所の櫻も花盛り、劍と銃とには殺風景の樣に候も、對照奇ならざるに非ず、強ち昔の甲冑武士に限りての風流にも候まじ。

◎射的も追々上達致し、吾事ながら名手との評判取り申候、隣村の辻本君も、これは又騎馬にて名を取り居るにて候。

◎夏は暑さに閉口致し候へ共、國家の爲め今日の境遇、流石の黄金にても買ひ難き事を思へば、珠散る汗も仲々に貴く候。

◎此秋は演習に參る筈、如何に雄壯なる乎を、夢にまで見る位に候ぞ。

◎豫て御約束の營中日記は、精しく認め候て、其折の感想をも書き加へおき候、村の子弟への御教訓願はしく候。

○書籍を送る

◎作文書は、相變らず評判宜しく候處、愚兄の手に成れる三體書翰文聊か心血を灑ぎしもの

◎當節は書翰文が大流行、文學の流行は嘉すべき事に候へども、其

○雜之卷

文體の輕薄に流るゝは歎くべき事此書は其弊を救はんとて出でし新版の書。

◎獨學者の爲にと物されし日本外史、數多ある書と異なる點は、原漢文と邦文譯とを對照せると、注解の精しきに存じ候。

◎此度、校友申し合はせ、稚兒櫻と題する雜誌發行致し候まゝ、其一號御覽に供し候。

◎著者なる某先生は、文名天下に馳すのみに候はで、其筆には血あり涙あり、常に青年の慕ふ所此書とても固より徒作ならず御文才を進むるに十分に候はん。

◎雜誌の記者は、ドングリの背競べの吾々のみにて、投書するは自由の制に候。

◎內容は百科を收め居り候へども文章は最も力味居り、中にも美文風の書翰には期せずして一同骨折るものに候。

◎書物はすへて、見るよりも讀むよりも、奥齒にて嚙みしむるが第一にて、嚙まずば腹に入り申す間敷と、兄の受賣致し候。

◎御覧願ふは新版のお伽噺、從來の比し頗る好尚に、假名遣と文章の稽古に資するとは、著者其人の序言にて候。

◎文學の盛んに行はるゝは、最も喜ぶべき現象に之れ有り、是はと思ふ書毎に贈り參らするも、嬉しさの餘りに候ぞ。

○身元問合

◎突然なる御尋ね、甚だ恐縮の至りに候處、

◎拜啓、此度召抱へ候何某、永らく御店へ御奉公致し居りし由。

◎不圖した縁故により、當商店へ見習として雇ひ入れし赤松三郎事御店の何某と同鄕の趣。

◎年端ゆかぬ割合に、至極まめや

○雜之卷

かに立ち働き、店の者共との折合も宜しく、如才なき樣に見受けられ候が。
○まだ日淺く、本人の意思たしかめ難く候も、國元より一回の音信もなく、此方よりも郵書出せし樣見えず。
○本人の身元等相分り居り候はゞ事情の許す限り、御示し願はしく候。
○不品行と申す點見出さず候も、折々夜深く歸宅する事も之れ有り他の監督上にも困難を來し候。
○本人の素性、何かゞ判然致し候はゞ、希望との商業夜學校へも通はせ、一人前の男に仕立てやり度候間。
○御手數ながら御返書に預りたく郵劵封入御尋ね致し候。

○同返辭

○德藏事、貴店へ御奉公致せる由

御書の如く弊店へ居りしは事實にて、實父の乞ふまゝに暇取らせし者にて。

◎何某、當店へ奉公中は不都合之れ無く、本人の希望に任せ解雇致せし次第、只若き者に有りがちの夜遊び、月に兩三度は店の規律破れる由に聞き及び申し候。

◎御掛合の三郎の身上、同郷のよしみある松藏に相質し候に、高等小學卒業後、商家へ奉公目的に上阪したるものゝ由、故郷の家は農業にて、衣食には不自由なき旨にて候。

◎當方奉公中は申分なき丁稚にて候ひしに、只譯もなく強ひて暇取りしもの、國元も相當に暮し居り御懸念に及ぶまじくと存じ候。

◎御書により本人の行衛初めて相判り、一同安心致し候、此上は唯々御目かけ願はしく、萬一の事あらば、斯く申す親が引受け、必ず

御迷惑かけ申すまじく候。

◎申分なき男に候も、折々酒に飮まれて取返しのつかぬ事多く候も御敎訓により善に移るかとも存じ候、右は有體の御返事斯く。

◎御尋ねの仁、怜悧とは申し難きも正直一途の若者、御店勤務の餘暇に、夜學へ通ふ事にも成らば本人の喜び思ひやられ申し候。

◎尙々、斯樣な事共は商家の常、御封入の切手は改めて御返し致候

○酬金の學資に添へて

◎相變らせられず御苦學の由、一村の有志等深く御同情を寄せるものにて候ぞ。

◎御學資の出途なき爲め、御修學との噂これ有り。

◎御尊父世にましまさば、とは一統の口にする所に候て。

◎今更申す迄もなく尊大人は、前後三十余年村長の職に在らせら

れ、殊に御治績少なからず。
◎御在世の頃、公は校長として私には名家として、御尊父の恩義を受けしもの鮮少ならず。
◎中にも某々氏等主唱者となり、御學資として醵し得しは五百金。
◎有志者相圖り候上、三百圓の無盡講盛り立て、御卒業の資に供したく候。
◎斯く申せばとて、平生の御氣性よりして、御謝絶あるやも測り難く候へ共。
◎此度の擧は、尊兄の御境遇に同情を寄するのみに候はず、公共事業の爲に、私財を蕩盡し給ひし、尊大人生前の御徳に酬いるの微志。
◎受け給へばとて、御恥辱には相成り申さず、有志者に對しては御辭退却つて失禮かと、日頃の友誼に顧み、遠慮なく小生が愚見

まで附記せる次第。

◎事實は有志等の厚意に候も、もと是れ御尊父の德に酬いるもの、要するに御自身の學資と其性質を異にせぬ事にもなるにて候。

◎呉々も御受納なされ、目出度も御卒業、錦衣しての御歸國待ち上げ候。

○同返辭

◎途方に暮れし今日此頃、御厚情

溢るゝ御手書涙に咽びて拜見仕りて候。

◎噛んで含める樣なる御書に添への學資。

◎甘んじて受け難く候も、御高義に背くも如何はしく、當分拜借の事に決心。

◎現狀御憐察の御醵金、有り難く拜受、誓つて優等の卒業御目にかけ申すべく。

◎一時に多額の金員は不用に候へ

ば、御保管願ひおき、少々宛毎月頂戴致し度。

◎御一統へは、憚りながら貴兄より宜しく御傳言。

○未見の兄へ

◎遙けき都に在すと聞くも、未だ御寫眞にさへ逢はざる兄上、いとく懐かしく、一筆呈し奉り候。

◎戀ひし懐かしと申すは普通の事よ、未だ御顔拜しまゐらせぬ吾、切なき思ひは筆にも詞にも陳べつくし難く候。

◎在すと聞くのみの兄上、御住所さへ定かならず候も、曾て〳〵御宿り有りしと申す麹町、御縁淺からずば相逢すべしとての此一封。

◎頃は早くも彌生の花盛り、人は鳥よ蝶よと浮かるればとて、傷めがちなるは吾が小さき胸。

◎老いませる父の、雨の窓に繰返し給ふ過去の夢。

◎兄上には、母君の此世去り給ひしを、よも知り給ふまじ、指折れば、流るゝ月日は早くも片手の上を二本過ぎ、御七回忌は此秋に當るにて候。

◎御家出後は、如何にして荒き風波の此世を渡り居給ふぞ、二十五年餘の長き月日を……

◎無事なればこそ、通信なきものとは父君の御覺悟。

◎世の變遷と人の浮沈は、今も昔も同一徹、救ふべからざる事に候はんも、吾が一家は不幸打ち續き、月漏る家に起臥し、苔は床にまで上り申して候。

◎貧しき中にも、文字知らずば世に立たれまじきと、學校へも通ひ餘暇には山に樵り海に漁り、一日として怠りし事はあらず候。

◎兄上は、吾ある事を知り給ふまじきも、明けて三五の十五、高等小學は無事に卒へ申し候。

◎此上、中學へは思ひもよらぬ事に候も、此身の進む路は絶えたるにて、是非なくも牧童と共に草深き村に老ゆるの外は無きに候。

◎不運は歎くまじ、御傷はしきは御病身なる父君にて、御年はよもや御忘れも有るまじく、六十の坂を七つ越えさせ給へり。

◎兄上の御歸國願ひ、共々に骨身に碎き、一家の衰運を盛り返したく候も、五戸十戸の山村、御身を容るゝに地なきを如何にすべき。

◎父子兄弟が各處に離散するは、古來ためし多く候も、恨めしきは、御家出後只の一度も御手紙まゐらぬ事にて候ぞよ。

◎母君の石となり給ひ、撫づれど語り給はぬ淺間しきに引換へ、祖母樣は御達者に、百五歳と云ふ恐ろしき御高齡に候。

◎兄君にして一度御歸省あらんか却つて御他鄕の感あるべく、山河

依然との語は、御筆に上るべくもあらず、日見峠は開鑿せられ大道通じ、入江は埋立てられて新田と相成り、其善き方に移りたるは稍喜ぶべきも。

◎昔質氣の父上も、老い給ひし上に病み、日毎の樣に兄君の御噂、斯く申す吾にも跡慕ひ行きて苦學せよ、食う事と着る事とにかけ、今日より底は有るまじきも、行く處まで行くべしとの仰せ。

◎目前の貧苦は、貧苦として過し申すべく候も、胸に疊み兼ぬるは將來の事共に御座候、

◎兄上樣には長き間の年月を、知らぬ國々に過させ給へば、吾が心の切なる程も一倍酌み分け候はんとは、勝手なる推量。

◎此書、幸に御手に落ちもせば、筆惜み給はずに御返事下されたく夜の目も合はさずに待つにて候。

◎御不足の事あらば、改めて聞き

申すべく、今となりては父上にも多年の御不孝咎め給ふまじく。

◎待ちに待つは、御達者との御たよりにこそ。

○兄よりの返辭

◎心強くも涙忍びて、御身が生れぬ前より、久しく通信せざりしは此身に不運打ち續けばにて候。

◎故里よりの一封、今朝落手、折柄の春雨、いとも靜かに打ち讀まれ瞼うるほし申して候。

◎目的を得ざりし故の無沙汰、故鄕嫌ひし爲にも非ず、父母慕はぬにも非ず、此儀先づ御承知ありたく候。

◎國元を辭して過せる二十餘年、其數知らぬにも非ず候、母上の逝かれしは風のたよりに聞き、七回忌は此秋なることも亦忘れはせず故鄕思へばこそ、此事あるにて候ぞや。

◎細々の御便により、父上の御無事を喜び、母上の御不幸に驚き、今までとは思はざりし祖母樣の御在世には更に驚き、御身の事に付ては記するに筆なく、悲喜の涙交下り申し候。

◎嬉しみ胸に溢るゝと同時に、恐ろしき程、不孝の罪重ねし事も身に知られ、不覺の涙に咽び申し候

◎祖母樣までが、雨漏る草家に艱苦を共になさるゝ由。

◎優しく書き成されし御手紙、文意能く通り、筆の運びも暢びに暢び、文は得意の學科にや。

◎何や彼やの御たより、故國の事ども見る樣に之れ有り、悲しき中にも嬉しく讀まれて候ぞ。

◎高等科卒業とや、螢雪のいそしみ、一朝に見はれしと申すもの誠に目出度賀し上げ候。

◎野越え山越えての登校の甲斐、はじめて見はれしと申すもの、分

けて貧しき中の御教育、御兩親の恩忘れてはならず候。
◎都さして上り、勉強したしとの事、殊によく判り申して候。
◎此兄も昔はけなげなる志を立てしも、今に父母の恩を報じ得ず。
◎草深き田舍にては事を成し難し志を狂げて父母の膝下に侍せんも徒に年重ぬるのみ、とは此兄も昔覺悟したる身にて候に。
◎一途に思ひ込みての旅立、今にして之を思へば、不孝の第一楷に足掛けしと同樣にて候ひき。
◎勉強したしとの事はよけれども人は立志が第一、何にて出世する所存か、此點承知したし。
◎田舍好まぬは身に覺えは有れど實際父上より御許可ありての事なる乎。
◎不孝の兄の事、花につけ月につけ、老い給ひし父上の御心勞せし事も、それと知られ申して候。

○雜之卷

◎様々の事、罪なき御身の耳に入れしは、兄が幾重にも謝する次第に候。

◎御兩親さへウンと一言、頭を竪に振り給はゞ、都へ呼び寄せて苦しからず候も。

◎父上より往けとの命下らば、引取りて何なりとも、兄の力の及ぶ限り學科修めさすべく候。

◎申す迄もなく上京叶ひたればとて、此兄に手傳はせて不孝は働かせまじく、此邊の事ども父上へ願はるべく。

◎希望通り國辭す都合にならば、御身は既に重大なる責任を負うたる事の覺悟然るべく、少々嚴重なる申分の樣に候も、兄が一言能く味ひ成さるべく候。

◎兄に代りて順序正しく、一點の非難なき樣に孝養遂げさすべく。

◎父上には、吾が返事御覧に入れなば何もかも、相分り申すべく候

叙景 叙情 資料

○山水 （瀑布。溪谷。巖石。清泉。）

◎吾れ固より濟勝の具に乏しく候も、天下の名山大川に接せざれは心を慰め難く候○

◎某地は山水の勝に富むのみに候はで、四季折々の眺めに宜しく、梅花は最も名高く候○

◎峰巒起伏して恰も波濤の打ち寄するが如く、また萬馬の來るかとも疑はれ申すにて候○

◎久しく夢に入りし某山の友の誘ふが儘に遊び、一日を畵中に暮し申し候

◎多くは海のよきを説けど、吾は山を愛して措かざる者、暇あれば常に身を泉石の間に致すに候○

◎此日、天晴れて一點の雲もなく遠近の山々手に取らるゝに候○

◎山は緯となり水は經となり

○叙景　叙情　資料

雜ふるに幾千の梅花、此世の仙境ウテヨノとは某地の事に候はん。

○又なき山水と世に高く、詩人の遊ぶもの鮮少ならず候。

○牛の臥すが如く、龍の蟠るが如く、虎の嘯くが如く、奇岩千態萬狀一々名づく可らず候。

○橋は少なるも石にて造られて奇に、山の關門とも申すべく、一歩を致せば既に此世の人とも思はれ申さず、白雲先づ迎ふるにて候

○山勢蛇の如く蜿蜒として數里に亘り、天の一角に秀でたるが今し登らんとする某山にて候。

○行々地圖を按じて進み候に、路の曲折する每に、遠くなり近くなる同一の山。

○古杉數株、梢には千年の雲宿り鬼氣人に逼りて、一字の稻荷祠神寂びて立てり。

○聞けるが如く、一條の細流は人を導き候て、得えしは苔深き三

間餘の石の橋。
◎見上ぐる石磴は岌々として雲に入り、苔は深うして雲よりも多く、級を拾ひ足を聚めて天までもと攀づるに候。
◎藥研の底より凹みし小路を、躡くまじと汗して行く。
◎阪路羊腸として登るに難く。一歩一喘、同行七人語を交へずして、只眴するのみ。
◎九十九曲げに一歩一景、路險しきも足の痩るゝを覺えず、山上の馳眺は如何に、と心に樂しまれて候よ。
◎谷あれば水、水あれば橋、處々には飛泉さへ懸り、聞きしに勝る幽景。
◎絶壁の中腹には雲の往來しげく、偃蹇なる老松は、龍かとも疑はれて奇しく候。
◎山は地を拔く千尺、其半は雲に隱れ、絶頂のみ纔かに見れ居り候

○敍景　敍情　資料

◎み寺の塔のみ樹梢に抽きんでて、木魚の聲は白雲の中に幽かに聞え、吾々を導く風情。

◎雲は咫尺に往來し、山は遠近に送迎す。

◎殘月肩にし吾家出で、晝近うなるも未だ山腹に達せず。

◎右に折れ左に曲り、行きに行きても盡きぬ七折阪、いつ攀ぢ終るべき乎と存ぜられ候。

◎一簇の雲かと思ひしは山櫻、公平なる春は人里遠き此處にも音づれ居るにて候ぞ。

◎雲中の樹は龍かと疑ひ、溪上の石は虎かと怪しまれ申すに候。

◎川より直にそそり立てる兩岸の大屛風、嬉しきは浮世を遮ることに候よ。

◎當面に高かりし山は、いつしか後になり、危橋路を左岸に導く此邊最も景色よろしく候。

◎溪流溢れて路を奪ふ處、人は魚

貫して岩腹を横に攀ぢ、急流に沿うて過ぐ。

◎岩のさま怪にして奇、水のさま恐ろしき迄に雄偉、口開くを見るも語を辯じ難く〳〵、水搏ち石激し、耳も聾せん程に候。

◎規模甚だ廣大ならず候も、天下の奇勝たるを失はず、地の僻なればとて、價値を損せず候。

◎水の岩角に激する貌、雪の如く花の如く、また珠を碎くが如くに之れ有り、其境過淸久しく居り難く候。

◎眼は既に幾多の奇勝に慣れ候て天狗岩、太皷岩などには注意拂はぬも可笑しく候。

◎深淵その深さを知らず、色は蒼碧にして油を湛ふるに似、臨む吾影映るを鬼かと驚き申し候。

◎水深きも澄みたれば淺きかと思はれ遊鱗も數へられ候。

◎峯石の微と雖も名のなきは

○叙景 叙情 資料

無く、げに奇岩もて世に鳴る當然と存じ候。

○石卵累々として危く、人の頭上に懸り、急歩して過ぎぬものの無し。

○飛瀑二十丈許、白龍の天より降るとは既に陳套の語、新らしく形容するも筆なく候。

○絶崖を劈く飛泉岩に觸れて三層となり、其餘沫は雨かとも疑はれ、日に映じては五色燦爛

○低くけれども瀑身廣く、水晶簾とも許すべく、山神詩興深く夏夕の月を捲く事もあらば、其は實に簾の瀧の名に背かずと申すもの。

○瀑の下に立てば六月の眞晝も尙寒く、鬼氣骨を刺し之を久うすべくもあらず。

○樹間に轟く百雷、一歩は一歩よりも響き大に。

○岩のたゞずまひ、瀑の雄壯と相適うて世の常ならず。

○水烟四散して驟雨を欺き、其落口を望み難きは、流石に日本第一の瀑よと知られ候。

○秋に至るも水涸れず、紅葉の映ろひては瀑身も亦赤く、素練を懸くるとは、今日の形容に適せざるにて候。

○岩端に掛る十丈の珠簾、暮に至れば月を迎ふる愉快さ、到底筆舌の能くする所に非ず候。

○一夜を瀑近う宿れば、溪水の響きを雨かと疑ひ、窓推し開けば月清く、又も夢路を辿りたるにて候

○吾に烟霞の疾あるや久し常に自ら謂へらく、山水に非ずば其を醫し難しと。

○數ある瀑の中にも名高きは何々にて、其餘は論ずるに足らず候。

○瀑壺は廣さ十坪ばかり、清徹して底見え、細石も尙數ふべく臂を垂れて撈れば及ばざるや遠し。

○敍景 敍情 資料

◎すべて澗水は、淺きに似て其實深し、渉るものは戒しめざるべからず候。

◎澗しば〳〵轉じ、臥石流を妨げ水或は避け、或は闘へり、石を擇びて歩を移し、衣を褰ぐるに及ばず、蓋し馴れずば足を失しやすく候。

◎手行き足送ること、恰も梯に上るが如く、崖の曲れる處に至れば復攀づべきものなく、僅かに岩角を捉へて、以て顛躓を防ぐのみ。

◎古樹の垂枝は潭に俯して、水に鑑するものゝ如く、猿猴の臂を伸べしに異ならず候。

◎仰げば雲鎖し、猶佛を信ずる者の、靈像を拜せんと欲し、龕未だ啓かず、帳未だ全く褰けざるに、而も眼穿ち意渇くが如し。

◎其聲たるや、霰の降るが如く、潮の上るが如く、風の密松を度りて、雨の叢竹に灑ぐが如くに候

◎上層の瀑は、懸崖に擁され居り、翼なくば至るべくもあらず、只下方より見るを許すのみに之れ有り候。

◎飛沫を浴びて岩下に立てば、瀑の發する所、眉よりも高く、計るに五十尺を下らざるべく候。

◎巨巖の隆然として瀑上に聳え居るは、むかし鬼の踞せし處と稱せられ、極めての奇境、山氣は人を拍ち毛髮を竪たしめ候。

◎手は樹に縋り、足は岩角を蹈まへ、肩は崖を摩りて以て降り、澗に沿うて下れば、一奇流に遇ひ申し候。

◎西岸には奇岩亂立、怪石重疊突兀杜の如きもの、平坦疊の如きもの之れ有り、大なるは數十丈小なるものと雖も二三丈を下らずして、各其形狀によりて名を得居るにて候。

◎岸には楓樹多く、何れも急流に

○叙景 叙情 資料

臨み、霜隕つる晩秋の景色想ひやられ候、瀑甚だ奇なるに、又助くるに此尤物を以てす、造化將に秀を此處に鍾めんとするかと存ぜられて候。

○澗底磴の如くして、逐次疊褶し、大なること階級の如く、細なること襞積の如きもの、半町許水は其面を走りて一舒一疾數十條になりて流る、琵琶瀧の名ある所以。

○見し所の瀑、狀景各異なり候もその偉觀たるは、則ち同一なるにて候。

○面に當るの絕壁、幾曲の屛風を雲に展べ、巓に老松を戴き、腹に楓及び小灌木を抱き、一條の危棧は其下に通ず。

○此瀑をして瀧壺あらしめば、諸の飛瀑は皆下風に立つべきに、造化亦滿を忌みてか、則ち之れ無し。

◎某川は深谷の間を流れ、石怪に水迅く、舟遊の勝に名高く候。

◎急流を下らんとて、先づ舟を岸に僦ひたるにて候。

◎百ページの日記帳、山水の景もて塡めんと、同行五人の此遊。

◎川は稍廣くして石を底となし、水は則ち清淺、舟屢石を轢りて聲す、篙師は左に撑し、右に拄へ、流に順うて西北に向ふ。

◎水路左に折れて水稍深く、岸亦開けて勝漸く多く候。蓋し此川の眺め、此より愈暮の開かるにて候。

◎左は絶崖にして障を側て右は連峰相連なりて波を寄す。

◎湍に遇へば船は逆立するかと疑ひ、而も其過ぐる矢よりも速かに、岩に觸れんとして巧に其腹を遶り、吾等の生命は、舟子の一棹に在るにて候。

◎篙師の舟を操るや、乍ち右し、

○叙景 叙情 資料

乍ち左し、顧眄の間に山走り岸轉じ、既にして某村を後にす

○峽を出づれば水緩く、舟を流れに任せ、舟子が啣へ烟管のさこそ可笑しく〱、眺めも快闊に候。

○又しても舟は亂山の間に入り、兩岸迫りて水急に、奇勝いよ〱多からんとするにて候。

○舳に立てる篙師、艫なる吾子を戒しめて曰く、難所近づけり、敢て怠る勿れと。

○骨格逞しき若者は、其父に代りて舳に立ち、危岩に遇ふ毎に棹に金剛力こめ、左へ擺き右へ闔ぢ船を横たへ或は直にし、一呼吸の間に打ち開けし所に出で候。

○川とは名のみ、林立の危岩、或は連なり、或は聳まり、或は疎り或は錯り、或は羅く、篙師は棹を此間に操り、未だ曾て觸れしめず人をして殆ど舟を山に推すの感あらしめ申し候。

◎屏風岩とは懸崖の數町に亘れるを云ひ、御殿岩とは汀渚山を界し、平坦なる岩あるを云ひ、廣さは數十疊を布くべく候。
◎手に覺えの一棹、其使ふこと飛鳥の樹間に遷るが如し。
◎棹は細くして經寸、石を撐へて以て屈するに、弓の如くにして折れぬに候。
◎流れ急にして舟馳せ、兩岸の山々、一時に皆動ぎ前に見しもの、忽ち後に在り、唯岸行き山走ると見えて、吾舟の移るを覺えず候。
◎若し一棹を誤らば、舟は碎けて粉となるべく、衆人恐れて語なきに、篙師は舳艫相應じて岩を避け、驚く程の手練。
◎岩角を掠むる每に水激し、舟舞ひ、飛沫は雪の如くに飛び候て、衣袂悉く濕ふにて候。
◎客は兩手に汗を握れど、舟子は甚だ閑暇從容、烟管啣へて烟

〇敘景 敘情 資料

草の烟を輪に吹く、さても憎し。

〇山背石身、寸土を戴かずして老松髮となり、青苔衣となり、一段の勝を添ふるにて候。

〇觀瀾石とは、中流に立つ巨石にして、激流觸れて雪を噴き、浪花濺と云ふは、水急にして騰波花を散らすものにて候。

〇古杉洞を成す下に不動の祠を得祠北は石徑斜めに人を導き、頭上は萬木に蔽はれて日光透らず、奇鬼毒龍の窟に入るが如く、凄然限りなく候。

〇忽ち風の海濤を捲くが如きを聞き、忽ち雲の雷雨を送るが如きを聞く、其瀑の音たるは知られ候も其響の斯くも相逆するは、行く路の曲折して或は遠くなり近くなる故に候はん。

〇瀑泉一注すべて五層、一激して細霧となり、再激して劇雨となり、三激して飛霰となり、密雪

となり、以下は銀河の縣倒するが如く、其響は百雷も啻ならず、汪々滔々として深潭に投ず、而も其落口より之を見得べく他に勝る偉觀に候。

◎來るさには、炎天を犯して玉の汗せの身、忽ち變じて氷海に航して、雪山に登るが如く、毛骨寒冱人をして纊衣を想はしめ候。

◎老樹雲に架し、谷に臥し、其刑狀恰も危石怪岩と相爭ふが如く候

◎七重の山に浮世を隔てし此處十戸の溪村、常に雲たち籠めて人の入るをば許さず候。

◎山また山の谷底、窈然として別に乾坤を成すにて候。

◎千峰道絶えて一徑纔かに履を入れ、橫ふ丸木橋は急流に架して危く候。

○水廻り峰轉じ、處々に洞をなし左右は削り成れる翠屏、紅き

○叙景 叙情 資料

蔦、青き松、名手の畫ける繪も爭でか及び申すべき。

◎雲と起臥を共にする山の人々、羨ましく候。

◎自然の岩は門を成る、雲は之が扉たり。

◎瀧の鼓に松の琴、仙郷とは實に斯る處に候べし。

◎見上ぐる巓に古刹あり、岩を穿ちて數十級の階段を作る。

◎兩山脚相迫りて深谷を成し、其間僅かに五六間、一躍して渡らるべく、下は激湍奔騰、花に似たればとて櫻谷の稱あり。

◎初冬の頃より翌春にかけ、降り積る深雪軒を埋め、毎年清明節後に雪解け、梅、桃、櫻の花一時に咲き亂れ、山の人々は此世に出でし心地するも亦をかしく候。

◎山上は望み打ち開け、東は諸山を望み淡翠拭ふが如く、南は津々浦々を烟波渺々の間に見

るなど、錦心繡腸の士ならずば、文に上り難く候。

◎掬ぶより先づ歯にひゞく清水哉にて、岩間に湧く清水の聲、暑きに行き艱む人を蘇生致させ候。

◎山は城市の北に聳え、前は急流に臨みて斷崖千尺、仰げば翠嵐人の衣袂を濕し、其容秀麗夙に小富士の目あり。

◎幽徑一曲、又一曲、峰より峰にめぐり、古人の山從二人面一起、雲傍二馬頭一生と歌へる儘を此に見申すに候。

◎何村より何村に至る二里餘の間山水共に奇にして、恰も南畫の長卷に對するが如く、人をして歩に倦ましめざるにて候。

◎市外より直に阪路に就き、勇を皷して其麓に至る、山は双峰駱駝の背の如く、西北に聳ゆるを男嶽と云ひ、東南に立つを女嶽と云ひ、女嶽の方稍低し。

○叙景 叙情 資料

◎鞍掛岩と云ふは、鞍の前輪を岸に懸けし様を爲し、葛籠岩と云ふは、幾個もの葛籠を積み上げ、今や崩れんとするの形を爲す。

◎皷岩前に峙ち、榮螺岩後に聳え背岩は右に、槍岩は左に、其間には曰く何、曰く何、奇正並び出で其隊伍を異にするが如くに候。

◎登ること十二町にして、始めて山上の人となる、眸を放てば武相の諸山、海を隔てゝ遙かに雲際に連なり、俯すれば吾郡の丘陵或は高く或は低く、波濤の起伏するが如く、村落の粉壁の微に至るまで、手に取らるゝに候。

◎人の長より高き茅の中を、一筋刈り開きて通路とせる所を過ぎ行けば、路は險しき山脚を上下しつつ縫ひゆく。

◎鼻孔天に朝して上る峻阪も、絶頂見えければ、手と足とにて攀ぢに攀づ。

◎唯望むべくして攀づべからざるかと見れば、長き鐵鎖さがりて人を導く。

◎人間炎熱に苦しめる夏の眞中、下界を幾重もの雲の底に隔てゝ、爐を擁するも尙、山氣の冷かなるを覺ゆ。

◎外山は高く、み山は濃く、色づきたる秋の錦の眺めいと面白きに巨巖にまつはれる蔦、その巖面を貫きて生ひ出でたる木まで紅葉す

◎山は舊によりて高く、水も依然として淸し。

◎路を失ひ谷川の聲を踏みて行くに、荊棘數幅を奪ひ、樹よりの墜露襟に灑ぐ。

◎鬱蒼たる樹木、左右より蔽ひかかりて路暗く、何處からか梟の聲寒う聞ゆ。

◎雨降りて英雄の靈を弔ふこと能はざりき、豈に古城の靈忌む所ありて、人の其墟を窺ふことを欲

○叙景 叙情 資料

せざる乎。

◎金剛山は葛城山脈の最高峰、高天よりは一里十四町、千早よりすれば二十八町、山頂に行者堂あり此山よ、畿內にて最高の峯嶺、眼を放てば五畿の雲烟を脚底に見、遠く紀伊淡路播磨の山海、亦指顧の間に落つ、西下二町許に轉法輪寺あり、又、千早城趾あり。

◎歸途、麓より其嶺を瞻んと欲すれば、笠檐背に着く、以て攀ぢし山の高きを知るに足る。

◎顧みれば、其容凡山と逈かに異なる、故に知る、今日の遊の自ら平生に勝れるを。

◎吾れ、山に遊ぶこと百にして足らず、常に其記すべき無きを患ふ、獨り此山の奇多きこと、文記するに遑あらず、筆圖するに遑あらざりき。

◎一歩毎に相遠ざかるも、峰尖は尙雲間に見えて余を送る。

◎想ふに、奇を探り險を試みること、今遊の如くにして、能く山に遊ぶものと云ふべき乎。

◎水は石に非ざれば、態を成さず、石も亦水を假りて以て趣を爲す、只山と水と石と相値ふや難く、能く天下の勝を成すは稀なり

◎一日にして百里を降るは易きも十日に挽きて百里を泝るは難し、こは獨り急流を上下する舟のみに非ざるなり。

春の山水

◎雪の被衣をぬぎ捨てし、露の衣麗はしく、妓よりも嬌する春の山の姿、

◎何れの山々も、花曇りして眠るが如く、み寺の鐘も緩う流る。

◎半は花に掩はれて姿も艶に、冬枯れて骨立ちし山、佐保姫の恵みによりて若返りし乎。

◎花の雲を分けて頂に上れば、處々の村々脚下に落ち、寸馬

○叙景 叙情 資料

豆人、身は雲雀の聲を踏みて立てるなりき。

◎日頃は猛く見えし山も、春は優しく見ゆ、己が心からにや。

◎雨の降る日は愁ふるが如く、高く低く夢の如、影を書樓の前に落す。

◎溪川に沿へる藁屋にも、春は流石に訪づれて、山櫻の二本三本、朝日に匂ふも床しや。

◎山裾は草霞して、夕日を受けし花の峰、殊に美し。

◎流るゝ谷川の水も落花に薫り、醉後に掬ぶも心地よく、詩腸を淸うす、

●●●●夏の山水

◎花の衣を脱ぎすてゝ綠淸しき端山しげ山。

◎げに、綠陰幽草花時に勝るの時水村山郭うたゝ望淸し。

◎新綠を渡る薫風暑からず寒からず、未だ覺めやらぬ花の醉を

吹き清む。

◎日日にしげりゆく青葉の蔭した流るゝ水も愈清く。

◎木下蔭に湧き出づる岩清水、夏は旅人の命とも云ふべく、嶺越す人毎に、立ち寄りて掬ばぬ者なし

◎森の樹々は緑の雲を沸かし打ち見れば海よりも深し。

◎山腹は雷雨なるに拘らず、其頂は晴天なるが可笑しく候。

◎全山さながら濃き墨を流したらんが如く、俄かに催す白雨

◎山は夢よりも淡く江上に峙ち、驟雨の雲脚尚その中腹にたゞようて。

◎山の影、水の響、何れも涼しからぬはなき雨後の眺め。

秋の山水●●●●

◎西風吹きそめてより林衣疎に、夕月漸く高う懸る。

◎木間に秋の聲してより山路涼しく、村の子等は栗や茸を待ち、吾

（一）叙景　叙情　資料

は錦引き延ゆる紅葉を夢む。

◎山々の紅葉の錦、夕日に映えては一しほの眺め。

◎秋の野山は、分けて詩によく旅に宜し、そは白雲の朝、紅葉の夕にて候。

◎萬山樹枯れて骨露はれ、千澗水涸れて石出づ。

◎紅葉の水に流るゝ、錦を縷めしにも似る。

◎夕日冷やかに西山を下り、疎鐘緩く白雲を出でゝ來る。

●●●●冬の山水

◎紅葉に秋を飾りし山、一だび木枯の吹きそめては、目もあてられぬ眺め。

◎春は花、夏は緑、秋は紅葉に眺めよかりし山も、あはれ、冬となりては顧みる人もなし。

◎一時雨する毎に木葉落ち盡し、骨のみ餘せる冬の山、奇巖の眞面目を賞せんには、此頃に勝る

とき非ず。

○城市、園池

◎昔より、浪速の都の行樂水にあり、浪速の富も亦水にありき、淀川に三十石船の往復せし昔より安治川口に出船千艘入船千艘と謠はれし昔より、水は浪速の富なりき、浪速の誇りは水なりき。

◎古城址北に聳え、青松白堊、僅かに豐公の遺蹟を留め、天王寺は南に峙ち、塔尖に懸る月と共に佛法長へに磨せず、人生の興亡は暫く說くまじく、我大阪にては一双の美觀にて候。

◎大となく小となく、縱橫の水路三十八條、到る處に水汪々として貫流し、之に架する橋梁二百四十二臺、世に八百八橋、或は一百八橋と謠はるゝは、其數の多きに取りたるに過ぎず。

◎大阪は我邦最大の商業地、又工

○叙景 叙情 資料

業地たり、世人動もすれば俗のみと嘲けれど、訪ふ名所古蹟無きにもあらず。

○某公園は、瀑と紅葉とを以て其名世に聞ゆ、古刹あり、辨天は日本の四辨天の一と稱せらる。

○五十年前、細草離々たる寂寞の漁村、天與の形勝と世界の大勢とは、忽ち二十五萬の大都となりぬ、是れ、神戸にて候。

○荒草を踏み蛇經を辿り、老松數株の下に、楠公の忠魂を弔ひし處、今は神戸に於て最も繁華の區、其激變も亦甚しからずや。

○園は四季の花に貧しからざるも最も梅花に富む、地は山腹に位するを以て海觀よく、近年漸く人に知られ、遊客日に多し。

○京都は宗教の叢淵、日本美術の淵源、而も洛中洛外、星の如くに連なる名詞古刹の物言はすして、歴史を語る、又、一山一水

悉く之れ歷史の頁なり。

◎舊某侯の治所、また是れ山間の一小都會、故城趾は町の南十町許に訪ふべく、樓櫓存せざるも老松は舊主の德と共に茂り、他の耕地と化せしに似ず、鎭せられ居るは一町の氏神、小丘に碑あり、其沿革を記さるゝにて候。

◎川は町の中央を貫流して東西に分ち、架するに四橋あり、東は高阜にして、西は稍平坦、其規模西京の小なるもの。

◎公園は面積六町歩餘、多少の人工は免れざるも、山も水も自然の儘なるが嬉しく、櫻花に富めばとて、土池の詩人は小嵐山と及び、春風駘蕩の節には、衣香扇影、一城を擧りて此園に遊ぶにて候。

◎泉池あり、竹林あり、梅柳櫻桃美を競ひ研を爭ひ、四時の風光人目を慰するに足る。

○叙景 叙情 資料

◎樓上樓下眺望佳絶、青山碧流一々指點すべく、春花秋月畫に入らざるは無く候。

◎其氏の舊城邑にして某街道の要衝、市坊十八、地は某川の東に位し、東南は開豁遠く何某の連峰を望み、北は某山の麓に接す、市店鱗次物貨輻湊西十餘町にして古城趾あり。

◎城趾は今、某公園と稱し市街の西に在り、廣袤纔かに一町歩而も花卉竹樹、泉石の美備はらざるなく、處々に亭榭を設け、茶啜るにも酒酌むにも、懐と相談次第にて都合よき處。

◎丘上の小亭に坐すれば、湖の南涯、松杉の茂れる間に、少しく華表を露はすものは某社、北岸の某寺と碧波を隔てゝ相望み、朱殿彫欄歷々指點すべく、風光明眉に候。

◎亦是れ山中の名邑、春は溪間の

櫻桃妍を鬪はし、夏は不動の瀑布涼氣身に迫り、秋は某山の月玲瓏として心を清からしめ、冬は雪を某祠に望むに宜し。

◎園の高處に映山紅閣あり、蓋し映山紅多きを以て名を得るにて、登るには螺旋狀の小路を小股に歩むべく、細流曲折して之に沿ひ、深山に入るの概あり。

◎荊棘を誅鋤し登路を開鑿し天造の至らざる所を補ひ、雅を存して俗を去り以て一大公園としたるもの。

◎人烟八百餘、商戸は軒を山手に聯ね、漁舍は門を海濱に接し、商漁劃然として二區を成し、併せて何町と申すに候。

◎園内甚だ廣からざるも、天然と人工と相待つて勝を成し、忽ちにして田園、忽ちにして密林、一歩する毎に景新たに、只農家と樵戸を見ざるのみ。

○叙景 叙情 資料

◎細流あれば必ず石矼、竹樹あれば必ず亭榭、其流れ崖に遇うて瀑となり、潭注いでは池に入る是れ某園の梗概。

◎園の花に開落の遲早あるも、彼岸櫻は其過半を占む。

◎城市に接したれば士女の來り遊ぶもの多く、花に醉ひ月に吟じ、四時の賞觀に宜しく、獨り花月のみに非ず。

◎四季の花卉を植ゑて景趣を添へ、剩さへ納涼に適し、露光る月夜に蟲聽くは又なき風流、雪は固より都下第一と稱せらるゝの地。

◎姫路は中國の要衝、城は日本三名城の一に居り、天守閣は今尚雲表に聳え、粉壁は青松の間に露はれ、屋棟は日に輝き、當年の雄鎭想ひ遣らる、一名を白鷺城、現時第十師團の營所なり。

◎今は秦關の百二重なるに驚かず、外寇を待つに幾多

の砲臺を築く。

◎大阪の水を誇るが如く、水を富とするが如く、京都は宗教美術を誇り、名所古蹟を以て寶とす。

◎昔ながらの林泉、幽鳥老樹に鳴き、錦鱗清澤に跳る。

◎露霜に寂たる石は、苔蒸て千古の色深く殊更に床しき思ぞする。

◎庭園は相阿彌の經營せし所にして、山水の明媚、天下の勝を集めたる心地す、四時の眺め老ゆるときなく候。

◎國内某地に亞ぐ繁華の地、戸數四千餘、地勢は北方一面海に臨み他の三方は山嶽圍繞し、土地平坦、溝渠縱横に貫き、橋梁甚だ多し。

◎陸は險難多くして運搬の便乏しく、海は風波劇烈、往々航行の途を絶つことあり。

◎鐵道に幾分の繁華を奪はれしも古來の一港邑、呉船越舶

○叙情　叙景　資料

入りつ出つ、日に千を以て數ふべく、國中に於ける第一の都會。

◎今でこそ日本第一の首府なれ往昔は廣漠たる原野。

◎慶長年間、德川家康覇府を開くに及びて、公伯の第邸、商賈の肆店、數里絶えず、三百餘年を經て今日の首都となり、長祿年間の太田時代は、千代田の名を餘すのみなり。

◎電線は蛛網の如くに張られ、汽車は郊外に往來し、電車は大路を縱横に馳せ交ふ。

◎碧瓦參差として魚鱗を成し、人烟稠密。

◎地は國道の衝にして、蹄輪絡繹、交通至便。

◎居民數百、商漁互に家を成し一城の生計豐かに、山河尙舊侯の餘澤帶ぶ。

◎一水斜に岸に開き、双城遙かに雲と共にす。

○郵驛、羇旅

○さらば恙なくと別を告げて見送れば、山重水複の裡に雨蕭々として、何となく物悲しき破驛の曉、車は早くも霧の中に消えて、車輪の音のみ溪水の聲に和して高し。

○夜來の雨、屢旅舍の夢を勞せしが、今朝空幸に晴れて櫻花にさす朝日匂やかに、心自ら勇む

○旅に嬉しきは、晴天なるが、今日は一點の雲にだになし。

○路は四十曲にかかり、行けども〱家なく、暮色はや蒼然として寒蟬亂れ啼く。

○千里雲隔たりて明月空しく兩地の情を照す秋の夕、昔は共に此月に泣きたる事もありしと、坐ろにうら悲しく。

○武士の帶刀と共に廢れし古驛なれども、海を拔くこと四千尺に近

〇敍景 敍情 資料

く、白雲人の懷を尋ね來て夏知らぬ處。

◎十年の事も雨に和して心頭に至るためし、殊に雨に偲ばるるは故郷の昔なり。

◎點滴はや收まるかと見れば、暫し宿借る茶店の木立に蟬時雨、一道の彩虹東西にかけ渡して高し

◎流れゆく數多の月日、つもりて久しき二十年の浮沈をば、旅より旅の夢に過せり。

◎菅の根の長き旅路に、幾年も浮沈に馴れし夜半の夢。

◎誰が里に、明日は雨と成りゆかん、むら〱高嶺に湧き出る雲の波、端山外山も何時しか、打ち包まれぬ。

◎心づくしの秋の夕、何となう涙の零るゝに、故郷の友懷ひ出で。

◎夕は、峰の時雨も降りや初めけん、露やゝさむき片山里の秋の暮逢ふ人さへなし。

◎懷かしき昔の秋に、いよゝ思ひ出づる人ぞ懷かし。

◎故里のしのぶの亂れ、如何ならん、昨日今日、都も秋の色ふけて拂はぬに零るゝ萩の上葉の露。

◎風なきに萎るゝ尾花の袖の影瘦せて、物思ふとにはあらねども、何となく眺めらるゝ夕暮の宿。

◎清風白露咲きみちて、唯一面に澄みわたりたる大空に、雁がねの三つ四つ二つ。

◎いさゝ村竹繁き處、鎭守の森こんもりとせる處、淺茅生が露のからぬ草もなかるべし。

◎驛はづれは勾配緩き坂路、雜木林の小春日暖かきに、木を挽く男の小唄、鋸の音に節をかしく聞え一步は一步より其處に近づく。

◎横川の一夜は蕭條たる客舍の窓に、溪韻と落葉の聲とを枕上の夢と疑ひつゝ、故鄕の夢も破れがちにて、東雲告ぐる鷄の聲に、

○叙景　叙情　資料

又もや旅裝を促されて宿を立ち出づ。

◎夜は既に明け離れたらんも、山間の村の常として、宿霧未だ霽れやらず、天地を籠むること細雨の如く、蓬々たる鬚髯に珠綴るいと可笑し。

◎破驛人なくして棲鴉樹梢に噪ぎ、夕陽影冷かにして、疎鐘寥雲に迷ふ。

◎故郷の春を知れとや、文に卷きこまれし梅花の一輪、墨と共にいや高く匂ふも床し。

◎故山の花に別れ、他郷の月に泣き、只夢のみ西に馳す。

◎花は咲けども而も去年の花には非ず、嗚呼、吾は亦天涯に老いぬるよ。

◎陸には歩み海には舟し、其日其日に變る旅のさま。

◎花に千里の思ひを慰め、月に一夕の愁を照らしむ。

○身跡は萍蓬に似て宿を定めず、楊柳の渡に舟を呼び、落花の驛に馬を駐む○

○茅店の鷄聲に殘夢を送らせ、板橋の淸霜に客跡を留む○

○岸に咲く花は客を送り、橋に宿る燕は人を留むるに似たり○

○面に當るの亂山高下人に行路難を歎せしむ○

○旅舍に宿り、僅かに蝶夢を成せども、鷄鳴を待たず○

○城市を遠ざかるに從うて語漸く鄙に、人を迎ふるの山水愈奇ならんと欲す。

○路は京洛に近づきて花容麗はしく、人語亦雅なり。

○月の窓、夜更けては心いよ〳〵澄み、繰れど盡せぬ思出の絲○

○絡繹として人馬夜を日に繼ぎ、山中に一繁華をなす。

○山驛春酣にして野花亂れ發し、草亭晝靜かにして

○叙景 叙情 資料

行客杯を擧ぐるに宜し。

◎午鷄鳴くほとり酒旗颺り、野橋細流に横りて、斜に人を導く。

◎五十三驛を夢に過ぐる汽車、吾は好しからずと、破笠短簑に身をやつす。

◎秋の雨は旅懷を傷ましむれど、春のは情あり。

◎舟の乘合ひ殊に宜し、國自慢の話に花咲かし、鄙ぶり歌ふ老婆さへ有り、而も十年の相識の如き、汽車にては得難き客多し。

◎行々名祠古刹を訪ひ、日記に墨塗るも、閑課の一なれども、友に約したれば購ひし繪葉書には、幾度か首傾けて、句を吐き出で、其日〳〵の信に代ふ。

◎百日餘の旅の人、踵を西に返せしより、夢重ぬる毎に故里近づき、曾て吾を送りし小富士の影は雲表に寸青を露はせり。

○道路、橋梁

◎修道坦々として砥の如く、足に任せて歩くも、自轉車を驅るも其は自由。

◎門は夜閉さず、道に遺を拾はず、行旅橐を委して眠る、み代太平の今日。

◎槐を植ゑて堠に代へし國道五里に一短亭、十里に一長亭。

◎新道は平坦にして遠く、舊道は險にして近く、而も景色多ければ彼を捨て此を取る者少なからず。

◎並木松に代ふに櫻樹を以てし、春風一たび吹き來れば千朶萬枝雪を漲らし、人は花のトンネルを行く思ひあり。

◎並木松原に通ずる一線の道、右に重疊の青山を見、左に汪洋たる蒼海を望み、西の方歩盡きて九十九曲の峻阪となる。

〇叙景 叙情 資料

◎交通至便、北に某街道、南に某路、東は何地に通じ、西は某地に達すべく、所謂四通八達。

◎兩岸迫りて飛棧掛り、谷窮りて小徑僅かに人を導き、肩は崖を摩し足は溪聲を蹈みて進む。

◎中央を車道とし、左右は則ち人道、栽うるに櫻と松とを以てし、花時には紅綠相雜り、行人は歩を停め、車上の人は首を回らす。

◎十里の坦途、その末は雲に入るかと疑ひ、彼方に車馬の現るるもの、眞に寸よりも短く、豆よりも小さし。

◎之を望めば、初月の雲を出づるが如く、長虹の澗に飮むが如し。

◎千條の柳は日に紅欄を拂ひ、往來の酒船歌舫は幾艘ともなく其下を過ぎ、夏の夕暮は涼を納るゝの人多し。

◎橋は千尋の空谷、斷岸矻立

の上に架し、長さ三十八間、幅三間、欄によりて俯瞰すれば、谷は其底を見ずして、雲霧足下に生じ、身は空中に行くに異ならず候

◎兩岸に岩石を疊みて橋礎となし絶澗に架する長さは六十餘間、長蛇の雲に臥すが如く、橋下には一支柱を用ゐず。

◎橋は柱脚を用ゐず、銅線もて之を繫ぐ、其長さ三十八間、人呼んで釣橋と稱す、都の紅欄なる

が美麗と云はば、此處のは奇巧と評すべきぞ。

◎釣橋あり、長さ三四十間、銅線に吊されて、深谷十數丈の上に懸る、かねて聞きし藤橋はこれなるべし、藤づるの銅線とかはりて、心強く感せらるゝは、文明の餘澤とも云ふべくや。

◎旗亭紅葉屋の側を下れば、淸瀧川の流れ淙々として岩角に玉を飛ばす、橋あり、淸瀧橋と云ふ。

○叙景 叙情 資料

朱の高欄青銅の擬寶珠、殊に趣味深く感ぜらる。

○觀月橋と名を得しは、中秋の月は固より、月と云ふ月の夜毎に眺め美しきが故なり、淀川の流に架し、長さ百〇四間、幅四間半、久世、紀伊の兩郡に跨る、西方に中島あり、中書島と稱し、夏の夜涼みは亦名所の一。

○算盤橋とは錦帯橋の俗稱、其構造の奇巧と堅牢とは、我邦架橋工事中の好模範、延長百二十五間最も高き處水面より十三間、石を疊みて四個の脚を作り、之に半月形の五小橋を架す、橋は框を組みて層々相憑らしめ、一支柱をも用ゐず、其下は奔流矢を射るも未だ一たびも崩壞せし事なしと云ふ、橋畔に碑あり其由來を記すること精し。

○河川、渡津

◎平日は水涸れて河底を徒歩し得べきも、霖雨一たび至れば河水氾濫、一夜に百雷を鬪はし猛烈比ひなし。

◎某川は何山に發源し、國を經る三つ、郡を過ぐる二十有餘、諸山の小水を合せ、某海に注ぐ、流域凡そ五十里、舟楫の便を通ずる三十餘里の上流に及び、處々に絶壁側ち飛橋掛り、風光の奇を以て天下に名高し。

◎流域十里餘、其間概ね岸峙ち水急に、奔湍は射るが如く、深潭は藍に比すべく、絶崖に過うては瀑となる、初夏は躑躅咲き亂れて水も亦燃えんとし、秋は紅葉の眺め附近に比なく、霜繁き夜は月に叫ぶ猿聲、哀れを添ふ。

◎延長六十餘里、濶さ十三町許、初夏の頃は水多く流急に、舟にて下らば、千里江陵一日還の觀あり途中には風光の賞すべきも

○叙景　叙情　資料

の多く候。

◎何村の流域には、所謂四十八瀧なるものあるも舟の奔下するに從ひ、一瀑送れば一瀑迎へ、大なるあり小なるあり、高きあり低きあり、或は樹間に半身隱れ、或は岩面に露はれ、殆ど應接に暇あらざらしむ。

◎舟下ること矢の如く、驚波人の衣を霑す、見上ぐれば紅楓青松の間、白雲湧き古祠立ち、彼方には樵者憩ひ、此方には歸牛ゆく、天然の丹青舟の進むと共に變化す。

◎川の幅いと廣く、下は田野を縫ひ海に接して差別なく、對岸には寸馬行き、豆人來る。

◎某川の上流に出でんとて、朝日を肩にして、山深く分け入る、左右皆絶崖なり。

◎川の流は小に、岸は低く、路は直に川身に添ひ、水と共に萬山の

低を縫ひ行く。

◎前に望みし山々は、忽ちにして後に現はれ、今ありと見し岩角は何時の間にか形を失ふ、山走り岸行き、樹石皆動くが如し、數里の行程夢の間に過ぎて淸瀧の出合、こゝを越ゆれば萬象漸く定まりて嵐山の麓に至る、之れ保津川下しと云ふ。

◎保津川は山水の勝奇絶なるのみならず、初夏の躑躅に宜しく、舟を下すには其頃を選ぶを妙とす。

◎奔流矢の如く、一日の行程三十里、眼に觸るゝの景、匆々の間に過ぎ、一々應接するに暇あらず。

◎深谷を過ぎては、奔騰して百雷を鬪はし、岩に觸れては雪花を散ず、平野を流れては、滔々として天を蕪す。

◎桃の岸べや柳の渚を流れ、漸く廣うなりて詩酒の舟を容る。

○叙情 叙景 資料

○叙情 叙景 資料

◎雨を帶びて下る白帆の二つ三つ其先なるは柳に半ば隱れ、後なるは花より出づ。

◎憐れや乙女の渡守、花の岸より柳の岸へ、只一棹さして渡す。

◎日暮に近ければ、下流の橋の半は烟に隱れ、東の岸の花のみは獨り明かなり。

◎油の如く緩く流るる春の川、緑の柳と紅の花とに挾まれては、兩岸の景色畫に入る。

◎夕日を載せて棹さし行く、船の眺めは尙更にて、吹くともなき風に花の散りては、老いゆく春の跡見ゆ。

◎酒や歌に暮れそむる川の面、習々と吹く東風に颺る簾に落花の雪を拂はす。

◎主なき漁舟の横たふほとり、夢靜かなる鷗は落花を浴ぶ。

○湖沼

◎沿湖の漁村點々として水雲杳靄の間に隱見し、月の夜の棹歌に宜しく候。

◎湖面は圓鋼を磨したるが如く白帆は辷るかとも疑はれ候。

◎北に聳ゆる某山は、徳川初年の古戰場、一本松の聳ゆる所は、當年の決勝點なる由。

◎北に蜈蚣の走るが如きは、曾て吾々を驚かしたる一瞬千里の汽車波間に點ずる白鷗は、今に至るも尙運輸に便する帆船にて候ぞ。

◎湖の周圍には名勝古跡多く、花は懷古の淚を灑ぎ、月に詩を拾ふも宜しく候。

◎四面山に圍まるゝも沃土多く、湖尻は大道開けて砥の如く、車馬絡繹として絕えず候。

◎堤上には櫻樹數多植ゑられ、花時には一帶の香雲碧波に薫し、美姝の麥鋼に向ふが如く、夏は輕舸を放ち、三伏の熱を忘る

ゝ宜しく候。

◎周回二里、十餘箇村の灌漑用池假令水を落す事あるも、北の一區ゝは尙深潭を餘し、旱天續くも水涸れず、千町田に龜裂を生ずるも、土人は此處を汚すを憚りゝ、雨を禱れば靈驗ありと傳へられ居り候、

◎湖は北に山を負ひ、南は一帶の水田渺々として城市に接す、所謂一望二千石と稱するものは是

◎山中に三小湖あり、上池、中池下池と云ふ、奇岩岸を遶りて自然の林泉をなし、湖中には多く鯉鮒を產す。

◎東に温乎たる小富士聳え、西には峻險飛鳥を回す劍ケ峰あり、南には某嶺、北は田野を隔てゝ某山に對す、湖を望むには小富士の中腹最も佳。

◎東南の渚には花菖蒲多く、初夏の候に至れば、紫白色を爭うて淺

水ために艶に、漢詩より和歌の料に適するにて候。

◎水充瀲灔として常に岸に湛ひ、殘月淡き夏曉、涼風に歩して蓮花を賞するに宜しく、西手の寺院は、觀月を以て名高く候。

◎沼は東西に短くして二里、南北に長くして七里、周回は約十二里沿岸に繞る村落四十有餘、城市あり、漁村あり、風光悉く佳ならざるに非るも、平地の眺矚は遂に丘陵の觀に如かざるなり。

◎若し夫れ、丘岡の登臨以上の景を貪らんとせば、舟を湖心に浮べ棹に任せて隨意に、白鷗の友ならで其すべてを盡しがたく候。

◎全湖の風光を一眸に收め得るは此處小丘の絶巓、湖を遶るの山は翠屛を列するが如く、漁舟浮鷗と伴ひ、汀蘆岸柳、皆是れ畫家の粉本。

◎寺は四面を溝渠を遶らし、築く

○叙景 叙情 資料

に塀を以てし、宛然たる一城郭其南に石橋を架し山門に通じ、喬木の間に樓閣聳ゆ。

○峰巒翠を凝して倒影を湖中に蘸し、風に飽くの布帆、雨を凌ぐの漁舟、一一畫に入る。

○此湖の風色他にすぐれ、東は水田相連りて磯の松原を望み、南は某々の森に向ひ、西は何某の連山を仰ぎ、北には天を撃ぐる某丘を見るべく、雨の漁火、晴の布帆、且つ夕照によく、晩鐘によく、古來八勝の目あり、曰く何、曰く何唱和の詩歌多し。

○滿池に蓮を栽ゑ、八七月の頃に至れば、紅白の花細波に映じて清香袂を襲ひ、其亭々たる柄、其田々なる葉、曉風を弄して眺め清く、夜景も亦惡しからず、雅俗の欣賞する所に候。

○中禪寺湖を隔てゝ男體山を見上ぐる景色は、箱根の蘆の湖に倒富

士を見る景よりも、數等の上に在るにて候。

◎坐して湖上を見渡すに、暮色細破を罩めたれど、日は未だ全く落ちず、對岸の旗亭にも未だ燈火點せられず、月の上るには良時あるべし。

◎冬は水禽多くして遊獵に適し、夏は紅蓮白蓮亂れ咲き、奇しき薫りに醉ふ心地するを、巨椋池とす周回四里餘、殆ど湖水の如きものあり、古歌に巨椋入江と見ゆるは淀川の流れ此に注ぎ、入江となり居りしが故なり。

◎烟こめ初むる夕に網擧げ、月沸く頃に酌むも惡しからずこは夏にも秋にも。

◎鳶の輪に舞ふ小春日和、白雲の影は鏡欺く湖心に落ち、棹さす舟は天に登るに似たり。

○島嶼

○叙景 叙情 資料

◎八重の汐路に浮世隔てし離れ小島、月も照らし日も輝き、花も咲けば鳥も啼き、人々の心に功名利慾の念沸かぬは、分けて嬉しく、蓬萊とは實に此處乎。

◎島の形は、恰も榮螺を伏せたるが如く、峙つ尖岩は劍を植ゑしにも似、攀づる事に巧みなる猿も逡巡すべく、島の東方に一の入江あり、纔かに船を泊さるゝに候。

◎遠く望めば一拳の青螺碧波の間に浮沈し、詩人の筆に上る古來、其數を知らず候。

◎東に在るを鷹島と云ひ、西に在るを沖の島と云ふ、兩島相距る僅かに十町餘、沖の島は鷹島に比すれば稍大、周回六七町、松柏の濃翠滴る下に一宇の辨天祠を設け、夏時は殊に賽者の舟多く候。

◎島は周回僅かに五町、四面削るに似て蒼壁萬仞、戴くものは

竹のみにして、更に他樹を雜へず竹小島と名を得る所以。

◎幾多の島嶼星散し、風に雨に姿態一ならず、時ありては怒濤の中に沒し、時ありては烟霧の中より見れ、沖なる小島は、近く行く白帆に隱るゝことさへ有り。

◎二ツ島とは名のみ、海上に直立する奇巖を呼ぶもの、全身寸土を着けずして、松と他の雜木を戴き、風濤に矯められて其枝地を這ふ、其一は相距る三十間の地位に浮べど、昔日の巨巖なく、波に洗はるゝ平面石あるのみ、蓋し、激浪に堪へずして崩壞し、其基部のみを殘すなり。

◎全島みな桃、花時には絳霞靉靆として天を蔽ひ、鷄犬相呼び相答ふる聲は、其中よりし、恍として武陵の春をなす。

◎島の南なる岸壁には竇穴多く、波浪突入して岩背に出づ、一進一

○叙景　叙情　資料

退音響鼕々、其大なるものは雷の如く、飛沫雪の如し。

◎眺めをかしきは大沼の浮島なり其大となく小となく、萱根相聚りて島を形りて浮き、松樹を生じたる儘、波に搖れて東西に漂ひ、風に從うて南北に回り、聚散常なく、恰も遊子の跡に異ならず候

◎漁夫は網し得たる魚を酒に代へ濁聲あげて、蘆花の月に棹歌うたふ、其輿は都の人の知らざる所。

◎落日波を射て力なく、愁を帶びたる暮雲、心ありげに島の上にさまよへり。

◎窟のさま、窟壁のさま、斷崖のさま、斷崖の下の巨巖のさま、之を怪絶と評せんか、之を奇絶と評せんか、殊に此附近には、面白き形せる島、いと多く、一棹毎に益々趣を加へ來るに候。

◎北海眺むるにつけても、思ひ出さるゝは、後醍醐天皇の御事なり

其北條氏の爲に流され給ひし隱岐の島、遥かに海上に見ゆ、孤岸の荒磯にうちよせし北海の浪は、如何に天皇の御心を碎きけむ。

◎嚴島は神社あるを以て名高く、七浦七蛭子の島巡に名高く、彌山にて名高く、古戰場として名高く建築物にて名高く、紅葉澗にて名高く、細工物にて名高く、獨り景色の勝れしのみに非ざるなり。

◎京都巡り自慢する島人をかしく祇園の花の噂までなす。

◎本島を離れて北へ十里、波荒き日は海底深く隱れて見えず。

◎碁布星散の島々、竹あるがあり、松あるがあり、其大なるものには人住み、今し菜の花盛り、鷄長閑に午を歌ふ、其小なるものは拳の如く、陸近く走る白帆に隱る。

○江海、港灣

○叙情 叙景 資料

◎静かなるときは恬波熨すが如く、荒るれば怒濤山を成し、岸に觸るれば雪を噴く。

◎觀月に宜しき松崎の磯、斷岸直に水際に迫り、怪岩其間に起伏し、激浪は萬馬を馳せて其脚を噬む、東には干球、滿珠の二青螺あり、遠くは本山の岬を煙波縹渺の際に望む。

◎友は山の靜を誇るも、吾は海の偉なるを愛づ。

◎夕日に映ゆる一寸の白帆、誰が夢載せて何地に行くにや。

◎け高きは紫紺薫ずる元日の潮、初日を受けし白帆は、金色に映ゆ

◎船の行手に磯山低う見え、近づく儘に漁家現はれ、鷄の聲聞え、桃の花明かに柳は暗し。

◎一江の春色繪の如く、花と柳とに彩らる。

◎彼方に響く柔櫓の聲、此方の磯は先づ柳に暮れんとす。

○雪とも見まがふ磯山の櫻花、嵐に狂へば、波の花と相鬪ふ。

○浪を彩る夕日鮮やかに、漁歌一曲手に取る如し。

○淋しき海村、汽車通じてより避暑の客に賑はされ、煙草賣る店さへ出來ぬ。

○渚に亂るゝ蘆花の雪、磯山より降る紅葉の雨、

○冬は流石に波荒れ、漁火も物凄く、千鳥の聲も心細し。

○見渡せば、蒼波は四國の雲巒を蘸し、其間に散布せる大小の島々は、一々指して數ふべし。

○南は茫々たる太平洋、目を極むるも遮るものなく、時に巨鯨の潮を噴くを見るのみ。

○白沙清きこと雪の如く、月に描かるゝ松の影は墨繪の如く、夏より秋にかけての遊に可し。

○日本海上に白帆を見送れば、佐渡が島、長鯨の如く水天髣髴の

間に隱見す。

◎危礁亂立する荒磯に、寄りては碎くる浪花白く、水天縹渺として烟に暮るゝ夕。

◎寢待月浪路の末に洗ひ出されて、萬里の浮光黄金を躍らす夜もすがら露に立ちつくして、嘯くいと興高し。

◎海濱十町餘の間、古社の外に家なく、後は小松の生へ續きたる高阜を負ひ、前は直に俯して海波に臨み、自ら別天地を成す。

◎波光遠く月に輝きて、萬里金粉を散じ、沖に釣する漁舟、三つ四つさやかに見ゆ。

◎前に茅渟海を控へて、遙かに淡路島山に對し、左に攝津播磨の山々を望む、紀泉の峰巒は、雲か霞か霧か烟か、糢糊として其眞を辨ぜず、浪は汀の白砂を洗ひて其音清く、風の色まで淸々し。

◎須磨の浦曲の景色は、北に山高

く南に海廣く、西南に淡路島を望む、磯べは砂白く水清く、最も夏期の海水浴に適す。

◎海峽僅かに五十餘間、潮流最も急に、迅雷の響をなす、北岸は一帶の丘陵にして、麓には漁家點綴し、南岸は削り成せる蒼崖奇松倒に懸り、怪岩亂れ出づ、世に小赤壁の名あり。

◎內外の船舶、日夜港內に輻湊し帆檣林立、本邦無比の要港。

◎港內廣からざれども、浪穩かにして水深く、大艦巨舶直に岸に繫ぐを得べし。

◎西海の咽喉を占め、瀨戶內海を往復するもの、一として寄泊せざるの船なく、鐵道と相待ち往昔に倍するの隆盛を見る。

◎帆を晩風に捲くもあれば張るもあり、國內第一の要津。

◎蒼海を東西に臨みて水色天を蘸し、群峰を左右に顧みて嵐氣衣

○敍情 敍景 資料

を撲つ、若し夫れ、他の諸景を論ぜば、平凡にして筆を勞するに足らざるなり。

◎巉岩相擁して港灣をなし、水頗る深く、大船巨舶を容る、市街は屋を構ふるに地なく、絶崖の下に棧橋を架し、三百の人戶は奇しくも、水上に家居するなり。

◎商舶漁舟の輻湊する所にして、商賈の利、魚鹽の便を專にし殷富繁華の津頭。

◎山頭に一樓閣を構ふ、勝畫樓と扁す、灣中の風光を双眸に收むべく、眞に其名に背かず候。

◎萬松月を藏めて斜に葉間の金を碎き、遠く汀風を含みて鮮かに江上の雪を崩す。

◎直に海上を橫斷すること三十餘町、廣さ百餘間、見渡す限り白砂青松、宛として天橋立の觀あり獨り景の好きのみならず、港內の水靜かに波起たざるは、此砂嘴あ

るが爲なり。

◎金華山は遥かに眉の如く左に秀で、相馬岬は帯の如く右に聯なり滄溟萬里。

◎日本海に面する十里の砂濱、波清き汀には老松蟠屈し、月に驟雨に、一々其趣を異にし、詩人の筆を援くに宜しき處。

◎夏の日本海、波眠りて宛ら席の如し、舟人は心優に、欸乃の聲、柔櫓の聲に和して、沿岸の峰送り峰迎へつゝ、遂に某港に達す。

◎滿身の風露吟魂自ら清く遠く下界を離れて、月の都に上り行くかとばかり疑はる、夜のほのぼの白む頃、船は殘月を帯びて某灣に入りぬ。

◎夜色縹緲の中に、雁の鳴くが如くに聞ゆるは、崖下を漕ぎゆく柔櫓の音なり。

◎萬頃の菱花灣一碧鏡の如く、富岳は灣上なる二島の間に拱

○叙情　叙景　資料

して、某村の人家は碧波の左岸に點綴す、海灣を擁する二岬角、淡きを某崎、濃きものを某岬とす。

○港灣は水清く砂明かに、頗る海水浴に適し、盛夏の候に至れば老弱男女麕集するにて候。

○平砂杳渺として相連なるもの二里許、潮頭雪を捲きて眼界奇絶、風なき日は貝を拾ふに宜しく、東西は茫々たる太平洋、目を極むれども際涯なく、一二の白帆は天地にかすがひするに異ならず候。

○山脚海に出づること二町許、之を某岬とし、海觀を以て名高し、険を冒して其端に立てば、激浪天を洗うて寄せ來り、其岬脚を拍ちて萬雷を一時に震はしめ流石の巨岩も崩れんかの心地。

○舟を賃して鯛の浦に遊べば、風なくして波靜かに、魚は早くも櫓

聲に人の來るを知り、喚喁して舷端に來り、其餌を爭ふ池魚の狀に異ならず、其漁らざるは日蓮上人の禁を守り、相戒しめ今日に至るものゝ由、以て民俗の淳撲を知るに餘り有るにて候。

◎海濱の砂、黒ばみて光澤あり、蛤蜊、櫻貝などの枯殼其間に委し、恰も珠玉を鏤めたるものゝ如く、文彩燦然、人をして愛玩去る能はざらしむ。

◎象の鼻に似たる岬角、怒濤寄せ來る上に峙ち、纔かに蟻の通ふべき細經は、屈曲して懸崖の中腹を巡り、以て隣國に通ず、風雨烈しき日は、固より一歩を此に致すべからず候。

◎地は脆土より成り、岩石之が骨たれば、萬古の波に拍たれ洗はれ、肉つきて骨のみ存し、有らゆる岩石、自ら彫刻の妙を呈し居るにて候。

○叙情 叙景 資料

◎曲汀回浦漁家を綴り出し海驛を隠見せしめ、秋晴の旅路眺め床しく、古歌の『咲き匂ふ千草の浦の潮風に秋はいろ／＼の波ぞ寄せ來る』との趣、此處の浦曲にも適すべく候。

◎灣の盡くる所、丘陵起伏し、蒼海と翠巒と互に天眞の美を競ひ居り候。

◎夜に入れば、漁火遠近天に連なりて星光と相接し、山の人に見せもせば、形容の語を知らざるべく候。

◎地脈延いて海に入る一里餘、奇礁亂れ峙ち、激浪荒れ狂ふ、船舶一たび誤りて之に觸るれば、碎破瞬間を出でず、沿岸第一の難所にして、舟子の最も戒愼する所なり。

◎矮松の翠を凝して砂上に俯する、細波の金を碎きて月前に寄する、舞子の小なる地とも評すべ

く、其富士を望み、鹿野、鋸の山々を見るに至りては、其眺望遠く彼の上に出づべく候。

◎岬上には松樹林を成し、蒼老の態喜ぶべく、岸脚には大小の怪石磊砢、激浪拍てば百雷吼え、細波寄すれば鼓打つに似る之を月下に聞く、殊に宜し。

◎此亦一江津海澨暗礁多きも水極めて清潔、南に岬角斗出して波濤を遮り、婦女子も尚潮水浴を試むを得べし、宜なり、近年都下より避暑の客多く、夏毎に漸く繁華ならんとすや。

◎観濤に名を得し此處、東を望めば水天相接して涯なく、岸には寄せては返す白雪、散しては花となり霧となり、漁舟の風浪を凌ぐもの、飄つては落葉の如く、聚つては群鷗に似たり。

◎翠松の下、白砂の邊、貝拾ふ子網曳く漁夫、波は灣を洗うて緩や

かに、松江の濱を右に、小浦を左に、淡路島を霞の中に望み、眺望佳にして神爽かなるの地。

◎淸爽の海氣は人の襟を洗ひ、浪は船を緩く動かして、或は大きく、或は小さく、或は扁く、或は尖れる、幾十となき岩礁の間を縫ひに縫ひ行く。

◎窟に入れば神靈の氣滿ち、夏と雖も倘冷氣身に逼り、塵界を距ることの遠きを覺ゆ。

◎巖の苔は靜かに波を嘗め、浪は幾度も貝殼を浸す、岸に逼る所、潮水は高低を加へ、船亦動搖を數々す。

◎海を壓する巨巖の、その尖端に從うて一轉すれば、岩石疊々たる上に、削り成す數百仞の絶壁その中腹は深く抉れて洞を成す、水淺きも舟を進むべし。

◎此に遊ぶには、夏の晝によく〳〵月によく、韃韜たる浪の音、松

吹く風の音、來りて耳と心とを洗ふ、人は此世ながらの仙なり。
◎洞窟を擁せる山は海に對し、海潮は其山脚を洗うて涼しく、幾歳月を迎へつ送りつ、浪と語り、風に撲たる。
◎岩に纏ひつく雜木老松、吹き上ぐる海風に矯められ、枝幹共に地を這ひ、たまく伸びしものは下に垂る。
◎古松は白砂の間に偃蹇し、時に仙禽の大空に長鳴し、明月を掠めて過ぐるを見る。
◎岩凹みて僅かに足跟を容る、一歩づゝ蹈みて登るに、漸く滑かにして、進退谷まる。
◎海中には奇岩亂峙し、戟の如きもの、龍の波を起して上天するが如きもの、人の冠して立つが如きもの、一々狀し難し。

◎懷古、遊覽

〇 敍情 敍景 資料

◎人は、皆、春の景色に醉ふのとき杖を古城に曳き候へば、萌え出でし若草にも當年の偲ばれて候。

◎春風に送られて古城の跡訪へば殘礎千年ばかり青苔に鎖されて淋しく、桃花物言はず候も空しく繰返す八百年の昔、

◎春は花、夏は涼み、秋は月よ紅葉よ、冬は雪よと人の步み繁く候も、懷古の淚に袖ぬらす客は稀なるにて候。

◎當年の金殿玉樓今何處に尋ぬべき、桃花老ひ盡して夕日冷かに、牧童の草笛幽かに聞ゆるのみにて、轉た吾をして愁へしめ候。

◎國亡びて山河はあれど、小唄に全盛を謠はれ候ひし、其昔の面影は目に入り難く候。

◎舊趾は、年經るまゝに知れざるも、今に磨せねば一首の名歌。

◎金城鐵壁と賴みし當年、今は何處に在る、廢墟春深うし

て花亂れ飛び、鳥の音悲しく候。
○空しく狐狸の巢となり、秋雨蕭々の夕、鬼火の燃ゆるを見るのみにて候。
○七層の天守閣、歷史に殘るのみにして、今し一片の影もなく、滿目蕭條、唯舊山河のみ恙なく古英雄の地下に於ける感如何。
○見渡す限りの櫻と楓、花は言はずもがな新綠、或は紅葉の候によく、古來の名所にて候。

○一の古蹟も漏すなく、今日は三里の山阪越え、義犬の塚を秋雨冷けき村に訪ひ申し候。
○地形は今尙昔に同じく、山河襟帶の要害宜なる哉、十餘年の交戰に尙落ちざりしこと。
○此地たる最も遠眺に好く房總を雲外に望み、豆相を天末に見る。
○よきもの、餅屋は淋し花の時とは芹舍が眞如堂にての名句、此處

紅葉の眺めも好けれど、鎮守稲荷の前には櫻樹多く、花盛りには下戸の瓢携へ遊ぶに候。

○三重の閣あり、鏤むに金箔を以てす、金閣の稱起る所以、林泉數寄を盡くし、池を鏡湖池と云ふ衣笠山を望み其影を倒に映す、夕佳亭あり、南天の床柱と萩の違棚とは、義滿が當年の驕侈を推するに難からず。

○歌枕として名高き雙ヶ岡は、妙心寺の西北に方れる三箇の丘の稱彼の徒然草の作者吉田兼好の、世を遁れて草庵を結びしは此丘、今も尙その東麓なる長泉寺に、遺蹟を標する碑石、苔蒸したれども千古滅せず。

○花のみに嵐山を說くは俗なり、納涼に紅葉に雪に、一として好からぬはなし、殊に、古刹名蹟の訪ふべきがあり、芭蕉翁ならねど、花の山二町登れば大悲閣、渡月橋

の夕暮亦宜し、

◎梅花に名を得し桃山は伏水の東に在り、豐公が桃山御殿の遺蹟とぞ、南に宇治川を控へ、川を隔て巨椋の池あり、湖の如し、遙かに生駒、金剛の諸山を望むを得。其近くは東に宇治醍醐、西に八幡山崎あり、眼界極めて壯、眺望極めて快。

◎三夜莊は西本願寺の乙第にして、豐太閤が月見臺の舊趾とかや其三夜と稱する所以は、豐公が一輪は山、一輪は水、一輪は杯中に在り、一夜にして三夜の月を賞するを得との言に基づゝ、林泉最も幽邃、閑古鳥も啼きかねまじき心地す。

◎宇治の川霧たえ〴〵に、麓をめぐりて聳ゆるを朝日山と云ふ、山上に菟道稚郎子の墓あり、苔寂びて幾代經にけん、霧は不斷の香を焼き、月常住の燈を掛く

四季折々の花の手向、一入に畏し

〇参天の老杉道を挾み、樓臺低樹千年の歴史を語る、其自然の景趣に加ふるに、幾多歴史的回顧の料を以てするあり、旅客一度杖を曳けば、低徊顧望去る能はざるもの、蓋し故なきに非ざるなり。

〇綠樹蓊鬱たる春日山は東方に聳えて、溫乎なる嫩草山と相並び市街山麓に軒を連ねて、堂塔祠宇樹林の間に隱見し、一幅の畫圖を展開するが如きもの、これを奈良となす。

〇四面溪谷深く、東は百丈、西は七十五丈、南は八十丈、北は三十丈、東西の間に一徑ありて金剛山頂に通じ、途に國見山あり、之れなん山腹なる千早城趾、元弘年間の事ども思ひ出で、徘徊去る能はざりき。

〇朝東風の靜に吹き出づれば、島

根に浪の花を散らし、雲の上に鳴く杜鵑は、夕暮に先だちて過ぎ思ひを殘す。

○詞人此に群遊して月を弄ぶ、陸よりするあり、舟よりするあり、淸風徐ろに吹き來りて、漣漪岸を洗ふ。

○金風涼しくたてば、初霜に磯邊の松を洗ふ、行きかへる海士の釣舟は、散り布ける落葉かとまがひ、漕ぎ寄する大船の帆は、雲かとも思はるべくして、いとも飽かぬ眺めなり。

○輕舟に棹さし、流に泝り、或は杯を洗ひて酌み、或は舷を叩き歌ひ、一夜を明月淸風に縱にす。

○人亡しと雖も功名千古に芳しく兒女も猶餘烈を記す。

○月は古城の一本松に落ち、北風空しく枯木に叫ぶ。

○富士山西に揖し筑波根東に拱し

○叙情　叙景　資料

、武甲信磐二毛の諸山羅拜にして眼前に在るにて候。

○星移り物換り年を經ること抑幾百ぞ、當年の覇蹟杳としてて舊記の徵すべきなく、太郎冠者が城跡とは、土人の口碑に殘るのみ、唯城山と云へば風景佳き所と人に答ふるに候。

○其昔は某氏の立脚地、當時威德を四隣に輝かしたるも夢地は寥々五戸十戸の村となり、城趾を山の一角に餘すのみ、嗚呼英雄幾百年の遺蹟、此に至つて悲慘に堪へず候。

○九十九曲の阪に疲れし身を、山上の一軒茶屋に憩へば、其浦の風光祗席の下に碧波を湛へ、小島の點在する、白帆の往來する、漁家の斷續する、何れも畫中のものならぬはなく、頓に疲勞を慰さめ候。

○一大園池を眼下に見るが如く、造化の好畫幅、雲林の筆を借り來るも、其眞を寫し難かるべく候。

○此山、海を拔くこと八百尺、巓に至りて眼を縱にすれば、低き山には脚下に朝し、群島は水天髣髴の間に點在す、麓より登行十七町、中腹に禪刹あり、亦觀るに足る。

○今日は日本晴、南に伊豆群島を煙波の間に認め、西に富士箱根足柄の諸嶺を淡靄の中に眺め、北には筑波の尖巒を雲際に望み、東には小湊の人家點々として、棊を眼底に散ずるがあり。

○山は遠近によりて淡濃を分ち、海は晴雨に從うて變幻の妙を極め一日の遊にして、能く其全勝を盡すべくも有らず候。

○十三州の峰巒、五州の海灣、とり／＼に顧眄の間に朝し、

其妙趣は詩歌に題し難く、圖畫も之を寫す能はず候。

◯墟は東南に絶壁を控へ、西北に山谷を繞らし、頗る天險、更は高處に上れば、遠近の山河目に落ち、市街の甍は鱗次して脚下に見ゆ。

◯數百里の山水双眸に入り、足を翹げて蹈むべく、手を伸して捉ふべく候。

◯山は故國を圍んで周匝として在り、潮は空城を打つて寂寞として回る、と云ふ劉禹錫の詩が、自ら心に沸き出で候。

◯山重水複疑無路、柳暗花明又一村、と朗吟すれば、山應へ水鳴る、放翁の詩句、今更に靈活を覺ゆるも可笑しや。

◯村童に路問へば、わらびの如き手に、東なる亂峰の中斷せる處を指し、云々と敎ふること明瞭。

◯ふかす煙草の烟の末追ひ、何處

までもゝ眼うつせは、朝月白う空に掛る。

◯青丹よし、奈良の都は荒れはて、伽藍徒に昔の名殘を留め、尖塔朱閣、參差として樹間に隱見す

◯英雄の骨も、朽ちはてゝば土塊に等しく、美人の髑髏時に鋤に觸れて出づるも、誰か當年の花容を認めん。

◯荒涼たる山河、當年の殘楚を覓めんとするも、また得べからず

◯歌舞の地烏雀空しく悲しみ古塔月影の寒きに鎖し、蔓草は武夫の夢を封ず。

◯東流の水、一たび逝いて復返らず、人間の富貴、果して能く幾時ぞや。

◯祇園精舍の鐘、諸行無常の聲に響き、沙羅双樹の花、盛者必衰の色に出づ。

◯夕陽に昔を問へば、悲風千里より來り、荒墳に英雄を弔へば、零

露長へに冷かなり。

〇南都五十年の春、東風吹き荒れて豺狼路に横はり、雲深き吉野の奥、花に涙をそゝぎ、草しげき黒木の宮、鳥に夢を驚かす世のなりゆき。

〇天を仰いで長嘯すれば、天風餘韻を傳へ、山鳴り水湧く、吾れ江山に合するか、江山吾に合するか

〇はや須磨の浦曲に秋風たちて、おき初めたる白露も、分別ありてにや、取分けて古戰場の草にしげく、無官太夫の墓荒れて、虫の音いとど憐を添ふ。

〇蘆花雪を吹く邊に、白鷺の小首傾けて、捨小舟の番する顏なる。

〇夜更けて起る遠寺の鐘聲、烟霧の外に沈み、人跡絶えたる白砂青松の間のしづけさは、梢より落つる露の聽くに聲あるのみなり。

〇茅舍五六戸、樹密竹疎、淸淺の溪流は玉の韻をなして其籬落を繞

る、要するに人寰に非ず○

◎所謂片磚の石、一握の土總べて歷史を語ると云へるもの吾れ此地に於て之を見る○

◎敦盛塚は三の谷に在り、高さ一丈四尺、方四尺許、五層の石塔を建つ、幾年の霜露に曝され、苔蒸して仲々に哀れ深し○

◎北に丘あり、南に海を控へ、古松は亂れて林を成し、這ふものあり、舞ふものあり、走れるあり、跳れるあり、這ふものは龍の如く舞ふものは鳳の如し○

◎砂白松青の間に亭あり、榭あり、臺あり、人の自由に憩ふに便にす○

◎圓山に今朝も來て見る雪見酒、祇園豆腐は廢れて其家なけれども寺院と相接する紅閣珠欄、多くは是れ旗亭、酌むも歌ふもそは自由、花にも月にも涼みにも、絃聲常に絶えやらず○

〇叙情 叙景 資料

◎花は誰が爲に咲く色ぞ、鳥は誰が爲に鳴く聲ぞ、琴韻を送る松風も、吶喊の聲かと疑はれ、木間を罩むる八重霞も、旗指物の影かと怪しまる。

◎花開き花落ち幾變遷、松吹く風に昔を問へど答へなく、逝く春送る溪水獨り咽ぶ。

◎あはれ、白骨をはかなみし人、はや白骨となれり、昨日の現も今日の夢と醒めぬ、今日のうつゝ、また何時の世の夢と醒むらん。

◎遠山の微茫たる、近水の分明たる、一々目睫の間に活畫を展開す、嗚呼、景妙にして詩に寫し難く、情逸にして、酒盡き易し。

◎山水に非ざれば痼疾を醫しがたし、茲に幾日の旅、略吾が心を快にせり。

◎處々に漫遊して、靈を山川に乞ふ。

○寺院、神祠。

○多くの勝地は僧に占められ、寺院ある所、山水必ず佳絶。

○某寺の勝を聞くや久し、詩嚢を肥さんと思ひ、殘月肩に掛け、塵深き都を出で候。

○途上の景色先づ目を慰め、目ざす寺山は、遙かの彼方に寸碧を見はし居り候。

○春風衣を吹いて歩み輕く、雲雀の聲戴きて山の麓に達し候。

○まだ暑からぬ初夏の空、新緑に目を洗ひつゝ、山に歸る老鶯に伴はれ、今しみ寺の門に達す。

○人唆す秋日和、急げと汗かゝぬ心地よさ、八幡宮の華表は紅葉せる林に見ゆるに候。

○境内には、多く櫻、楓を栽ゑ、花時には香雲棚引き、紅葉の頃には錦繡ひき延え、殿堂は畫中に落つるにて候。

◎百八段の石級を攀ぢ盡せば、七堂の伽藍處狹く並び建てられ候て、梵唄人の心を澄しめ候。

◎更に山路辿りて頂に上れば、四顧洞達、麓には城市を瞰下し、足もて踏むべく、磨鏡に似し湖水を隔てゝは、北方一帶の連山を望み、手を伸さば其翠に挹られ申すべく候。

◎遠近の山々は、水光帆影の中に搖曳し、一幅の無聲詩に異ならず候。

◎山脉南に延びて海上に突出す、巉巖磊々怪石起伏し、躍るが如きもの、舞ふが如きもの、千態萬狀端倪すべからず、老松古檜は其間に蒼々として聳え、中に藏する一宇の古刹、高僧泰澄の開基するもの。

◎曹洞宗の一寺院、翠巒繚繞して堂舍を護し古雅幽靜また山水の勝に富むに候。

◎社格は官幣中社、創建以來數兵燹に罹りしも殿宇宏壯清肅人をして襟を正さしむ、境内には古檜老杉、生ひ茂りて雨さへ漏さず、晝も尙暗く神々しく候。

◎天正年間の兵火後、漸を以て今日に至り、結構偉麗舊觀に恥ぢぬ由、本尊の地藏菩薩は世に名高く候。

◎寺は櫻谷の奥に在り、岩に倚りて屋を構へ、泉を引きて浴槽に注がせ、都にては黄金に任するも買ひ難き趣。

◎此寺に登るに二路あり、表阪は甚だ險にして、世に八百八階ありと稱せられ居り、裏阪は上ること二町許にして小平地あり、更に四町にして山門に達すべく、表阪に比すれば稍躋り易く候。

◎滿山楓樹多く、晩秋の頃は寺樓縹緲として錦雲の間に隱見し急湍に映じ、唐賢の

紅葉青山水急流の句は、恰も此境の爲に言へるものゝ如くに候。

◎寺は某山の中腹に位し、某川の上流斜に其東麓を抱き、溪橋を渡れば七曲阪。

◎奥院は更に上方に在り、窟を堂に代へて石佛を安置し、右に小瀑布懸り、左は樹梢より山下を望み、紅塵の飛來するなく、洵に洗心の淨域にて候。

◎寺より滑かなる苔の阪路を登ること二町餘、直に山の人となるを得るにて候。

◎頂上は矚目に富み、遠くは何州何州の諸峰巒を望み、近くは古城山と相對し、脚下なる市街の粉壁歷々目にいり、西方の山の肩よりは、海の白帆も手に取らるゝにて候。

◎某神社と共に名高き某寺は、僧最澄の草創に之れ有り、天台宗延暦寺の末にて候。

○境内は無慮十萬餘坪、本堂、五重塔、念佛堂、觀喜天堂、辨天堂客殿、庫裡、內佛殿、寶藏、鐘樓二王門等、地の高下に從ひて建てられ、一見城郭の如くに候。

○俯瞰すれば奇樹怪石の間に急流曲折して走り、仰ぎ見れば危塔高閣參差として相接し、寫すに筆忙しく候。

○曰く何、曰く何、寺境の名蹟を探り盡すには、一日にして能くすべくも有らず、旅路の序に訪ひし吾輩、固より其一斑に過ぎず候

○社地は某川の清流に臨み、後に丘陵を負ひ、風致深邃

○中堂の西に一株の老杉あり、忍杉と云ふ、又その北に雄鳥羽瀑あり、石を疊みて瀧壺となし、飛泉は三層となりて落つ、此瀑水に浴すれば、肌膚の色を白くするとて兒女の多く崇敬する寺院に

○山門は二重の樓門製、高

さ六丈六尺、桁行十一間、樓上には文殊四天王を安置す、其前面に巍々として聳ゆるは即ち本堂し
○堂は窟中に架せられ、其半は絶壁に突出し、欄に倚りて下瞰すれば、溪水の淙々として琴筑を奏するを聞き、身は仙と化して空中に飛揚するの感あり。
○賽するには、峻阪崎嶇としてとして躋り易からず候。
○既にして山中に入る、送迎する

の奇岩磊々、苔蘚之を覆ひ、老樹に蓊鬱として日光を遮り、溪水幽かに響くも其流れを見ず。
○社地は巨岩重疊、殿守は溪に臨みて造られ、左右に神輿庫、權現社、御供所等あり、此處の人となる迄には、雲に架する棧道を渡り苔に封せらるゝ磴を攀ぢ、人間を距る一里半餘にて候。
○山は岩石より成り、懸崖千仞宛も障屏の如く側ち、岩面に白

き横線ありて、白布を曳くに髣髴たり、故に布引山の稱あるにて、岩腹には洞を穿ちて佛宇を設け、一條の危磴之に通じ賽者を導くにて候。

○山下に茶肆數戸、暖簾は初秋の風に颺りて涼し、是より六百二十五級を石階を登り、二王門を過ぎて本堂に達す。

○香烟立ち騰りて峰上の雲となり、鐘磬緩く響きて登山の客を導くにて候。

○俗に清水の舞臺と稱するは、懸崖に架せられたる拜殿に之れ有り其結構京都の淸水寺のそれに似たり。

○汽車を降れば、青銅の鳥居先客を導き、杉檜の茂れる中に本社を訪はしむ、社格は縣社、祭神は何々、何天皇の元年造立。

○堂は岩壁の中腹を穿ちて設けられ、其下は千仭の幽谷、梯子を懸

けて賽路に充つ、心弱者は堂前の人となり難く候。

◎社地は千年の樹木天を蔽ひ、且つ奇岩怪石に富む、殊に神社の附近は千態萬狀の巨岩磊々、高きものは柱の如く、聳えて松杉の梢を凌ぎ、横はるものは梁に似、倒れて溪水の上に架す。

◎隨身門、御抜橋、袖摺岩、神橋を經、更に雲鎖ざす高き石階を躋りて、鉾ケ岳の下に達す、岳とは名のみ、其實は聳り立つ巨岩にして、鳥居と並び立つにて候。

◎七堂の伽藍並び建てられ、賽路の左右には松樹列植、其間に二十の支院甍を雲に聳えさすに候。

◎寺域は葉山の南に位し、遠近の峰巒を眸中に收むるの外、東は見る目遙けき平原に之れ有り霧深き朝は、糢糊として大海を望むが如くに候。

◎塔は十三層にして鐵馬四檐に

懸り、人語は半天に聞ゆ（ケフノタカキ）○

○潭空しうして月走り（フチノケイヨウ）、澗靜かにして雲多し（タニノケイヨウ）○

○殿堂輪奐（パツ）の美を極め、一見人目を驚かす。○

○松院苔色靜かに（マツアルテラノケイヨウ）、竹房磬聲深し（タケアルヘヤノケウノコエ、トホクキコユ）○

○緑の林に朱の鳥居、一しほ鮮かに見ゆ○

○奇岩重疊して社側に立ち、崩れんと欲するもの、削れるが如きもの、或は縱に或は横に、俯すもの仰ぐもの、眞に天工（ザウソ）の魁偉（イタクスグル）を感ずるにて候、

○社域は青山を負ひ、怪杉喬松亭々（タケキケイヨウ）として社宇を擁し、閑寂高雅（サビシクケダカイ）、自ら神威の高きを仰がしめ、千年の古社たる亦問はずして知られ申すに候。

○堂後より山上に登れば、中腹の右手に地藏堂あり、最も馳眺（ナガムル）するに宜く、遠山近海眼に落つ。

◯叙情 叙景 資料

◯壯なる哉、山上の眺め、快なる哉、山上の眺め、見晴臺の名に背かざるに候。

◯岩層に倚りて佛舍を營み、巨岩又堂上を覆ひ、將に顛墜せんとする勢あり、更に歩を移せば、諸佛の石像斷岸の間に散在し、其數幾何なるを知らず。

◯此社に詣づる人は、必ず身を山上に致せよ（ヤマノウヘニ）、西北を望めば袖ケ浦の白帆點々として閑鷗に似

富士は左に白く、筑波は右に紫にして、朝嵐夕暉（アサアラシユフグレ）幾幅の活畫を眼前に展開し來る。

◯山麓より登れば、三十六級の石階を攀ぢて鳥居に達し、更に左に三十級、右に折れ八十八の石段を拾ひ、初めて本社の前に至る。

◯見渡せば、海波一碧遠く天に接して際限なく、去來の潮脚近く沙灣に白雪を蹴る（ナミノヨスルサマ）、眺矚極めて快豁。

○樹木蓊蔚たる中に、莊嚴なる社殿聳え、僻卿に於ては屢見るを得べからざるの境に候。

○右には嶺上千株の古松あり、左には屏風島を控ふ、長橋を過ぎて幽徑に入れば、松聲波を沸して苔蘚深く、眞に海島の一淨境

○幾年か廢れし山寺、樓門の柱ゆがみ、屋根傾きて倒れんとす、中なる金剛は、尙眼を怒らし、拳を握りて立ちたれど、朱箔はげて木地白くあらはれ、昔ささげたる草鞋も朽ちたる儘に懸る。

○山に倚るの樓門高く、老松の間に佛殿魏然たり、春は櫻に名高く、秋は紅葉の眺め艶に、長樂寺ならねど、又濡るゝに宜し。

○未だ京都に入らずして、天半に人を迎ふるは東寺の五重塔なり、停車場より右して訪へば、年古りし松杉の間に、金堂、講堂、大師堂等あり、池は其形によりて瓢簞

と名づけられ、燕子花多し。
◎黄檗は『唐の眞似して月見哉』と詠みたるが如く、殿堂すべて明の風に擬し、明の亡命者隱元和尚、萬治三年公命を奉じて建立せしもの、禪宗濟北派の總本山なれば、結構の莊嚴なるは云ふも更なり、境內の幽雅と偉麗と擧げて題す可らず。
◎後に山を負ひ、前に宇治川の淸流を扣へ、右すれば龜の石あり、

阪を琴阪と云ひ、其兩岸を山吹の瀨と云ふ、門前は櫻と楓との眺めに富み、庭園のたゞずまい頗る佳趣あり、これ興聖寺の梗概に候ぞ。
◎某寺は某山の中腹に在り、賽路は溪流に沿ひ、危磴十數町頗る峻險を極め、一町毎に石標を立て、栞となす。

書翰文話

○先以て一言

一枚の筆に成れる數行の書、尚よく思想を千里の遠きに運びて吉事を賀し、凶年を吊し、花月に對しては其情を寄せ、山水に遇うては其景を叙べ、相見るよりも却つて情趣の深き場合あり、蓋し墨の匂ひ床しき筆致にあらざれば、爭でか善く手紙の德を發揮し得べき、況して、手紙に待たんとする所の用に千態萬狀、豫め之を擧げ得べからざるに於てをや、固より臨機應變、偏に當事者の活用に任すの外なしと雖も、世に習はぬ經は讀まれぬとの喩の如く巧に書く事の稽古こそ最も肝要なり、今世の青年、英語は巧みならん、算術や理化學も巧みならん、又漢文や國語の一班にも通じ、腹

〇書翰文話

は聊か肥え居らんも、寢食と共に朝夕廢するべからざる、必要の手紙文には其大に飢ゑたるを知る。是に於てか、余は一度ならず兩三度、書翰文例を世に公にしたるにて、此には亦、簡易明晰なる文話を試みんとす、書翰文に飢ゑし人にして之を讀まば、半は之を醫するの藥石ともなるべく、腹肥えし人と雖も、一讀せばなどて効なかるべき。

〇書翰の組織

手紙に上す用事は、固より千差萬別なるも、其一篇の成立する順序としては先づ

第一　冐頭
第二　挨拶
第三　事實
第四　結尾

其餘の條件としては尚

第五　日附及署名

第六　宛名及脇付
第七　追啓
第八　餘白及天地
第九　文字及字配

以上の如くに、示すを得べく、如何なる手紙と雖も此九項目を備へざるはなし、往々、冐頭と挨拶とを見ざる文あるも、そは略したるものなり、書翰文に筆染むる人は場合により、正式と略式とを心得ざるべからず。

更に一言す、正式によりたればとて、其思想を遺憾なく發揮し得るには非ず、略式によればとて、其情景に缺ぐる所ありとは爲すへからず、此處が所謂臨機應變の處置例は最後に示し、文話の終結となさん。

左には、第一項より第四項に對する文話を試むべく、第五項以下は普通の事なれば略し、只文字の事に就ては一言なくてやは。

▲第一　冒頭

冒頭とは、起筆とも云ひ、手紙のかき出しなり、吾人が相會ひしとき、辭儀すると同樣に當る、普通には

○謹で一書を呈し候
○一筆啓上仕り候
○寸箋を呈し候
○一翰拜呈
○拜啓
○肅啓

之を言文一致にすると

○申し上げます
○君に一言を呈します

と云ふ事に相當す、蓋し、今の靑年諸君が要求してやまざるは、言ふまでなき美文的の起筆、左には四季に分ちて一例を示し見ん、他は敏捷なる腕により、幾種にも書き分けられたし。

春の消息の起筆には

○野梅薫る草屋の軒に筆執り、都の君へ參らせ候。

○梅影墨繪を描く丸窓の下に筆試み、月に思ひを運び申して候。

○盆梅かをる都の書齋、筆は拙なくとも、赤き心を墨くろ〴〵と運ばせ申し候。

○春雨の窓に筆執り、花信如何にと伺ひ上げ候。

○春風に托して、一書を千里の君に呈し候。

○追懷多き春宵の雨、暗燈の下に細々筆執り申して候。

○雨絲よりも多き思ひを、落花の窓に一筆執り申し候。

同じ返書の冒頭には

○梅咲く窓よりの御書、鶯の初音より床しう拜讀致し候。

○好じき御文、都の窓に繰返して讀み申して候。

○花の都よりの御筆、草屋の窓に展べつ卷きつ、細讀致して候。

○書翰文話

○初鶯の聲と共に机に落ちし御書、草々に封切り、細々と讀みて候よ。

○花よりも麗しき御筆の跡、御心の匂ひも一字〳〵に露はれ、有り難く再讀、更に三讀。

○五十三驛の春を帶び來し一封の京だより。

○細雨の絲に情思織り成されし御文、小暗き旅舍の燈火に照らさせ、落ちもなく讀み申し候。

夏の消息の起筆には

○青葉の里より、一筆御意を得申し候。

○春の夢を青葉の窓に繰返し、花に盡さざる事ども聞え上げ候。

○逝く春は流水に送らせ、杜鵑聞きつゝ一書を呈し候。

○心結ぼるゝ梅雨の窓に、胸の曇り晴るゝ迄もと、筆借りて聞え上げ候。

○流汗揮ひつゝ、熱は百度以上の

○此處より一書參らせ候。

○夏知らぬ涼しき磯家に筆執り候て、君招かんの此書呈し候。

○溫泉塲の朝、心よきまゝ病中の筆試み申し候。

○島の夏、聞え上げんの一筆、波音さそふ松風の下にて、自慢の一つ二つ書き綴り申して候。

○汽罐の底にも同じき都、暫し團扇休ませ一筆を呈し候。

○谷川の水硯に注ぎ、避暑の山村より一言聞え上げ候。

同じ返書の冒頭には

○初夏の御たより、青葉みづ〳〵しきよりも流暢に、流石は君よと感服致し候。

○盡きぬ名殘の故郷の春、夢繰返せよがしの御書、都の空にて面白く讀みに讀み申して候。

○避暑地よりの御消息。一字一句皆涼しく、御自慢の程甘んじて拜見な致して候。

○谷川清き山村よりの御書、都の窓にて涼しう讀まれ申し候。

○憎き御筆に候も、涼しき事とり〴〵の情景、讀みゆく儘に、町の暑さを忘れ申したるに候。

秋の消息の起筆には

○搖ぎ涼しき書燈の下に筆執り候て、田舍の初秋聞え上げ候。

○風鈴秋を報ずる都の書窓、君に寄せんの書認め申し候。

○涼しき音に鳴く蟲に誘はれ、一筆試み申し候。

○銀河の影流るゝ下にての一筆、遙けき都の君に呈し候。

○清き秋の夜、涼しき月の雫硯に承け筆染め申し候。

○淋しき旅の秋雨、追懷の數々を筆に代理致さすべく候。

○限りなき秋思を、運びかねし筆に托して君に呈し候。

○又しても此頃は如何にと、天翔ける雁に托して一筆。

同じ返書の起筆には

○初秋の御たより、残暑凌ぎがたき都にて、いと涼しく讀まれ申して候。

○厚きみ情を、綾錦を欺く文に織り成され、心淋しき旅の秋を、いといと嬉しく讀まれて候ひき。

○月に執り給ひし御文、此方にては淋しき雨に讀みて候。

○此方よりと存せしに、疊みかけての御書、限りなう嬉しく、心ゆくまで繰返し申し候。

冬の消息の起筆には

○落葉時雨の淋しき窓に筆呼び取り、田舎の此頃一つ二つ聞え上ぐべく候。

○小富士に初雪降れる今朝、此方の事ども一筆。

○木枯に寂びれゆく村より、久々一書を呈し候。

○君に寄せんの一封、雪の山越え郵に托し候。

○凍れる硯に息吹きかけ、此方の雪景色聞え上げんとするにて候

同じ返書の起筆には

○淋しきと思す御地の初冬、妙じき御筆の花に咲き出で、賑かに讀み申したるにて候、

○御書有り難く、小春日和のうら〳〵と、殘菊薫る竹椽にて三復致し候。

○都よりの御書いと懐しく、雪に埋る山家に春來し思ひ致し候。

以上に記せる、往信と返信とに對する春夏秋冬の冒頭語は、僅かに其一斑を示したるのみ、此美文風に倣はんとする人は、其時候と場合とを斟酌し、高尚優美に、而も一點微塵の浮薄なき語を筆に上すべく、次には友へは好かるべきも目上の人、又は俗向一片の手紙には、斯かる語は無用なる事をも知らざるべからず、左には、挨拶語を述べけれども、是も亦此心得あ

らま欲しきものなり。

▲第二　挨拶

挨拶とは、時候の寒暖を叙するノブを云ふ、吾人が相會ひしとき、今日は寒し、今日は暑し、此頃は凌ぎよし、君には達者か、吾々も達者と、互に相陳ぶるに相當す、普通には

○春暖の候益々御機嫌能く
○向暑の時節御全家御揃ひ
○秋涼相催し候處御起居如何
○逐日寒氣相加はり候に何の御障も在らせられず候や

次には、自家の無事なるを陳べて後、漸く本件即ち手紙を書きし目的の事に及ぶ、之が所謂正式、例によりて、四季に於ける挨拶を美文的にもせば。

春の時候のは

○鶯の一聲に春の幕開き、消え殘る雪とも疑はるゝは香ひ零る

る梅の花、十戸の村も賑かに詩の領と相成り申して候よ。

○春尙淺きに處々には梅既に花を試み、調澁りがちなる藪鶯も身を小枝に逆にして鳴く此頃。

○室咲の梅珍らしがりし都の茶人も、一脈の暗香に導かれて、郊外に歩を運ぶ昨日今日。

○往復する文は多くは梅だより、酒に詩に忙しき都鄙の此頃、君が筆は例によりて健なる乎。

○梅が香や乞食の家も覗かるゝ二月の空、君が詩の筆に如何なる詞の花の咲き出づべくや、御近況承りたく候。

○世は櫻の花に埋められ、酒なくてはと浮かるゝ人多き此頃、常には淋しき此處山里、電車通じて一しほの賑ひに候。

○花開けばとて、君いまさねば淋しく、春風は吾が懷には吹き申さず、床しき御たより待つに候

○花笑へばとて、鳥歌へばとて、例の左に氣を取られて過分に酌み、頭腦をやまし給ふべからず

同じ返書の挨拶

○故郷の花も賑かに、往交ひ繁き電車は、都の人を送りてやまぬとや。

○住めば都との諺に漏れず、天には雲雀の曲、地には蝶の舞、世は繪よりも美しく、一歩を門にせば、我有となるにて候。

○花柳をこきませ、樣々に織成せる都の春、御書によりて見る心地ぞすなる。

○仰せの如く、千紫萬紅とりどりの春、御地は分けて自然に富み都の俗なるに似るまじく、況して流麗の御文に、故郷の此頃夢引き易く候ぞよ。

○花に酌み過す勿れとの御注意、御手元拜見とまゐりたく候ぞよ

○御互に達者なのが何よりの事に

て、一春を面白をかしく暮すは都も鄙も同様に候べし。

○花も一時、隅田の櫻も葉とならんとする昨日今日、心も漸う鎮り申し候。

夏の時候のは

○返すに由なき春の光り、山村水郭とり〴〵の興は、僅かに二三首の詩に留まり、早くも杜鵑の世に相移り申し候。

○見渡す限り海よりも深き新綠の世、詩思も淸う相成り候に、木立しげみの御宅は、尙しも眺め宜かるべく候。

○多情の詩人は、未だ花の夢醒めやらざるべく候も、見るからに淸らかなる初夏の景色、是よりは艶なる春の筆、忽ち淸楚の境に入り申すべくと存じ候。

○靜かなる初夏の空、筆硯いよ〳〵御淸健に乎、此方は何れも無事芭蕉の葉伸びて碧雲淸き書齋に

○俳諧試み居るにて候。

○折柄の炎暑、松風波音にまがふ山家も、此頃は凌ぎ難く候を、八百八町の棟瓦、きらきらと鎔けん程に候はんに、讀書三昧に夏忘れ給ふや、如何に。

○昨今の暑さ、何處も同じと存じ候へども、名は水の都と申し候とも、人烟稠き浪花、定めて凌ぎ難かるべく。

○此方は幸に海村、身を松原に致せば暑さを知らず、朝夕は此世の夏を忘れ候位、自由利くものなら、涼しき風を參らせばやと存ずるにて候。

○早くも秋近うなりし此頃、御地も凌ぎよかるべく、吾が住む山家は瀧の音も凄う聞ゆるに候。

●●●●●●●

同じ返書の挨拶には

○花の醉ひ洗ふに宜しき新緑、げに初夏は清き詩の領、薫風衣を吹きて心地よろしく候。

〇都鄙の春、雅よ俗よと自慢しつ嘲りつ、文の往來しげかりしも今は夢にて、涼しき事のとりどり、筆鬪はす夏の盛りに近づき申し候ぞ。

〇然り、艶麗なる春老い、淸楚なる夏來り、詩情をして高尙ならしめし事、貴諭の通りに候。

〇日を經るまゝに暑く〳〵、空より炙らるゝ樣に感じ候に、御恙なしとや、何よりの事にこそ。

〇持病再發の時候と恐れし梅雨も過ぎ、少々の暑さは何の物かはと、今年は至極元氣にて候。

〇海村の夏羨ましく〳〵、此方は朝夕共に一點の微凉動かず、流石は利慾の熱高き都と、其滑中を脫し得ぬを悔ひ申すにて候。

〇涼しき山家の御避暑なればとて朝夕の冷氣は御病體の藥には相成り申すまじく、御油斷は大敵と御忘れ有るべからず候。

秋の時候のは

○暑さ恨みしも束の間、桐の一葉は秋を魁致し、朝夕冷え〴〵しく相成り申して候。

○殘暑も一雨に洗ひ去られ、詩骨も轉た健然を覺え候に、君には此頃を如何に暮し居給ふぞ。

○いよ〳〵友懷ふに宜しき夜と相成り、月明るき野には露しとど蟲の聲は雨よりも繁く候。

○野には綾錦を飾る秋の草花、去歲の此頃は君伴ひし事思ひ、御機嫌伺ひ旁。

○書燈に親しむに宜しき昨今、相變らず御奮勵、日は一日と段々御成功の期に相近づき。

○雁は幾度か江上を過ぐれど、打ち絶えしは御消息、遙けき都の此頃は、生きてか、死にてか。

○秋の夜と共に深くなりゆく吾が思ひ、絶え〴〵なる蟲の聲と同じき筆の運びに候も、

○秋老け、菊も老い候、紅葉も散りて候、北海は既に雪なるべし御身大切にこそ。

同じ返書の挨拶には

○御意の如く、急劇の秋冷、今更夏戀しきも可笑しく候。

○暑さ嫌ひの僕、一朝の涼しさに蘇生の想ひ致し候も、御筆の健なるに似ず、僕は一句も浮ばず平生の怠りは靦面〳〵。

○相變らぬは人間の慶事、時下既に冬に入らんとす、御老人には分けて御保養專一。

○例によりての秋野、蟲鳴き月は草葉の末に宿り、萬顆の珠きらめき、詩人の君をそそのかす由げに去年の同遊懷しく候。

○勉めねど怠りはせず、書齋には日曜の晩と雖も、燈火點さぬはなし、近況知られ候はん。

○都も逐日に冷氣加はり候に、御地は尙しもの事にて候はん。

冬の時候のは

○いとど淋しき山里、夜毎の木枯に夢も破れがち、いよよ君戀しき空と相成り申して候。

○田の畔の枯木に鳴く百舌の聲勇ましく、路には霜の花白き昨今此方は何れも達者にて候。

○淋しき冬の山家も、流石に家庭温かに暮し居り候。

○霰たばしる板庇、榾火燒く爐を圍み、夜毎の樣なる御地の噂。

○雪に名高き北國、寒氣烈しかるべく、さしたる御障りもあらせられずや。

同じ返書の挨拶

○冬は何處も同じく淋しく、殊に雪に明けて雪に暮るゝ此處、只一統無事なのが何よりの幸福。

○仰せの如く、逐日寒氣強より候に、御元氣の由、例により黄犬携への朝の山入、冬なればこそと存じ候。

○都の空にも、ちらほら雪降る此頃、御地の事ども朝夕に御噂致し居りし折柄。

○貴諭の如く、同じ寒さが中にも此處は雪の名所、來年の三月頃迄は春知られまじく。

以上は其大略に過ぎず、而も時候の挨拶以外に渉れる句なきに非るも、そは讀者諸子の取捨を願ふにて、此樣に記しもせば、趣味多き書翰にし得べき乎、との意見に止まるのみ、呉々も文は意を達するに過ぎざれども、其意を達するには、修辭の力を借らでは能はざる事を知るを要す。

△第三　事實

事實とは、書翰の眼目、即ち骨、書翰を出すに至りたる事柄を云ふ單に事實と云ひ、事柄と云へば其迄の事なれども、それと判然示す事叶はず、其大要は前に記せる熟

語文例により、會得するより外なし、今強ひて部門を分ち、便宜上小解を附しもせば、

一　慶賀文の作法

慶賀は吉事を賀するもの、屠蘇に元氣を借りて書く、年始狀は言ふ迄もなく、婚姻、出產、新築、奉職、入學、卒業等は皆この文體に屬す、事實既に目出度しとするものなれば、文句も目出度ものを擇び、文字にも念を入れ、其疎略なきこと、禮服着けて互に祝ひ且つ祝はれもする如き、愼重なる態度の筆を要す。

併し、學友同士が往復するには、其景もほしく、其情も望ましく、年始狀に馬齢を加へ申し候、とのみにては心ゆくまじ、是等は最も美文風に物したきもの、例は既に卷頭に幾多の語句を示しおきたれば其人の腕の冴え加減により、如何樣にも活用し得べし。

○書翰文話

奉職、入學、卒業者等に對しては一概に作法を示し難けれども、受信者が目下にして、發信者が長者ならん乎、祝ふ中にも幾多の訓誡を含ませ、其人をして益〻感激せしむる心得にて書きたきものぞ。

二　哀悼文の作法

平日の交際の深きも淺きも、其人の情の濃きも薄きも、大概この種の文體にて知るを得べし、死は人として免れざる事ながら、其世を辭するにも夭折あり、天命を全うするがあり、非命に斃るゝがあり、眞に人生は朝露の如くにして強ち長幼を以て死の前後の順序とすべからず、不幸にして、くやみの文を草する身とならば、赤心を紙上に寫すが第一にて、書き過ぎぬ樣、書き落さぬ樣、哀悼すべき事柄、其人を惜むべき事、非歎思ひやる事、香奠贈ること等は、一として缺くべからざる事とす。

三　慰問文の作法

慰問とは、普通に云ふ所の見舞なり、時候挨拶の文は思ふ情や見る所の景、縱横に書きなすも面白けれど、失敗せる人や、喪中に籠り居る人や、不時の災難に罹れる人又は病苦に惱む人などに贈る場合は、筆に誠心誠意こもり、詞には温き血の沸くを要す、筆足らずば其人を慰むるに足らず、詞あまりに飾りあれば輕薄に陷り易し、其事柄と其境遇と、自己との關係をも能く辨へ、手紙の德をば損ずまじきぞ。

四　依賴文の作法

依賴と云ふ裏には願ふとの意味をも含めり、文句の上に依賴すべき事件と、其人に依賴すべくなりし事情を明白に、此方の心が先方の胸にしみこむ樣に、詞は簡にして意は深きを要し、年長や目上の人には最も敬意を拂はざるべからず

て、其意思よく通じ、此方の目的も道理に叶はずば、先方は容易く應ずるものに非ず、すべて此文體に臨まば、極めて明正に極めて愼重に、馴れし腕なればと美的のものは却て惡しと知れ。

只賴む〱と紙の百千枚書けばと

五　招待文の作法

人を招きて饗應するには、其事件百も千もあり、要するに是亦親切に認め、花見、月見等は最も風流なる筆致臨ましく、新築披露の如きは最も叙景に巧みなる筆致欲しく、招かれたる人は、其文と書との妙、且つ主人の厚意にほれ〲しく思ひ、他を斷りても喜び車を枉ぐる風に書きたきものぞ。

六　誘引文の作法

花見や月見、さては旅行等の誘引は、例の美文風のを尙べども、學問技藝、其他實利實業上の事に就ては、誘引の理由と事柄とを書き

あらはし、道理上よりも實際上よりも、寸分相違なき確實の筆を要す、筆の確實なるは其事柄の確實なるを證すべければ、先方は賛不賛に拘らず、容易に決心する事を得べきなり。

七　報知文の作法

花だより等のは、如何樣にも面白く書かるべけれど、其他のは順序正しく遺漏のなき樣、極めて正確明瞭に記するを要す、場所、月と日、又時は午前午後の區別の如きは、正確明瞭を要するの一なり。

八　問合文の作法

其問合ふ事件の明瞭を要する事は報知文に同じ、一字の誤謬は千里の相違をも來すべく、僅かなる不注意より、大にしては時機を誤り少にして手數を煩はす、世に其例甚だ多し、他事に渉らず、其事件のみを明白に簡短に認むるは勿論此種の文、問合ひと云ふも其實は

依頼する事なれば、詞を謙遜にし先方には滿足を與へ、喜んで返書する樣に書かざるべからず、受信者は、是亦發信者に滿足を與ふる書を酬いざるべからず。

九　忠告文の作法

最も六かしきは此文體なり、時ありては道理責にし、時ありて諷諭を旨とし、本人の良心に自ら問ふべく悟らしむる圓曲なる筆致が肝要にて、動もすれば激しきに過ぎ又は嘲弄に陥り易く、折角の忠告も水泡に歸する事多きものぞ、苟も人の過失を正し、害を去り利に就かしめ、或は不正を矯め、惡より善に導くが主ならば、自分の品行も學科もすぐれ、他人の龜鑑となるべき人にして、始めて此種の文を書くの資格を有するものぞ。

第十　旅行文の作法

手紙の德は、最も此種の文に於て發揮し得べし、故郷よりするのも

他郷よりするのも、情を寫すに花あり月あり、時に應じての風雨あり、景を寫すには山あり水あり、妙じき筆を有さば、草の葉末に宿る露までが、皆その好資料とも成るべく、假令千里相隔つる、恩情の露はるは、旅中の手紙に如くものあるまじ、父母に寄するものは悲しき事を言はず、面白き筆のぞまし、由なき事ども書き聯ぬるは其心を傷ますに過ぎざるなり。

第十項に分ちし外、謝禮、謝罪、音物、紹介、注文、貸借、請求等に文體を分つを得べけれども、今更筆新らしく作法として示すの要なかるべく、只事柄の明白と文句の叮嚀なるとは、何れの文にも必要と云ふ事を忘るべからず。

▲第四　結尾

結尾とは手紙の書き終り、一文の終尾なり、吾人が相別れんとする

時、さよならと云ふに相當す、普通には、

○草々頓首

○拜復

○恐惶謹言

○先は右まで

○取敢ず御返事のみ

春の消息の結尾には

○盡きぬ名殘を鶯に預け、先は筆とめ申し候。草々。

○餘は何事も花咲く頃にと、一筆の御見舞まで。あら〳〵。

○鶯の聲聞きつゝ、斯くは認め終り申し候。拜白。

○春雨しと〳〵と燈火小暗き落花の窓にて、故郷より。

○故郷の逝く春の形見、封じこみ候へば、此花に問ひ給へと。

同じ返書の結尾には

○御書賜りし翌朝、黄鳥の聲聞きつゝ斯く。

○都の春のかず〳〵書きしるし、

○御返事に代へ申して候。

○折しも杜鵑の一聲雲隱にして、餘韻は西へ流れ申して候。

夏の消息の結尾には

○君が才筆に成れる御便、机上に落ちよかしと待たれ候よし

○書にての思想交換も趣味多きものにて候よ、不宣。

○詩思浮ばず、抔と逃げ給はゞ、重ねて使者立て申すべく候、頓首

○朝顏の露硯に受け、君に寄せんの書斯く。

○眞晝の暑さを松風に預け、磯家の窓にて、草々。

○島の夏自慢かた〴〵、御機嫌伺ひまで、餘は何事も別紙なる日記抄にて御承知をと。

同じ返書の結尾には

○花に名殘の思ひのかず〳〵、若葉の里に繰返して御返事まで。

○積る思ひは山程おはし候も、其

内拜芝、杜鵑待つ夜に細々語り崩し申すべくと、草々。

○涼しき島の御便に、暑き都よりの筆斯くは。

○朝顏の露と洒落れ給はゞ、此方も負けぬ氣になり、松漏る月の雫を硯に受けての御返事まで。

秋の消息の結尾には

○桐の一葉に秋立てる今夜、旅の空より、不宣。

○夕立晴れし草家の秋、語り初むる蟲に伴ひ、涼しき月の下にて

○君が御起居如何にと、斯くは筆執り申して候、萩の宿より。

○斯く書き終り候へば、月の雫ほろ〳〵と零れ申して候よ。

○筆は固より拙なし、足らぬ所は天上の月に問ひ給へと、中秋の夜、故郷より。

○深け逝く秋と共に綾なき筆、書餘は御推察をと、草々。

同じ返書の結尾には

○永き秋の夜も盡きぬ、追懷に短う覺え、今はと御返事の筆とめ申して候。

○今し御返事書き終れば、星一つ東の空へ向ひ流れ申し候よ。

○さま〲の情思、旅舍の酒に付し難く、絲より細き蟲の音に織り成させたる愁、文に綴りて御返事に代へ申すに候、天涯より。

○何事も此處の秋は紅葉に問ひ給へと、只一片を封じこみ、御返事までにと、若しそが君がみ心に響かずば、文にも餘る文して此方の秋聞え上げ申さん。

冬●●●●●●●●の消息の結尾には

○白雲影淡き湖上の村、小春日に筆執りて斯く。

○時下寒し、朝夕に御身大切にと木枯の村より。

○聞え上げ度は、落葉のそれよりしげく候も、書けばとて盡しがたく、先はあら〱。

○雪に籠城しての一筆、餘は何事も來ん春にと、不一。

同じ返書の結尾には

○吾筆も冬枯してか思ふが儘に運ばず、取敢ずの御返書のみ。

○雪の光りに筆執り、御書に答へんとて斯くは。

○筆呵して書き終れば、山窓の燈火に灑ぐ霰の音高く候ひき。

○書き漏したる事共は、盆梅と共に春を待ち申すべくと、拜復。

先以て以上の通りなるべきも、注意を要することなきに非ず、起筆に『野梅薫る草屋の軒に筆執り、都の君へ參らせ候』と書き、結尾に『梅かをる山窓にて』と筆止むるは固より惡し、此を略し、彼を略せず、此も彼も書く場合など極めて靈妙の筆欲しく、茲に一々其例を示し難し、作者の腕の冴ゆるに隨ひ、其適當の取捨折衷の秘訣を會得するに至るべし。

○正式と略式

冒頭と次に時候の挨拶、三に事實四に結尾、斯る順序を以て組み立てられしが正式とは、既に之を陳べたり、略式とは、或は冒頭を略し、時ありては挨拶の語を省き、時に或は結尾の敬語、其他の收筆を用ゐぬ事あり、正式と略式によるは、主として事件の如何によりて區別を生ず、此二樣によればとて、手紙に雅俗の別、又は敬不敬の別、或は趣味の深淺を來すものに非ず、簡潔と云ふ點よりすれば常に略式のものに美的感念を起すもの多し、三四の例左に、

○後るればとて、田舍も春には漏れで梅咲き鶯鳴き……

○君を待ちげの吾家の梅……

○去年名作戴きし庭の櫻、夜來の微雨に雪と咲き亂れ……

○花に飽かぬ身ながら、新緑の眺

め亦清しく…………

〇松風は浪の音を沸かし、溪水は水晶を碎きて流るゝ此處……

〇暫し吾里とする、青松白砂の避暑地…………

〇流石は秋よ、殘暑も退き蟲も鳴き初め…………

〇野は草花の紅紫とり〴〵、詩人待つの風情に候まゝ……

〇待ちし中秋は今宵にて候へば月に棹したく…………

〇湖上の小春日和長閑に、菊殘る寺訪はゞやと…………

〇思ひもよらぬ今朝の初雪、野の橋に二の字着けん企て…………

〇螢雪の御精勵其功を奏し、彌〻大學御卒業の由…………

〇自然の景色を利用しての御新宅此程愈〻御落成…………

〇豫て御內意承りおきし一件漸く相談まとまり…………

先づ斯の如きものなるべし。

○長文と短篇

事實に千差萬別ある手紙、此を長文にせよ、彼を短篇にせよ、と豫め示さるべきに非ず、其長かるべくして長きは、十尋に及ぶも厭はず、尙ぶ所は意を盡くし用を達するに在り、其短かるべくして短きは、三四行にても可、出來得べくは一字にても亦可なり、戒しむべきは、短簡にして意を盡くし用を達し得べきを、殊更に無益なる筆を弄し、浮遊の文句を驅り立てゝ長文にするの弊なり、此弊には、美文風を尙ぶもの、最も陷り易し長文に物せずば、詩的感情に訴ふるに足らずとするも誤りにて、詩的微妙の感は、寧ろ短篇の中に存し、腕冴えし人の筆には、一字一句にして此妙を發揮し得べし、只何事も稽古の結果と知り、蒔かぬ種は生へぬものと悟るがよし。

○書と人品

文は意を達するに過ぎざれども、其意を達するには、尙幾多の修辭を要し、且つ趣味の豐富を尙ぶが如く、文字は意を書きあらはす記號に過ぎざるも、而も巧妙にして麗しきを要す、況や、一片の書萬古の後に傳はり、其人の品格を證明せらるゝに於てをや。文の巧妙なるも、書劣らば見苦しきものなり、文と書とは互に相待つて人品を高め、後生をして景慕の念を生ぜしむるは論なし、書は姓名を記すに足るとの一語は、趣味を尙び、人格を重んずる者の採らざる所、文を學ぶものは、書も亦共に其妙を究めんことを望む。

美文的書翰文辭林（終）

明治四十四年六月五日印刷
明治四十四年六月十日發行

正價金六拾五錢

不許複製

著者 小宮水心

發行者 大阪市東區淡路町三丁目三十九番地 堀徳次郎

印刷者 大阪市西區[illegible]一番地 堀越幸

發行所 大阪市東區淡路町三丁目 振替大阪二三六番 文友堂書店

發賣元 大阪市東區備後町四丁目 振替大阪九九〇八番 金正堂書店